茨が木がまちになった6つの物語

ふるさと茨木連帯編

はじめに

まちづくりといいますが、まちは既にあります。現存しています。

まちづくりというと、大抵は活性化を目標として、人づくりとか、コミュニティづくりとか、挨拶とか、ガンバのサッカー場などの施設開発や循環バスなどのシステム開発、あるいは観光・祭りなどのイベント企画のことをいうようです。

まちというのはつくるというよりも、「深耕する」ものだと思います。なぜ、ここにまちをつくったのか、最初にまちをつくった先達の思いがあります。それをまず深耕することです。旧石器時代にできたのか、縄文時代だったのか、それともももっと後の時代なのか、必ずここにまちをつくった先達の思いがあります。そしてその後の展開があります。そういうものが結節して「まちの原型」ができた筈です。われわれは、まちの原型の中に、まちの未来があると考えています。

まちの原型は、そのまちの存在理由そのものです。これがわかると、まちは活性化するものではなく、そこに住む人々の生活の拠点として安定させることが大切になります。便利にしたり、効率化したり、賑わいを演出したり、人を集めたりすることが最初にあったわけではありません。最初にあったのは生活の安定そのものです。そこには、自然に沿った、役割の見える共同体があったのです。そこでの生活は交感神経ではなく、副交感神経主導です。ゆったりしていて、ゆるやかなふれあいがあって、落ち着いて生きていける状況が大切だからです。生活

拠点としてのまちは、活性化ではなく、安定した生活圏として維持することが大切だと思います。

人間は自然と共同体によって生かされてきました。昭和 40（1965）年を境に、この二つとも消えてしまいました。頼るものがなくなって剥き出しの個だけになっています。煩わしさはあっても、それに勝る生活の律がありました。それぞれの家に何らかの自給自足があり、その過不足を補う贈答があり、自分の役割が見える村や集落や垣内（カイチ）というような共同体がありました。

まちの深耕とは、原型であるまちの存在理由から出発して、役割の見える共同体を再構成することだと思います。ですから、生活している身近な規模での自給自足や協同仕事や助け合いを仕組むことなのです。

茨木というまちを、歴史の時代区分や政治・経済・文化などの個別領域でみるのではなく、全体的で循環的な視点から深耕すると、まちの存在理由がみえてきます。どうして茨木がまちになったのかがわかります。そして、その先にまちの未来があります。

われわれはこの本を、茨木の存在理由を探り、そこから未来を展望するために編集しました。そういう視点でまちを深耕すると、茨木には少なくとも 6 つの存在理由があり、その中から見える未来があります。これは、素人のわれわれが、市民の五感で取材し研究した仮説です。浅学非才は承知の上で、茨木というまちを真摯に確かめてみたひとつの見方です。どうぞ、ご叱正とご助言をいただきたいと思います。

茨木がまちになった６つの物語／目次

はじめに …… 1

ものがたりの序章　茨木という地名：佐藤眞生 …… 7

第１章　生活適地・茨木：佐藤眞生 …… 17
１、旧石器時代から人が往来 /18
２、自然採取の縄文時代に人が定住 /18
３、名水 / 21
４、肥沃な土地 / 24
５、瀬戸内型の気候 / 27
６、植生 / 28

第２章　庶民の聖地・茨木：佐藤眞生 …… 29
１、茨木の神社は市町村平均の３倍 / 30
２、茨木の寺は市町村平均の５倍 / 33
３、地域共同体の要としての神社仏閣 / 33
４、古墳の集積地 / 35
５、北摂の山を拠点とした聖（ヒジリ） / 38
６、石山本願寺方へこぞって参戦した茨木の
浄土真宗門徒 / 39
７、隠れキリシタンの聖地 / 41
８、神様の依り代・樹めぐりの旅
…５つのコース /44

第３章　流通拠点・茨木：京谷信弥 …… 65
１、15 の河川 / 66
２、水路サイクリングコース / 71
３、18 の街道 / 74
４、街道サイクリングコース / 83
５、道路網 / 90

第４章　日本の磁場、時代の先進地・茨木 …… 93
１、銅鐸と埴輪の工房・弥生の先進地三島
　：佐藤眞生 / 94
２、神功皇后の三韓征伐と茨木：佐藤眞生 / 96
３、耶馬台国三島説の証明
　…三島古道歩きコース：梅鉢明英 / 98
４、大織冠鎌足公暗殺説
　…鎌足めぐりコース：忰山紀一 / 114
５、本能寺の変でカギを握った中川清秀
　：福丸孝之 / 142
６、秀吉の朝鮮出兵と茨木：佐藤眞生 / 145
７、家康天下統制のカギを握った片桐且元
　：福丸孝之 / 148

第５章　農と食の革新地・茨木 …… 151
１、神武東征と茨木：佐藤眞生 / 152
２、鉄と銅・産鉄の民のものがたり
　五十鈴媛…うた芝居シナリオ：三村夫美 / 155
　茨木童子…絵本：茨木青年会議所 / 173
３、稲作による国づくり：赤松民男 / 192

4、農地区画の歴史：片山重正 / 198
5、班田収受と条理制：片山重正 / 202
6、新田開発と農民教育・村田季武：片山重正 / 206
7、農業技術の開発・小西篤好の「農業余話」
：赤松民男 / 210
8、台地に水を引いた畑中権内：赤松民男 / 215
9、自給の治村興農の先駆者・大植啓治
：赤松民男 / 217
10、灌漑用水を訪ねる旅：佐藤眞生 / 220

第6章　町民主導の先駆・茨木 …… 223
1、茨木というまちの性格：大橋豪之 / 224
2、共同体としてのまとまり：佐藤眞生 / 227
3、竹管水道の井戸仲間が町民自治を育んだ
：大野幾子 / 234
4、ふるさとって何だろう？：佐藤眞生 / 239

執筆者紹介 …… 244

ものがたりの序章

「茨木」という地名

佐藤眞生

茨木という地名が定まるまでには長い歴史があります。

まず、古事記によると、今の大阪府下一帯（摂津・河内・和泉）を「凡河内国（オオシコウチノクニ）」と呼んでいたようです。これが茨木の含まれている最初の地名です。

次に日本書紀の 241 年の記述によると、難波（ナニワ）の津を中心とした広い範囲を「津国（ツノクニ）」と呼んでいたようです。ここには兵庫県三田から大阪府三島までが含まれています。

そして、天武天皇の時代 685 年に、諸国の境界を確定し、国名を二字に統一することになり、津国（ツノクニ）は「摂津国（セッツノクニ）」といわれるようになりました。摂津の“摂”は執り行うという意味で、“津”は港のことですから、摂津は港としての官務を執り行うところということになります。摂津職という役人がいました。

大化の改新（645 年）以降、郡制が採用されており、摂津国（セッツノクニ）は東西で「島上郡」（現在の高槻市・島本町）と「島下郡」（現在の茨木市・吹田市・摂津市）の二つに分けられていました。摂津国という呼び方は 1871（明治 4）年の廃藩置県まで続き、二つの郡も 1889（明治 32）年の新郡制で「三島郡」と呼ばれるまで続きました。

三島や島上・島下の“島”ですが、湿地帯の中の微高地をいうようです。川が運んできた土砂でできた平野を沖積平野といいますが、その中の微高地を島といったのでしょう。三島は御島ともいわれていたようですが、津国（ツノクニ）の時代からの呼称です。

三島については、島下郡、島上郡、豊島郡の三つのことだという見方もあります。あるいは三つの島というわけではなく、北に老ノ坂・西に千里丘陵・南に淀川を擁する三角形の沖積地平野全体のことで、島を挟んで南北に分けて上・下と呼んでいたという見方もあります。ところがもっと歴史的な見方があります。４世紀初頭・仁徳天皇の時代、百済の斯麻王（シマオウ）が日本に渡来し、淀川を遡り今の高槻市三島江に上陸して生活を始めました。三島とは斯麻（シマ）に美称がついて御斯麻（ミシマ）と称していたのが、養老６年に郡名を二字にせよとの勅命によって三島と改めたのだという説です。

島上、島下がいつから分かれたかははっきりしません。島下郡が最初に文献に出てくるのは 711（和銅４）年なので、律令制以後にふたつの郡に分かれたと考えられます。日本で最初の漢和辞典「倭名抄」（715 年）には島下郡の郷として、新屋・宿人（現在の宿久）・安威・穂積が出ています。

茨木という地名が最初に文献に出てくるのは 1200 年の神国正田地売券で、そこには嶋下郡中条茨木村とあります。しかし、1233（天福元）年頃、嶋下郡を太田郡と呼んだという記録も残っています。また、1449（宝徳元）年の茨木神社の祭神を記した棟札に摂津国太田郡中条茨木村氏神・高林（タカフ）大明神とあり、茨木を含むかなり広い地域が高林（タカフ）と呼ばれていた時期もあったようです。さらに、日本書紀にも「……県主飯粒（イイボ）……よりて上御野……下桑原・竹林（タカフ）の処奉献る」とあります。

茨木村は 1898（明治 31）年の町制の施行で「茨木町」となり、1948（昭和 23）年の市制の施行で茨木町・春日村・三島村・玉櫛村が合併、「茨木市」となりました。

地名の推移

呼　　称	範囲・出展・制度など	時　　代
汎河内国（オオシコウチノクニ）	大阪府一帯	古事記
津国	兵庫三田～大阪三島	日本書紀　241年
津国　島上郡・島下郡	郡制、島下郡に茨木・吹田・摂津	大化改新　645年
摂津国	港の官務を行うところ	685年国名二字に統一
島下郡中条茨木村	神国正田地売券に茨木初出	1200年
太田郡		1233年
太田郡中条茨木村氏神高林大明神	茨木神社棟札に高林（タカフ）	1449年
三島郡	島上・島下両郡合併	1896年
茨木町	町制	1898年
茨木市	市制	1948年

さて、“茨木”という地名の由来ですが、これには複数の説があります。

一つ目は、平安時代初期（809 年）の平城天皇の時に、征夷大将軍坂上田村麻呂が茨木を巡察し、荊（イバラ）の荒野を切り倒して田畑を開拓させたことから、荊切（イバラキリ）と呼ぶようになり、これが茨木となったという説です。ちなみに、茨木は長い間勝尾寺の寺領であり、780 年の勝尾寺文書には荊切と出ています。

二つ目は、日本霊異記に、島下郡味木の里と出ており、これをウマキと読み、訛ってイバラキとなったという説です。味木は馬棚（城）のことで、馬が茨に転化して、ウマキ→ウマラキ→イバラキとなったとみるわけです。

三つ目は、吉田充義氏の地形分析からみた説です。イは接頭語、

バラはザルの目の荒いことから荒地を意味し、キは区分を表し、川沿いの荒地を意味するイバラキとなったというものです。

四つ目は、中村修氏の説です。淀川右岸の茨木と左岸の茨田（マンダ）は縁深く、茨田一族が茨木なる地名の由来だという説です。茨田一族はホムタ・オクシマ戦争（仲哀天皇没後、腹違いの息子が後継者争いをした王権内部の内紛）で三島地域に派遣され、秦人（ハタヒト）を使って茨田堤（マンダノツツミ）を築き、茶臼山の被葬者ともいわれる氏族です。彼らは飯盛山を神体山とし、北河内を本拠にしていました。

マムタ（茨田）とイバラ（茨）は、馬の国を意味する馬羅（マンラ）が語源で、これがマンラ→マンダと変化し、さらに、マンラ→ウマラ→ウマラキ→ウバラキ→イバラキとなったというわけです。北河内は古来馬の飼育地といわれています。

五つ目に、室町時代茨木城を中心に摂津国東部の領主であった茨木氏が由来という見方もあります。一族の茨木長隆（伊賀守）は細川晴元に仕えた武将です。また、白井河原の合戦で和田惟政とともに池田氏に敗北した茨木重親（佐渡守）は織田信長に臣従していました。

六つ目は、大字名の茨木が由来という見方です。少なくとも1896（明治29）年に島上・島下両郡が三島郡と改称された時点の茨木村には66の大字がありました。その中に茨木があり、その大字茨木の梅林寺に郡の役所がおかれていました。郡の役所の所在地が村や町や市の名称として使われたというわけです。

図1
大字位置概略図

出典：「わがまち茨木　地名編」

七つ目は、一つ目の坂上田村麻呂とかかわりがあります。ただし、年代が異なり内容も違います。

平安中期の漢字の音訓を注釈した「和名抄」に、「茨城牟波良岐国府」と出ていますが、これは「茨城は牟波良岐と読み、国府があったところ」という意味です。国語学会では、古代のパ音が奈良時代以降にはファ音となり、江戸時代以降にはハ音になったとされています。この定説からすると、平安時代中期、牟波良岐は「ムファラキ」と発音されたのではないかと推察できます。これがイバラキに転じたと考えられます。

そこで牟波良岐とは何かが問題ですが、日本書紀巻 17 の継体天皇の記述に、「遂に一男を生む、是を天国排開広庭尊（アメノクニオシハラキヒロニワ）と為す」とあります。後の欽明天皇です。この「開」は、「波羅企」であり、天下を開拓し広大な耕地を造成するという意味であり、「ハラキ」と読みます。牟波良岐は開拓という意味なのです。

市史によると茨木村は大同 2（807）年に坂上田村麻呂が造ったことになっており、茨木神社由緒書では坂上田村麻呂が茨木村を造った時に天石門別（アマノイワトワケ）神社が鎮座されたことになっています。

坂上田村麻呂は、延暦 16（797）年と同 23（804）年の二度にわたって征夷大将軍に任命されており、この二度目の征夷大将軍拝命の折に摂津・和泉を巡察しています。巡察の目的は天皇の狩猟のための行宮地（宿泊・休息地）探しでしたが、開拓地・入植地調査でもあったようです。といいますのは、この時代は東北地方平定に眼目があり、征伐とその後の統治ならびに入植・殖産要員の確保が要諦だったからです。坂上田村麻呂は茨木村をその開拓・入植地として決めたのでしょう。

天石門別神社の祭神は天手力男命（アメノタジカラオノミコト）ですが、この神は天照大御神を大岩を動かして天岩戸から外へつれ出した神であり、門の神、

天石門別神社

開拓・開発の神とされています。恐らく、坂上田村麻呂が開拓・入植の地と定めた茨木村は安威川と茨木川の度重なる氾濫によって相当の荒地だったのでしょう。ですからその開拓・開発はかなりの辛苦を伴うものだったと思われます。その辛苦の努力が地名となり、それを支える神の鎮座となったと思われます。

茨木村は戦国時代末頃までは、どこにでもある何の変哲もない農村でしたが、今日のような市街地の中心となった背景には戦国時代末に内堀・外堀を備えた総構えの城下町が形成されたことにあります。茨木における総構えの城下町は日本の先駆であり、それ故にその後豊臣政権の北摂における要地となったものと思われます。

八つ目に、初代茨木市長の高島好隆氏のイバラキ・アイヌ語

語源説を取り上げておきます。イバラキはアイヌ語でウバラキといい、このウバラキの「ウ」は群れをなすという意味、「バラ」はバラバラになるという意味、「キ」はするという意味、つまり、集団をバラバラにして殺してしまうというのだそうです。イバラキに大勢いた土クモを追い詰めて皆殺しにしたことが地名になったというわけです。

［参考文献］

「わがまち茨木　地名編」 1985 年
「古事記」 712 年　「日本書紀」 720 年
「茨木と茨田 ―茨木地名の由来を考える―」 中村修（「野いばら」連載）
「大和の証明　女王卑弥呼の属国と末裔」 梅鉢明英
「私本いばらき風土記」 高島好隆
「地名と風土」 梅原猛

第１章

生活適地・茨木

佐藤眞生

茨木がまちになった最大の理由は生活適地だったからです。衣食住を含めて生活しやすいところだったのです。

１、旧石器時代から人が往来

旧石器時代は、紀元前 100 万年から 13,000 年の時代です。日本列島は大陸と陸続きで、人類はまだ定住しておらず、食糧となるマンモスやナウマン象やオオツノジカを追っていました。茨木は獣が寄り付く場所だったのでしょう。

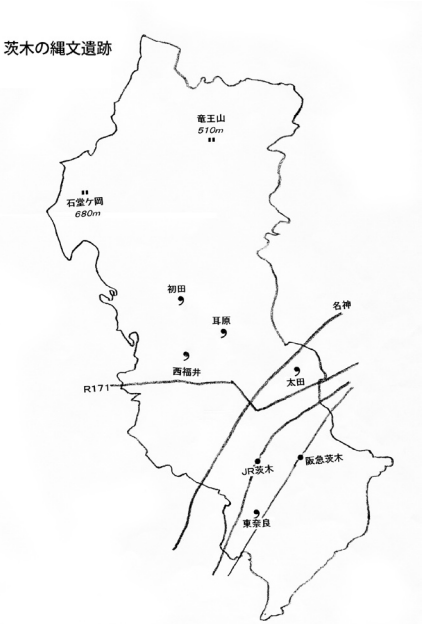
茨木には紀元前２万年頃の旧石器時代後期の遺跡があります。「郡遺跡」（現在の畑田町）からは有舌尖頭器（ユウゼツセントウキ）といわれる槍先が発掘されています。「太田遺跡」と「新庄遺跡」からはナイフ形打製石器が出ています。獣を獲るために必要な道具類です。

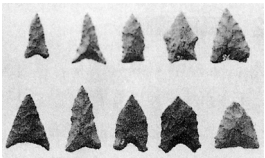
２、自然採取の縄文時代に人が定住

縄文時代は紀元前 13,000 年から約 10,000 年続いた文明です。縄文人は自然の産物を採取して生活していましたが、竪穴住居をつくり、集落を形成して定住していました。

自然採取で定住できたということは、余程生活に適した条件がないと無理です。茨木にはそのような生活適地としての条件が揃っていたのでしょう。

「東奈良遺跡」からは紀元前6,000年～5,000年（縄文前期）の土器が出ています。「太田遺跡」と「初田遺跡」（現在の山手台）からも紀元前4,000年～3,000年（縄文後期）の土器が発掘されています。そして、「耳原（ミノハラ）遺跡」からは集落跡と土器、子どもを葬った深鉢棺16基、石鏃（セキゾク）といわれる矢尻が発掘されています。さらに、「牟礼（ムレ）遺跡」（現在の中津町）からは土器とクルミが出ています。





東奈良遺跡（上）
耳原深鉢棺（右下）・石鏃（右上）

出典：「茨木の史跡」

土器は食べ物の煮炊きに使われていました。生で食べていたものを、煮炊きできるということは、食生活の幅を広げ、その質を高めます。しかも、土器を持ちながら移動することは至難ですから、同じ場所に定住して生活していたことを示しています。また、煮炊きに使った土器は、耳原遺跡の深鉢のように夭折した子どもの棺としても使われました。縄文人はこの深鉢を戸口の下に埋め、母親がこれを頻繁に跨いで通ることで、子どもが再びこの世に生まれ出ることを祈ったといわれます。

これらの縄文遺跡はすべて茨木川と安威川の川沿いにあります。二つの川は北から南へ流れていますが、その東側か西側に縄文遺跡があります。遺跡はムラの跡ですが、ムラは少し高台にあります。これで川を汚すことなく、飲み水を得ることができます。そして糧としての魚介類を獲るにも好適です。さらに川辺にやってくる動物の狩猟も容易だったと思われます。そして何よりも縄文人の主食は植物でしたから野草をはじめ、ドングリやクルミなどの木の実も豊富だったのでしょう。

縄文時代の集落の最小単位は１戸から３戸、その集落が 10 前後まとまって村落が形成され、３～５の村落が集まってひとつの地域としてくくられていました。集落の生活領域は２～３キロで、これが植物採取圏になっていました。村落の生活領域は約 10 キロで、狩猟・漁労・協同作業圏だったと思われます。日本の縄文遺跡は８万ヶ所といわれていますが、青森県の三内丸山遺跡（遺跡面積 39ha ＝ 39 万㎡）のように巨大な遺跡は別にして、殆どの遺跡は極めて小さな集落です。ですから、それが茨木にまとまって存在しているということは、茨木の生活適地

としての特徴を雄弁に語っていると思われます。

茨木の縄文遺跡は、これに続いて弥生時代の遺跡と重なり、さらに古墳時代の遺跡と重なっているものが殆どです。後世まで生活適地だったことが窺えます。

遺跡の年表

遺跡名	時期年代	発掘の内容
郡	紀元前20000年	有舌尖頭器
太田、新庄	同上	ナイフ形打製石器
東奈良	紀元前6000～5000年	土器
太田、初田	紀元前4000～3000年	土器
耳原	同上	集落跡、土器、深鉢棺、石鏃
牟礼	同上	土器、クルミ

［参考文献］
「茨木の史跡」 茨木市教育委員会　1998（平成 10）年

3、名　水

茨木は名水のまちです。水がいいのです。いい水があるということは生活適地の絶対条件です。

茨木は、北が標高 680m の石堂ケ岡と 510m の竜王山を擁する老坂山地、南が大阪平野に属しています。東西 8.6 キロ、南北 17 キロの細長いまちです。北西から勝尾寺川と佐保川、この二つの川が合流する茨木川が南へ流れています。そして、北東から南へ安威川が流れています。

茨木の名水は伏流水です。伏流水とは雨や雪が大地に浸透して地下を流れる水のことをいいます。茨木の水は川になって流れる表流水も地下を流れる地下水も北から南へ流れます。そして、伏流水はあちこちで湧き水となって表れます。

（１）島下郡の三名水・茨木の五名水

文政年間（1818 ～ 1829 年）の「在旧記」に茨木の五名水が書かれています。

① 白井…佐保川と勝尾寺川の合流地点よりやや下流の幣久良山（テクラヤマ）付近の白井河原。
② 赤井…福井麒麟山真龍寺。赤は閼伽（アカ）で仏に捧げる霊泉のこと。
③ 青井…宿久庄紫金山如意寺、現在の慧光院（エコウイン）。
④ 黄井…下井町。
⑤ 黒井…天石門（アマノイワト）神社。茨木城主中川清秀が織田信長（1579

年）と羽柴秀吉（1583 年）に黒井の水で献茶。大正天皇が陸軍の演習観戦の後梅林寺に仮泊の折（明治 44 年 11 月）黒井の水を献上。

　黒井・赤井・青井はある時期、島下郡の三名水と呼ばれていたようです。

（２）茨木の名泉

① 玉の井…疣水磯良（イボミズイソラ）神社。別名便（ヨルベ）の水、疣水さんのお神水（コウズイ）。神功皇后が三韓征伐出征の折に玉の井で顔を洗うと顔に疣ができ、凱旋して洗うと元の美形に戻ったという伝説がある。

② 山ノ井…清水２丁目の春日神社。別名桃ノ井・月の清水。清和天皇が勝尾寺へ行幸した折（871 年）、村人が山ノ井に桃の枝を挿し観月の興を添えたことから別名があるという。

③ 釜谷（カマヤ）の甘泉…五日市。田圃の中にある湧水。明治天皇の陸軍演習観戦の折（明治 20 年２月）に太田と幣久良山の野立所で献茶。

（３）現在の茨木の名水

○ 疣水さんのお神水

　現在も湧水しており、朝６時から夕方６時まで、一人 10 リットルを限度にお神水を汲むことができる。ただし、汲んだ水は神前に入れ物の蓋を開けて捧げてから持ち帰る慣わしになっている。

疣水神社のお神水

○ 泉原（イズハラ）の湧き水

大阪府道余野茨木（110 号）線を、ふれあいの里動物村を左に見て右折し茨木高原ゴルフへ向う途中、左へ西谷林道を２キロ入ったところにある。林道を整備し、水質試験も行い、泉原自治会のみなさんが管理している。ここは茨木の最高峰石堂ヶ岡の麓で、三ヶ所の岩場から湧水している。志納金箱が置かれている。

［参考文献］
「わがまち茨木　水利編」 茨木市教育委員会　1991（平成３）年

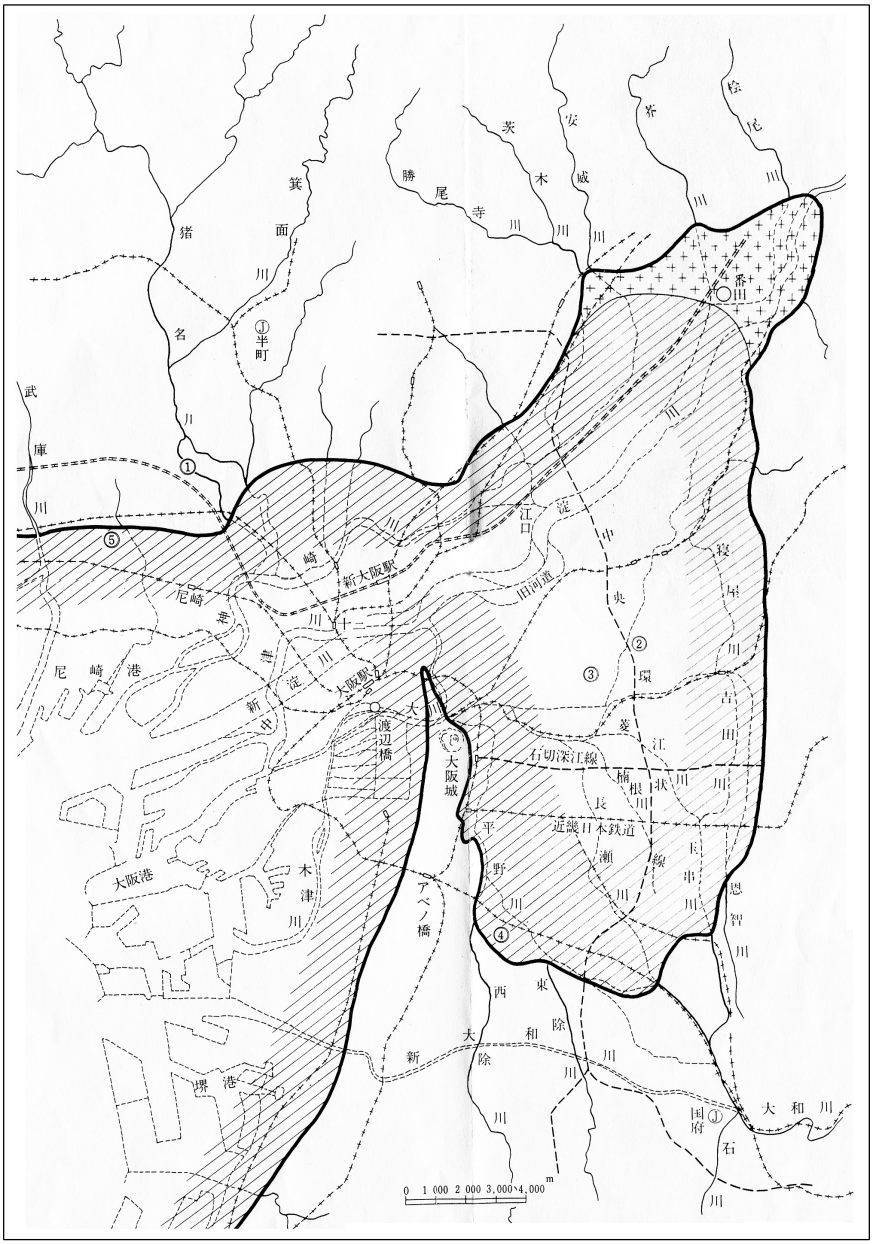
４、肥沃な土地

茨木を荒地とする見方がありますが、実は茨木の土は肥沃です。土がいいというのも生活適地の絶対条件です。植物にとっても動物にとっても土がいいことはその生育に不可欠だからです。

紀元前 7,000 ～ 6,000 年（縄文早期）、ＪＲ茨木駅は勿論、合流工事で安威川と茨木川をひとつにした田中町の辺りは河内湾という海の中にありました。ですから茨木の山間部と海岸線はかなり近接していました。河内湾が大阪湾といわれて現在のような姿になるのは紀元前 10,000 年の頃です。

河内湾Ⅰの時代（約 7000 ～ 6000 年前）

「続大阪平野発達史」梶山・市原、1985 による



茨木の地質は、山地が頁岩（ケツガン）やチャートなどの古期堆積岩類、丘陵地が砂や礫や強酸性の海成粘土層、沖積地が洪積世後期の河川運搬砂礫になっています。

その土壌は、山地が褐色森林土壌、丘陵地が赤黄色土壌、沖積地がグライ土壌といわれています。

さらに、茨木には北春日丘・桑原・太田・下中条・総持寺あたりで、紀元前 500 万年～ 6,300 年の時代の火山灰が確認されています。その火山灰の起源は、小豆島の寒霞渓・ウツリョウ島オキ・キカイカルデラなどではないかといわれています。

茨木には 15 の河川がありますが、これが北の山間部から南の平野部へ流れています。河川が山の肥沃な土を平野部に運びます。とりわけ、洪水は肥沃な土を下流へ運ぶ自然の大きな営みです。

茨木の主な洪水をみると、1650 年の茨木川、1868 年の淀川、1896 年の安威川・佐保川・茨木川、1903 年の安威川・茨木川、1917 年の淀川、1932 年の茨木川、1935 年の茨木川・安威川、1967 年の安威川（北摂豪雨）とかなりの頻度です。人家や田畑への被害も甚大でした。茨木は洪水対策として、1949 年に茨木川と安威川が最も接近している田中町で合流工事を完成させ、現在は安威川ダム計画が進んでいます。

洪水とダムについて、アメリカのペンシルバニア州で実際にあった話をご紹介しましょう。ブランデワイン川の洪水防止のダム建設をめぐって長い間賛否両派が訴訟まで行い暗礁に乗り上げていました。そんなある時、一人のインデイアン青年が「お互いに洪水は善か悪かを考えてみてはどうだろう」と提案しました。そこで、両派は検討を始めたそうです。両派は「洪水は善である」という結論に達しました。洪水は何年かの間をおい

て上流の肥沃な土を下流に運ぶ自然の営みだから、洪水域に人が住むのは間違っているというのが、その根拠でした。そこで、州では「洪水域に家を建ててはいけない」という法律を制定して、洪水域にある家の退去を命じたというのです。

５、瀬戸内型の気候

茨木は瀬戸内型の気候といわれています。

1961 年から 1970 年までの実測によると、茨木の気候は次のようになっています。最近は人間の自然破壊によって異常気象が続いていますので、現在のデータとはかなり違っているものと思われます。

年平均気温は、平野部で 15 ～ 16℃、山間部で 12 ～ 13℃です。気温は標高が１００ｍ上がる０．６℃くらい低くなるといわれますので、平野部よりも山間部が低くなります。

年間降水量は、平野部で 1,000 ～ 1,350mm、山間部で 1,400mm です。月別では、12 ～ 1 月が 50mm で最も少なく、６月が最も多くなっています。８月は小雨です。

平野部は温暖で、山間部は寒冷というほどではなく中間的といえます。農林作業や日常生活にとって非常に暮らしやすい気候です。

6、植　生

植生というのは、その土地に元々どんな植物が自生していたのかという特徴です。茨木については 1978 年当時のデータがみつかりましたのでご紹介します。

当時既に農地化や市街地化が進んでおり、陶土の採掘や薪炭材としての森林伐採もあって、北摂の森林の殆どは代償植生になっていました。

山地ではモチツツジ・アカマツ・コナラ、丘陵地ではモチツツジ・アカマツ・カナメモチ・コジイ、そして台地と沖積地ではナナメノキ・クスノキ・ムクノキ・エノキが植生として確認されています。

自然植生としては、山地の急斜面にシラカシ、尾根にシキミ・モミ、渓谷沿いにイロハモミジ・ケヤキが確認される程度です。

［参考文献］
「大阪平野のおいたち」 梶山彦太郎・市原実著　青木書店
「茨木の自然」“戦後に調査された茨木の地質” 中沢義明
「茨木の自然」“茨木市で見られた火山灰” 中沢義明
「大阪層群」 市原実編著　創元社
「バック・カントリーをめぐるとっておきの 14 の話」 芹沢一洋著　岩波書店
「日本植生誌　近畿」 宮脇昭著

第２章
庶民の聖地・茨木

佐藤眞生

茨木は庶民の聖地です。聖地というのは、身の引き締まるような自然の条件が揃っていて、そこにいると穏やかで厳かな気持ちになれる場所です。聖地には神社や寺が建てられます。古墳も聖地を選びます。

１、茨木の神社数は市町村平均の３倍

1985（昭和 60）年の茨木市の調査によると、当時茨木には 49 社 69 座の神社がありました。ほぼ同じ頃の日本全国の神社数は 79,000 座、市町村数は 3,255 でした。市町村平均の神社数は 24.3 座です。何と茨木にはその 2.8 倍の神社がありました。

古来神様の数え方は「柱（ハシラ）」でした。１柱とか２柱と数えました。律令の施行方法を定めた延喜式（905 ～ 927 年）ができ、その中で多くの神社を統制するために神名帳というのが作られます。そこでは神社は「社」「座」と数えられました。同じ名前の神社はいくつあっても１社、それぞれを１座・２座と数えました。

茨木には延喜式神名帳に載っている神社が 11 社 13 座あり、すべて今も現存しています。

新屋坐天照御魂（ニイヤニイマスアマテルミタマ）神社・１社３座、須久々（スクク）神社・１社２座なるも１座春日神社に改称、春日神社・元須久々神社、阿為（アイ）神社、太田神社、牟礼（ムレ）神社、天石門別（アマノイワトワケ）神社、溝咋神社、井於（イオノイノヘ）神社、幣久良（テクラ）神社・現在阿為神社に合祀、佐和良義（サワラギ）神社。

これは明らかに茨木が聖地であることを示しています。では聖地とはどんな自然条件を備えた場所なのでしょうか。

縄文人は恵みをもたらす全てのものを神とみていましたから、自然そのものの中に神が存在しました。とりわけ太陽信仰が強く、日の出に生を日の入りに死を感じていました。聖なる場所はこの日の出と日の入りに強い影響を受けます。最初は神の家としての神社はなく、神奈備（カムナビ）や三諸（ミモロ）と呼ばれる山、神籬（ヒモロギ）と呼ばれる木、磐座（イワクラ）と呼ばれる石に神が降りてくると考えていました。その山や木や石は春分と秋分の日の出と日の入りを拝むことができる東西線になければなりませんでした。そして同時に冬至の日の出と夏至の日の入り、夏至の日の出と冬至の日の入りがそこから拝める場所でなければなりませんでした。後に自然物以外の御神体を納めるために社殿が作られるようになってからも、殆どの神社はこのどれかの線上に建てられました。そして本殿は勿論、御神体も南面しています。茨木の神社もその殆どがこのような配置になっています。

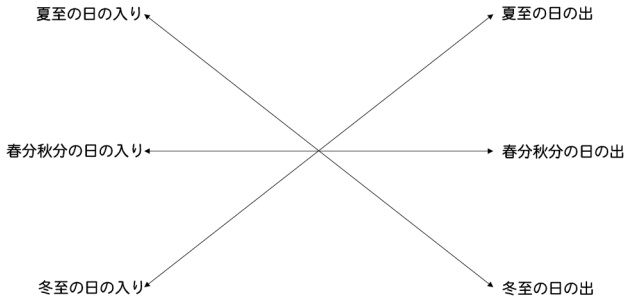
日本書紀にも、東西線を日の縦線、南北線を日の横線として、村を定めたという記述があります。これが自然暦です。そして、日の三天として夏至・春分・冬至の太陽の運行をあげています。これが暦の基です。夏至は昼が最も長くなる日、冬至は夜が最も長くなる日、春分と秋分は昼夜が等しくなる日です。勿論北

須賀神社の注連縄と鳥居

半球でのことですが……。

注連縄（シメナワ）は暦を知る目印です。

鳥居は太陽の昇る東南の方向に向けられ、日の出の観測を行い、太陽の出没を拝む門です。単なる神社の入口ではないのです。



［参考文献］

「日本書紀」 720 年

「神社の系譜」 宮元健次　光文社　2006 年

「わがまち茨木　神社・仏閣編」 茨木市教育委員会　1991 年

２、茨木の寺は市町村平均の５倍

1985（昭和 60）年の茨木には 95 の寺がありました。全国には 64,954 の寺がありましたので市町村平均の寺の数は 20 です。茨木にはその５倍近い寺がありました。

これも凄いことです。寺もどこでもいいわけではなく、聖地を選んで建てられました。仏教には西方浄土という思想がありますから、西の日の入りを拝む配置が必要です。寺のあるところも聖地です。

［参考文献］
「わがまち茨木　神社・仏閣編」 茨木市教育委員会　1991 年

３、地域共同体の要としての神社仏閣

神は人類が地球上に現れたその時から存在していました。人類は人知の及ばない自然そのものを神とみたからです。神というのは、一門一族の守り神であり、生まれた土地の守り神であり、一定の土地を支配する神でした。しかし、もっと現実的に考えると、人間は本来欲望のままに生きるズボラな生き物ですから、放っておくと必ず間違いを起こします。何か畏怖すべき絶対的な律(掟)が必要です。それが神だったのです。その律(掟)を節目ごとに思い起こさせ、間違いを起こさないように、それを守る神事が必要だったのです。神事の中心は祭りですが、こ

れは人間と神の間（マ）を釣り合わせるマツリアワセだったのです。

対して仏教はインド起源のガウタマ・シッダールタ（釈迦）の教えが６世紀半ばに日本に伝わったものです。すべてが移り変わる無常を知り、中道に生きること、そのために慈悲を与えることを説きました。寺は仏を祀って、道を修め、人間の悩みを解決する場でした。元々寺は地域共同体の中で、教育と福祉と芸術・文化という役割を担っていました。ですから、寺子屋があり、僧医がおり、奉納芸や勧進興行がありました。葬礼は明治末期までは地域共同体の葬式組が差配し、寺もその一関与者でした。地域共同体が崩壊すると、教育は学校へ、病は病院へ、芸術・文化は劇場へと機能分与されてしまいます。そして、寺には葬礼だけが残ったわけです。

とはいえ、聖地にある神社と寺は地域共同体の精神的な絆でした。住民の精神的統一の象徴でした。平安時代から江戸末期までは、神と仏は表裏一体と考えられ、神前で仏事を行う神仏習合が一般的でした。

これが明治初年に神仏分離が進められ、神と仏は別のものということになります。神社祭祀と仏事は全く違うものとして仕分けされてしまったのです。

［参考文献］

「葬式革命」 佐藤眞生　かんぽう　2006 年

４、古墳の集積地

古墳というのは３世紀後半から７世紀前半に造営された、身分・地位の高い人の墓です。一説によると、稲作を進めるための新田開発や池づくりを行った豪族が、それらを見渡せる場所に古墳を造営したといわれています。しかし、それだけではなく天皇陵や朝廷の高官の巨大な古墳もありますし、一族の集団墓としての古墳もあります。

茨木は日本でも有数の古墳集積地です。４世紀前半から７世紀後半にわたる 15 の古墳群があります。これだけでも日本の丹田（タンデン）を感じさせる雰囲気があります。

継体天皇陵とされている太田茶臼山古墳は全長 226 メートルで、濠を持つ前方後円墳です。継体天皇の没年（６世紀中頃）と茶臼山古墳の築造時期（５世紀代）が符号しないという点から高槻の今城塚とどちらが継体天皇陵かを争っている古墳です。

大型の前方後円墳として、全長 107 メートルの将軍山古墳（４世紀前半）と、全長 102 メートルの紫金山（シキンザン）古墳（５世紀）があります。さらに前方後円墳ではありませんが、南北 82 メートル・東西 86 メートルにわたって溝がめぐらされた円形の大型墓域、阿武山古墳（７世紀後半）があります。横穴式石室の壁と床に漆喰（シックイ）が塗られ、排水溝があり、聖徳太子廟と同じ夾紵棺（キョウチョカン）があり、棺の中の漆塗・玉枕・金糸の衣服などから藤原鎌足の墓ではないかといわれています。

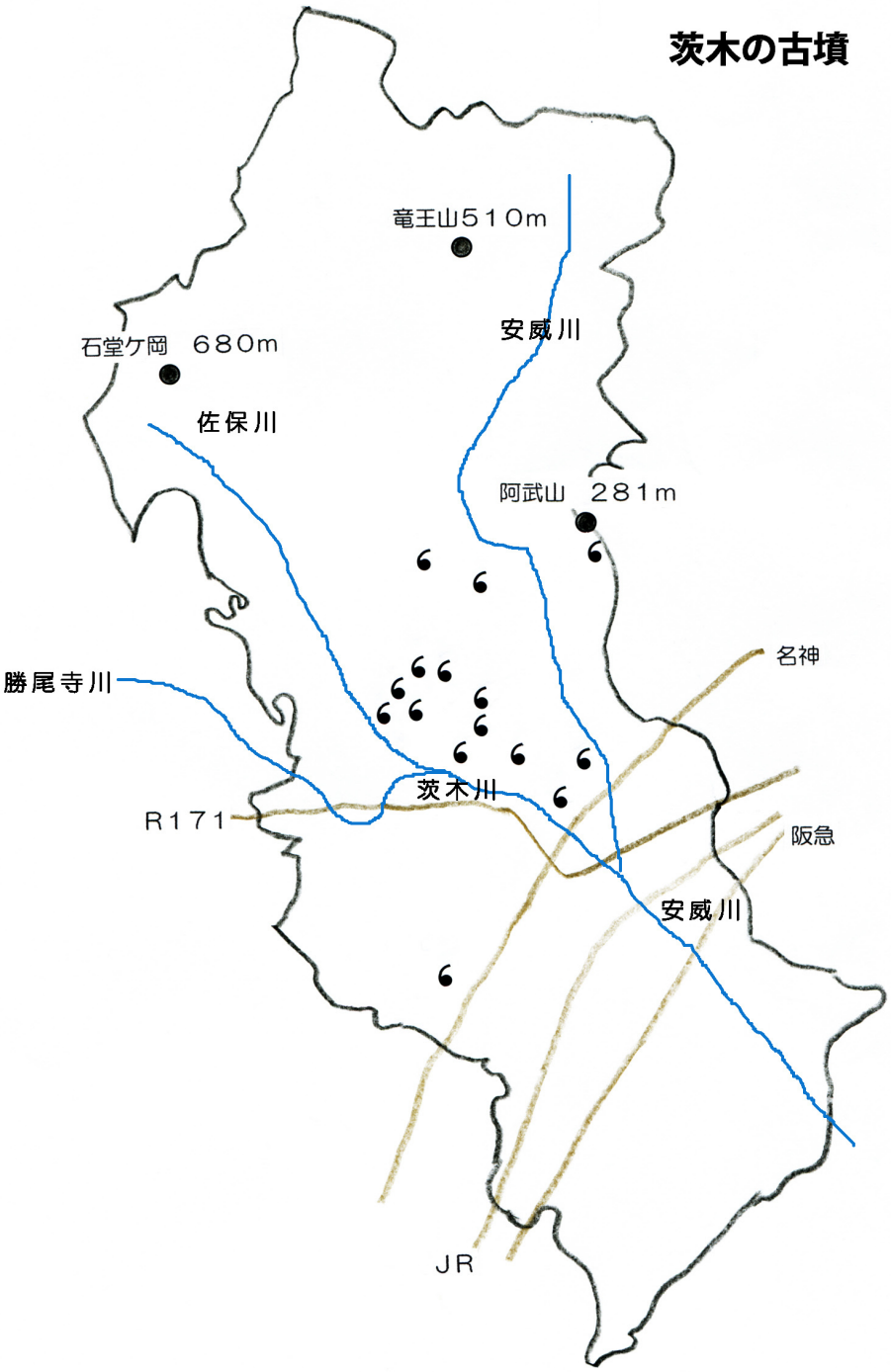
集団墓を想像させる古墳としては、全長 45 メートルの前方後

円墳を持ち、直径 15 メートルの円墳を 20 基も有する安威古墳（４世紀後半）があります。もうひとつ、円墳 30 基を新屋坐天照御魂神社の宮山に配する新屋古墳群があります。

以上のほかに、耳原の円墳と方形墳（鼻摺古墳）、鎌足古廟といわれる将軍塚古墳（大織冠神社）、海北塚古墳（カイボウツカ）、青松塚古墳（セイショウツカ）、南塚古墳、真龍寺古墳、初田１号墳・２号墳、上寺山窯塚古墳（ジョウジヤマカマヅカ）と連なっています。

古墳は山頂や尾根や丘にあるものが多いのですが、平地にあるものも盛り土が施されています。古墳の分布を見ると、勝尾寺川と茨木川の合流地点より北側で、勝尾寺川と安威川の間にほぼ集中しています。阿武山が北限で、上寺山窯塚古墳（中穂積）が南限になっています。大きくて高地にある古墳の分布は聖地にふさわしい立地といえます。

［参考文献］
「茨木の史跡」 茨木市教育委員会　1998 年


茨木の古墳
竜王山５１０m
安威川
石堂ケ岡　６８０m
佐保川
阿武山　２８１m
勝尾寺川
名神
茨木川
R１７１
阪急
安威川
JR

５、北摂の山を拠点とした聖（ヒジリ）

聖（ヒジリ）は、元々「日知り」のことで、太陽の司祭者あるいは呪術者をいったようです。つまり、夏至と春分と冬至という日の三天を読む暦の聖者です。仏教伝来以降は聖と書き、学徳の高い僧のことを指していました。

平安時代中期、世俗の栄達や権勢を嫌い、山にこもり厳しい修行に打ち込んで、念仏を唱えて己を内省する僧が現れます。彼らは民間布教に専念し、雨乞いや病気治癒を願う無心の念仏を説いたようです。

９世紀から 11 世紀にかけて、この聖が北摂の山々を拠点として活動しています。忍頂寺の源因、勝尾寺の行巡と証如、箕面寺の千観、神峯山寺の良恵などです。彼らは寺院に定住することなく、草庵に住み、遍歴しながら修行と布教に努めます。聖同士は寺院から離れた別所と呼ばれる場所に集住しそこを拠点としていました。高野別所や高野聖は有名ですが、忍頂寺や勝尾寺にも聖の別所がありました。

源空は延暦寺黒谷別所の念仏聖でしたが、その弟子が親鸞です。親鸞の弟子が蓮如ですから、こうしてみると聖の布教した念仏が極楽往生を求める浄土信仰を茨木の地に浸透させたといえます。これが茨木における浄土真宗の拡大へと繋がるのです。

６、石山寺本願寺方へこぞって参戦した茨木の浄土真宗門徒

室町時代の 1479 年頃、摂津国の国人が一揆を起こしたあたりから茨木に浄土真宗が広がります。蓮如の時代の寺内町はかなりの広がりを示しています。少なくとも次の 24 ヶ所に寺内町が築かれていたと思われます。

堅田・越前吉崎・山科本願寺・石山本願寺・長嶋願証寺・大津顕証寺・越中古布・越中井波・城端・近江山田・摂津富田・枚方・久宝寺・八尾・大ヶ塚・富田林・貝塚・今井・一身田・平野郷・鷺ノ森・下市願行寺・上市本善寺・金沢御坊です。

ここに摂津富田があるのです。ちなみに茨木にある 95 の寺の宗派をみますと、浄土真宗が 56%と圧倒的に多く、これに真宗を加えると 62%に達します。次いで浄土宗 18%、真言宗９％ですから、いわゆる庶民である真宗門徒が茨木を聖地とみていた心情を窺うことができます。

浄土真宗の開祖は親鸞ですが、その師である法然は遊女にさえ念仏を勧めたといいます。蓮如はさらに進めてどんなに罪深い身であっても、ひたすら阿弥陀仏一仏に帰依して念仏をすれば浄土へ往生できると教えています。農民も職人も非定住民も遊芸人も遊女でさえも、その職業や生業をまっとうしながら念仏を唱えれば成仏できるとした点で画期的でした。そして念仏の前ではすべての人間が平等に扱われています。

浄土真宗のことを一向宗と呼ぶことがありますが、一向俊聖の「一向宗」とは全く違います。仏説無量寿経の「一向専念無

量寿仏」が、阿弥陀仏の名号を称える意味であり、そこから親鸞の浄土真宗を一向宗と呼ぶようになったようです。蓮如は門徒に対して一向宗という呼び名を禁じていたといいます。

職業や生業を問わず、定住しているかどうかを問わず、貴賤を問わず、すべての人間が人間として生きる価値を持ち、念仏を唱えれば阿弥陀如来は救ってくれるという生活と信仰を一体化した蓮如の教えは一気に浄土真宗門徒を拡大していきました。そして、蓮如は越前吉崎、京都山科、大坂御坊のちの石山本願寺という寺内町を築いていきます。寺内町というのは寺の境内に町家がある自治連帯組織です。寺と町が一体となり、信仰で結ばれた運命共同体です。公租も免除されていました。

寺内町では、すべての人間が御同朋とされ、等しく人間として認められていました。蓮如はそこへ講を導入しています。講では相互扶助が行われ、語り合いが重んじられ、信仰が深め合われていました。さらに、能や猿樂や歌の楽しみがありました。寺内町は念仏の共同体であり、信仰の共和国でした。

このようにすべての人間を平等に扱う寺内町の存在は信長の天下統一にとって邪魔です。1496 年に築かれた石山本願寺と信長は衝突を繰り返します。1570 年、信長は寺内町の明渡しを要求、蓮如の跡を継いでいた顕如はこれを拒絶します。石山合戦が始まります。信長は 10 年間攻め続けますが、石山本願寺は微動だにしません。それは石山本願寺の強力な軍事力と浄土真宗門徒の断ちがたい連帯感があったからです。石山本願寺には全国から馳せ参じる浄土真宗門徒を含めて多い時には 8,000 人も

の人間がいたといいます。当時茨木に住んでいた浄土真宗門徒もこぞって参戦しています。

［参考文献］
「日本人のこころ　1」 五木寛之　講談社　2001 年

7、隠れキリシタンの聖地

茨木には隠れキリシタンの里があります。千堤寺と下音羽です。

日本にキリスト教が伝わったのは 1549 年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島へ入港した時からです。彼は島津貴久の許しを得て京都まで足を伸ばして布教しますが、当時の日本は戦乱の最中であり、志半ばにして 1551 年に日本を去ります。

その後、中国地方周防の大内義隆、九州地方豊後の大友宗麟・肥前の有馬晴信と大村純忠らはポルトガルやイスパニアとの交易の肩代わりとしてキリスト教布教の自由を認めています。そして、豊後と肥前の三大名は 1582 年にローマ法王とイスパニア国王に使節団を派遣します。さらに、織田信長は仏教勢力との確執でキリスト教を利用します。仙台の伊達政宗も交易と宣教師の派遣をローマ法王に求める使節を派遣します。このような背景があって、日本にも徐々にキリスト教徒が増えていきます。

三島地方では 1573 年から 1585 年まで高槻城主だった高山右近が熱心に布教を進め、キリスト教徒は一気に増えます。1581

年に高槻で行った復活祭には 15,000 人の信徒が集まり、行列をしています。一方茨木では、安威城主から茨木城主となった安威五左衛門尉了左、茨木城主中川瀬兵衛清秀とその子秀政・秀成が洗礼を受けキリスト教徒になっています。

こうして三島地方は、当時の日本におけるキリスト教の一大中心地となりました。ところが、秀吉は 1585 年に諸大名の配置換えを行い、高山右近を播磨の明石城へ移封します。さらに、1587 年キリスト教の布教と信仰を禁止します。その後家康も 1612 年にキリスト教禁教令を引き継ぎます。

秀吉が禁教令を発した頃、三島地方には 18,000 人のキリスト教徒がいたといわれています。茨木の千堤寺と下音羽はそれぞれ 50 戸ほどの集落でしたが、その大半がキリスト教徒だったようです。一転彼らは隠れキリシタンとなり、厳しい詮議を受ける身となります。膝の上に重い石を載せる拷問が行われたようです。そして仏教への改宗を強要されています。千堤寺では曹洞宗・浄土真宗・日蓮宗へ、下音羽では曹洞宗へ改宗しています。

この時から表では仏教徒としての務めを果たし、隠れてキリスト教を信仰するという隠れキリシタンの生活が禁教令の解かれる 1873 年まで続きます。

このように命をかけてまで信仰を貫いた背景は何だったのでしょうか？ キリスト教の教えには、死んだら極楽へ行けるというようなことはまったくありません。キリスト教では、死んでも終わりにはならない、人間には霊という永続する意識体があってこれが人間の本質であり、この霊を創造主が癒してくれると教えています。隠れキリシタンの人々には、この教えが人間の

魂のよりどころになったのでしょう。

母屋の壁や納屋の屋根裏や土蔵などに、信仰に使う絵や彫刻や典籍を秘し、山の尾根から夕日を仰いで祈り、深夜密かに祈祷をしていたようです。30 日とも 48 日ともいわれる四旬節の断食の行や入浴して身を清め右手に縄を持ち左肩を打つ鞭縄（ベンジョウ）の苦行も行われていたといいます。

1912 年に初めて千堤寺の墓地でキリシタンの遺物が発見され、以降、下音羽とともに隠れキリシタンの里といわれるようになりました。1926（大正 15）年には教皇使節が千堤寺と下音羽に来訪、日本の聖地と激賞したといいます。

［参考文献］
「千堤寺・下音羽のキリシタン遺跡」 茨木市教育委員会　2000 年
「茨木の史跡」 茨木市教育委員会　1998 年
「日本人のこころ　6」 五木寛之　講談社　2002 年
「キリスト教のことが面白いほどわかる本」 鹿嶋春平太　2003 年
中経出版

神様の依り代・樹めぐりの旅

古来、神は山や木や石を依り代として天から降りてきたとされています。中でも木は依り代の代表格です。聖地にある神社には、そんなわけで大樹や古木が多いのです。茨木の大樹や古木をご案内しましょう。

［樹は見ていたコース］

阪急茨木市駅→（10 分）→茨木神社→（５分）→梅林寺→（15 分）→牟礼神社→（20 分）→須賀神社→（30 分）→疣水神社→（５分）→新屋坐天照御魂神社（西河原）。

茨木神社…境内 6700 ㎡にムク・クス・クロマツ・イチョウ・ヒマラヤシーダーの樹林。元町 1874- １。
江戸時代から昭和 20 年頃まで、境内の元井戸から孟宗竹の節をくり貫いた竹管水道が 10 軒から 20 軒の町屋に引かれていた。このくくりを井戸仲間といい、竹管の掃除を定期的に行っていた。日本で町屋に上水道が引かれた例は希有であるが、井戸仲間が町民自治を育んだことも注目される。

梅林寺……樹齢 142 年と 192 年のクロマツ（２代目か３代目？）。片桐町 1852- ２。
1582（天正 10）年の本能寺の変を急報した茨木城主中川清秀に、豊臣秀吉が宛てた返書がこの寺にある。それは「信長親子は存命」というウソの返書であるが、これによって中川清秀が明智光秀に加担するのを牽

制したといわれている。

牟礼神社…樹齢 102 年のクスが２本、112 年のムク（３代目か４代目？）。中村町 26- 3。
信長は 1571（元亀 2）年に比叡山延暦寺の焼き討ちを敢行し、以後神社仏閣の焼き討ちを行った。この難を逃れるため祭神であった牟礼豪族の祖・大中津日子命（オオナカツヒコノミコト）を、信長の敬う素盞嗚尊（スサノオノミコト）・天児屋根命（アメノコヤネノミコト）と偽ったまま現在に至っている。

須賀神社…樹齢 942 年のクス。鮎川２丁目。
今から 942 年前は 1066（治暦 2）年、後冷泉天皇の頃で摂関政治が終焉し、官や荘園領主や農民が安定期を迎えた時期。樹齢 942 年のクスは、その後の茨木と日本の動きを見続けてきた語り部である。

須賀神社　樹齢 942 年のクス

疣水神社…境内 4200 ㎡にクス・ムク・疣桜・クロマツ・エノキ・フジの樹林。三島丘１丁目。
神功皇后（170 ～ 269）が三韓征伐（新羅・高句麗・百済）に出立する際、この神社の神水（コウズイ）で顔を洗い疣顔に変身したという。そして、戦勝帰国し、再び神水で顔を洗うと元の美形に

戻ったという。また、秀吉は朝鮮出兵にあたってこの神社へ戦勝祈願をして出立している。ここには世界に通じる磁場があるのかもしれない。

新屋坐天照御魂神社…境内 2500 ㎡にクロガネモチ・アベマキ・クロマツの樹林。西河原３丁目。

所在は元々安威川の河原に近く、総持寺の西にあるところから西河原といわれている。この神社は上河原と中河原にもあり、ここだけが下河原ではなく、西河原と呼ばれている。祭神は天照国照彦火明命（アマテルクニテルヒコホアカリノミコト）で、太陽の神・農耕の神といわれるが、熊野にある水神であるという説もある。暴れ川の安威川をなだめる神様だったというわけである。さらに、祭神はアマ

テラスオオミカミだという説もある。

［気になる樹コース］

阪急茨木市駅→（３分）→茨木別院→（７分）→茨木神社→（20分）→称名寺→（７分）→長福寺→（２分）→勝光寺→（10 分）→水尾公園→（10 分）→稲荷（伯光）神社→（10 分）→佐和良義神社。

茨木別院…樹齢 180 年のクロマツ、樹齢 110 年のクス。

別院町 1875- 1。

クロマツ

松には二葉松（這い松・朝鮮五葉など）と五葉松（赤松・黒松など）がある。

赤松はメマツといい、松茸ができる。

黒松はオマツといい、潮風や汚染に強いので防風林や街路樹に使われる。

雄花は花粉を飛ばすと落ちる。雌花はまつぼっくりになる。２年目の秋、鱗片が開き種子を風媒で散布する。

まつぼっくりの開閉は乾湿運動を行い、水分を含むと閉じる。

クス

成長が早く、巨樹になる。

クスシキキ（奇木）、クスリノキ（薬木）と呼ばれていたものがクスノキになった。

素盞嗚尊（ヤマトタケルノミコト）が髪の毛を抜いて植えたと日本書紀に書かれている。

香りが強いのを樟といい、弱いのを楠という。病害虫

に強く、江戸時代より樟脳の原料になっている。船材にも使われている。
鹿児島県蒲生町にある樹齢 1600 年・樹高 30 m・幹周 24.2 m・根回 33.5 mのクスが日本最大。

茨木神社…境内 6700 ㎡の豊かな樹林（クロマツ・クス・ムク・イチョウ・ヒマラヤシーダー）。元町 1874- 1 。

ムク
樹高 15 ～ 20 mくらいになる。
果実は食用になり、柿に似た味がする。
野球のバット、漆器の木地、べっこうの研磨剤として使われる。
兵庫県三日月町の、樹齢 800 年・樹高 18.5 m・幹周 9.9 mのムクが日本一。

イチョウ
20 ～ 30 mの巨樹になる。
中国原産の針葉樹で、平安後期に日本に入った。
葉が鴨の足に似ているところから中国語でヤーチャウといわれ、訛ってイチョウになった。
雌雄異株で、銀杏は雌株にできる。
しもやけ・疣取り・魚の目・虫刺され・咳止め・たん切り・疲労回復・胸部疾患・夜尿症などに薬効がある。
東京都と大阪府、東大と阪大の樹になっている。

ヒマラヤシーダー
ヒマラヤスギの別名。ヒマラヤ原産で、明治初期に公園樹として渡来した。
杉ではなく松の仲間。雌雄同株。

高いものは 60 mに達する。

称名寺……樹齢 242 年のソテツが２本・112 年のソテツ、樹齢 112 年のクロガネモチ。主原町 1792- 1。

ソテツ

鉄を受けると元気になるということから蘇鉄といわれる。根に根粒があり、藍藻と共生し、窒素を固定する働きがあるので痩せ地でも生育する。

種にはサイカシンという毒がある。澱粉が多く、飢饉の時に沖縄や与論島などで食用にした。水晒しや発酵が不充分だと死に至ることから、ソテツ地獄という言葉がある。

止血・解毒・止痛などの薬効もある。

長福寺……樹齢 112 年のクロガネモチ。

主原町 1809。

クロガネモチ

10 ～ 20 mになる。

春新芽の時、昨年の葉を一斉に落とす。枝や葉が黒みがかっていて、モチノキ科ということから名がついた。

赤い実をつける。雌雄異株。

勝光寺……樹齢 142 年のエノキ、樹齢 112 年のクロガネモチ。

水尾１丁目。

エノキ

高さ 20 m、直径１m以上になる。雌雄同株。

1604 年、家康は秀忠に江戸・日本橋に至る街道に一

里塚を設けるよう指示し、「ええ樹を植えよ」と言ったのが、ええ樹をエノキと思い込み植えられたという。

水尾公園　水尾１丁目。

稲荷（伯光（ハクミツ））神社…樹齢 242 年のクス。
水尾３丁目。
伯光（ハクミツ）大明神、楠大神、玉姫大神を祀る。

佐和良義神社…境内 5400 ㎡に樹林（アキニレ・エノキ・クス・クロガネモチ・ムク・シャシャンボ）。美沢町 599。

アキニレ
ニレ科植物。同じ仲間で唯一秋に開花するのでこの名がついた。
大気汚染に強く、街路樹や公園によく使われている。

シャシャンボ
ツツジの仲間。サシブともいう。
常緑の低木。白い壺状鐘形の花をつけ、果実は食用になる。

［お花見コース］

市民会館前噴水→（30 分）→佐和良義神社→（５分）→皇大神社→（10 分）→道祖神社→（40 分）→川端康成文学館→（15 分）→田中町・茨木川安威川合流点。

佐和良義神社…5400 ㎡の樹林　美沢町 599。
祭神は迦具土神（カグツチノカミ）。カグツチはカグの神で、カグとは銅のこと。サワラは銅器を指し、ギはムラという意味。式内社。沢良宜東・西・浜の村社。
弥生時代の銅鐸鋳型の鋳造工房跡（東奈良遺跡）であり、沢良宜城跡でもある。鳥居から北へ向う参道は城の馬場だった。

皇大神社　沢良宜東町。天照皇大神（アマテラスコウタイシン）を祀る。

道祖神社（サイ）…2400 ㎡の樹林。高浜町 403。
素盞嗚尊（スサノオノミコト）を祀る。

「サクラの話」…故乾英三郎氏談
サクラは、サ・クラである。
「サ」は、稲を意味する。サツキ（五月）、サナエ（早苗）、サオトメ（早乙女）、サノボリ（早上）、サバエ（五月蝿）などのサも同じ意味を持つ。

「クラ」は、座・蔵・庫であり、物をのせる（鞍など）、すわる場所（高御座など）、まつる場所（磐座など）、大切なものをしまう場所（蔵、股座＝マタグラ、股蔵など）という意味がある。

桜通と川端通は桜並木。桜には次のような種類がある。

〇ヤマザクラ…山桜。本州中部以西の山地に分布。吉野山・嵐山・小金井などが有名。葉が花と同時に出る。明治以前にサクラといえば山桜のことをいった。
「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜花」（本居宣長）。

〇オオヤマザクラ…大山桜。本州中部の山地に分布。

〇ヒガンザクラ…彼岸桜。３月末頃早くに咲く品種。

〇シダレザクラ…枝垂桜。イトザクラともいう。京都円山公園にある。

〇ヒカンザクラ…緋寒桜。緋は深紅色。サツマザクラ、ヒザクラともいう。

〇マメザクラ…豆桜。本州中部以西の山地に分布。富士山、浅間山などの高地にも分布。耐寒性が強い。分枝する。

〇ソメイヨシノ…染井吉野。江戸、染井村の植木屋が改良した品種。明治初期に全国に広がった。花見といえばソメイヨシノになっている桜の代表格。

〇サトザクラ…里桜。ヤエザクラ、ボタンザクラともいう。庭園用で花は下垂する。100 種を越える。造幣局や京都御室が有名。

〇オオシマザクラ…大島桜。サトザクラの変種。果実が大きく食用になる。葉は桜餅に使われる。

〇サクラではないが、サクラのつくものがほかにもある。
サクラソウ（桜草）、サクラエビ（桜蝦）、サクラダイ（桜

桜通の桜並木

安威川・茨木川合流点　田中町・乗船台

鯛＝金魚のこと）、サクランボ（桜桃・オートウともいうが、サクラ科ではなくバラ科の果樹）。

［大樹コース］

阪急茨木市駅→（20 分）→中村邸→（２分）→浄福寺→（10 分）→溝咋神社→（25 分）→須賀神社→（25 分）→牟礼神社→（10 分）→阪急茨木市駅。

阪急茨木市駅…カナリーヤシ

駅前西口の緑地帯角にある。

樹高 4 m 91cm、幹周 2 m25cm、枝張は東西に 7 m 50cm（2006 年 10 月測定）。

常緑で、羽状の葉をホウキのように放射している。不死鳥（フェニックス）などとも呼ばれる。雌株なので、主幹上に橙色の楕円形の果実をつける。

中村邸……タブ

五十鈴町 178。

樹齢 208 年。樹高 13 m、幹周 3 m29cm（2006 年 10 月測定）。

クスノキ科の常緑樹。雌雄異株。新芽が赤い。

浄福寺……イチョウ

五十鈴町 525。

樹齢 142 年。樹高 13m、幹周 2 m70cm、枝張は東西に 6 m 60cm（2006 年 10 月測定）。

溝咋神社の樹林

溝咋神社…7100㎡の樹林（イチョウ・タブ・クロガネモチ・クロマツ・クス）。イチョウが大樹。
五十鈴町524。
イチョウの樹高23m、幹周3m27cm（2006年10月測定）。
溝咋神社は、式内社で、古墳時代からの茨木最古の神社。祭神は、正殿に媛踏鞴五十鈴媛命（ヒメタタライスズヒメノミコト）と溝咋玉櫛媛命（ミゾクイタマクシヒメノミコト）、相殿に三島溝咋耳神（ミシマミゾクイミミノカミ）を祀る。
溝は農業用水路、咋は溝の両側に土留めに打ち込むもの、耳神は最も偉い人を意味する。三島溝咋耳神は三島地方の水利権を持つ強大な支配者であった。
大和の事代主神（コトシロヌシノカミ）が三島溝咋耳神の娘である玉櫛媛命と結婚して、五十鈴媛命を産み、初代神武天皇が五十鈴媛命を后に迎えている。これは稲作の普及を通じて朝廷を築いてきた神武天皇が、稲作に欠かせない鉄や銅を扱う踏鞴族（タタラゾク）と結びついたことを物語っている。

須賀神社…クス。鮎川2丁目。
樹齢942年。樹高26メートル10cm、幹周6m70cm、枝張は東西に8m24cm・南北に29m70cm

（2006 年 10 月測定）。
茨木で最も長寿の古木であり、大阪府の天然記念物になっている。

牟礼神社…クス、イチョウ、ムク。中村町 26- 3。
２本のクスの内、境内の東にあるクスが大樹。樹齢 102 年。樹高 23m60cm、幹周 3m72cm、枝張は東西に 19 m 20cm・南北に 19 m 90cm（2006 年 10 月測定）。

「巨木の話」

巨木とはどんな木をいうのか決まっているわけではありません。ただ、1988 年に環境庁が巨樹・巨木調査を行うにあたって決めた基準があります。われわれも一応それを使うことにします。それによると、巨木とは、地上１m 30cm の幹周が３m 以上の木をいいます。幹が複数ある場合には、複数の幹周の合計が３m 以上で、主幹の幹周が２m 以上のものを巨木とします。

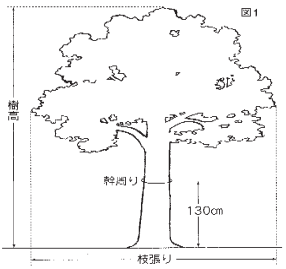


図1

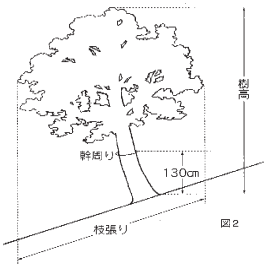


図2

巨木の測定方法は次の通りです。
① 木が平地にある場合には、地上１m30cm の位置で測ります。
② 木が斜面にある場合には、山側の地上から１m30cm の位置で測ります。

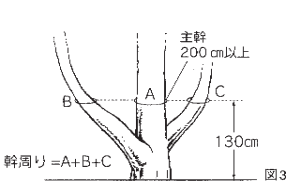


図3

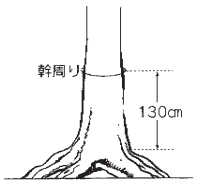


図4

③ 幹が複数ある場合には、それぞれの幹周の合計が３m あるかどうか、主幹が２m 以上あるかどうかを調べます。
④ 根が浮き上がっている場合には、根の上部から１m30cm の位置で測ります。

※巨木は幹周だけではなく樹高や枝張も重要です。

「樹高の測定」

樹高とは地上から木の頂点までの高さです。地上は、平地の場合は問題がありませんが、斜面の場合には山側が、根上りの場合には根の上部が起点になります。木の頂点は主幹の頂点とします。

① 木の根元から木の頂点の見える位置までの距離を測る。
② 木の頂点の見える位置から、木の頂点の仰角を測る。測定

三角関数・正弦(tan)早見表

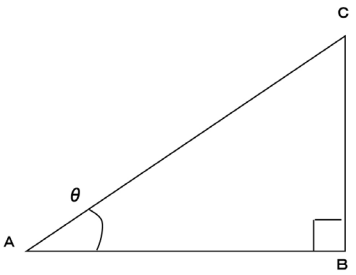
角度	正弦(tan)
21	0.3839
22	0.4040
23	0.4245
24	0.4452
25	0.4663
26	0.4877
27	0.5095
28	0.5317
29	0.5543
30	0.5774
31	0.6009
32	0.6249
33	0.6494
34	0.6745
35	0.7002
36	0.7265
37	0.7536
38	0.7813
39	0.8098
40	0.8391
41	0.8693
42	0.9004
43	0.9325
44	0.9657
45	1.0000

角度	正弦(tan)
46	1.0355
47	1.0724
48	1.1106
49	1.1504
50	1.1918
51	1.2349
52	1.2799
53	1.3270
54	1.3764
55	1.4281
56	1.4826
57	1.5399
58	1.6003
59	1.6643
60	1.7321
61	1.8040
62	1.8807
63	1.9626
64	2.0503
65	2.1445
66	2.2460
67	2.3559
68	2.4751
69	2.6051
70	2.7475

（計測の原理）

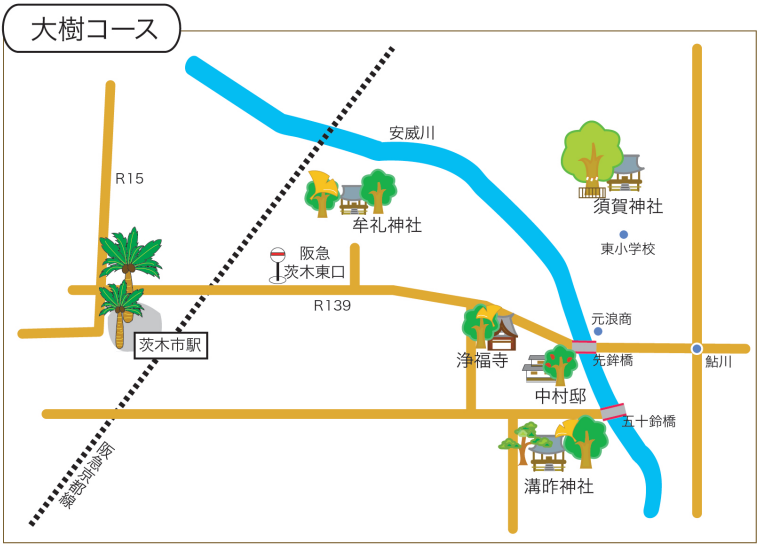
三角関数の正弦 **tan** は角度θにより辺BC対辺ABの比率が決まる。

tan θ ＝CB／AB の値をとる。
従って
CB（木の高さ） ＝ tan θ（仰角） × AB（距離） となる。



「枝張の測定」

枝張とは木の枝が張り出している距離です。枝の先が伸びて



いるところまで根も伸びています。木に水や肥料を施す場合には枝張の先へします。そうでないと根が吸収できません。

① 東の枝先から西の枝先までの距離を測ります。

② 南の枝先から北の枝先までの距離を測ります。

［鎮守の森コース］

阪急茨木市駅→（５分）→茨木神社→（10 分）→天満宮→（15 分）→新屋坐天照御魂神社→（５分）→疣水神社→（30 分）→須賀神社→（25 分）→溝咋神社→（20 分）→佐和良義神社。

茨木神社…6700 ㎡の樹林（ヒマラヤシーダー・ムク・クス・クロマツ・イチョウ）。元町 1874- 1 。

祭神は、素盞嗚尊（スサノオノミコト）。景行天皇の皇子・仲哀天皇の父。牛頭（ゴズ）天王ともいわれ、信長の産土（ウブスナ）神。茨木神社はこの神を祭神と偽って信長の焼き討ちをのがれたという。天児屋根命（アメノコヤネノミコト）と誉田別命（コンダワケノミコト）も祀る。前者は祝詞（ノリト）の神・出世の神で藤原氏の氏神である。春日権現・春日大神ともいわれる。後者は最古の大王といわれる応神天皇。別名八幡大神。

天満宮……4100 ㎡の樹林（ナナメノキ・クス・クロガネモチ・アラカシ）。田中町 437。

菅原道真を祀る。道真は平安時代の学者であり、漢詩人であり、政治家だった。学問に優れ、宇多天皇に重用され若くして右大臣になったが、左大臣の藤原時平に妬まれて大宰府へ左遷された。祟（タタ）る天神であったが、後に学問の神とされた。

天満宮の樹林

新屋坐天照御魂神社…2500 ㎡の樹林（クロガネモチ・アベマキ・クロマツ）。西河原３丁目。
天照国照彦火明命（アマテルクニテルヒコホアカリノミコト）を祀っている。太陽神、農耕神とされているが、熊野の水神とする説がある。茨木には茨木川・安威川に沿って、上河原と中河原と西河原の三ヶ所に新屋神社がある。河原は洪水によって形成される地形であり、水神という説に説得力がある。ほかにアマテラスオオミカミとみる説もある。
天児屋根命、大国主の子で軍神の建御名方命（タケミナカタノミコト）も祀られている。

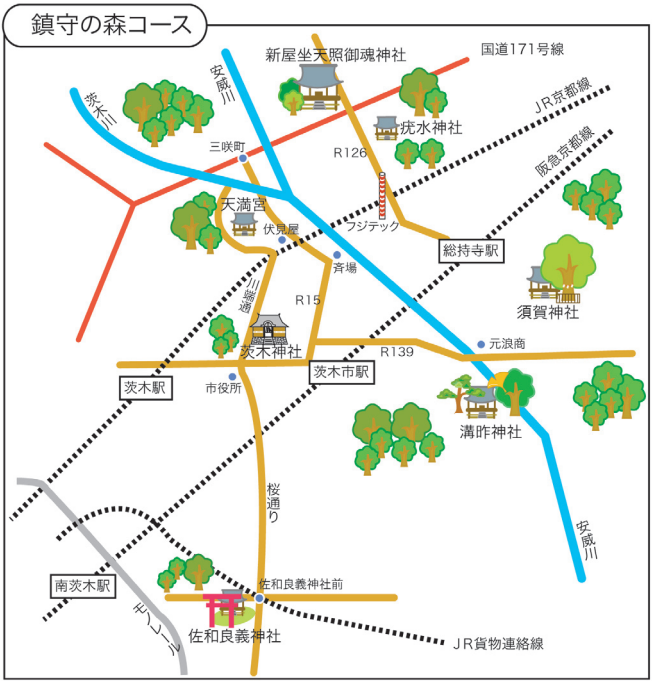
疣水（磯良）神社…4200 ㎡の樹林（クス・ムク・疣桜・クロマツ・エノキ・フジ）。三島丘１丁目。

磯良大神（イソラオオカミ）を祀る。志賀島（福岡県）の安曇磯良（アズミイソラ）は朝鮮出兵の水先案内を務めた。

須賀神社…5200㎡の樹林（クス・カヤ）。鮎川２丁目 850。
茨木神社と同じ素盞嗚尊（スサノオノミコト）を祀っている。

溝咋神社…7100㎡の樹林（クス・クロマツ・クロガネモチ・タブ・イチョウ）。五十鈴町 524。
三島の支配者・溝咋耳命（ミゾクイミミノミコト）、その娘の溝咋玉櫛媛命（事代主命の妻）、玉櫛媛が産んだ媛踏鞴五十鈴媛命（神武天皇の皇后）を祀る。
さらに、大和の国の開祖・天日方寄日方命（アメヒカタクシヒカタノミコト）、素盞嗚尊（スサノオノミコト）、天児屋根命も祀っている。

佐和良義神



「鎮守の森の話」

神様は元々天にいて人間が悩み事や困り事の解決をお願いすると地上へ降りてくる存在でした。地上へ降りて来る時に依り代となったのが山や木や石でした。これらの依り代は個別に独立したものではなく、山とか森そのものと考えられます。鎮守の森というのは神様が降りてくる聖地だったのです。

鎮守さまといえば、それは土地の守護神であり、地域住民の守り神です。山や森そのものがご神体になっていたのです。神社という神様の家ができるのは時代がかなり新しくなってからです。その神社は最初山や森の中につくられました。ですから森の入口に鳥居があり、森の中へ参道が通じ、その先に本殿や拝殿があり、さらにその奥に深い森があるというのが神社の普通の姿でした。明治神宮のように神社を建ててから鎮守の森を人工的につくる例や魚つき林の中に森林保護の神社を建てる例は神社の例外的なありようです。

茨木市が 1976（昭和 51）年と 1977（昭和 52）年に指定した保存樹林はその殆どが鎮守の森です。個人所有地と二つの寺院を含めて 18 ヶ所あります。15 ヶ所は神社です。森林面積の大きな神社から順にご案内しておきましょう。

溝咋神社（7100 ㎡）、茨木神社（6700 ㎡）、佐和良義神社（5400

㎡）、須賀神社（5200 ㎡）、下穂積の春日神社（4500 ㎡）、疣水神社（4200 ㎡）、天満宮（4100 ㎡）、葦分神社（3076 ㎡）、西河原の新屋坐天照御魂神社（2500 ㎡）、高浜町の道祖神社（2400 ㎡）、須久々神社（1965 ㎡）、乙部神社（1821 ㎡）、天王の春日神社（1700 ㎡）、阿為神社（558 ㎡）、豊川の道祖神社（435 ㎡）。

二つの寺院もかなり広い鎮守の森を持っていますので付記しておきましょう。下穂積の慈明寺（3202 ㎡）と天王にある蓮花寺（2700 ㎡）です。

茨木神社　鎮守の森

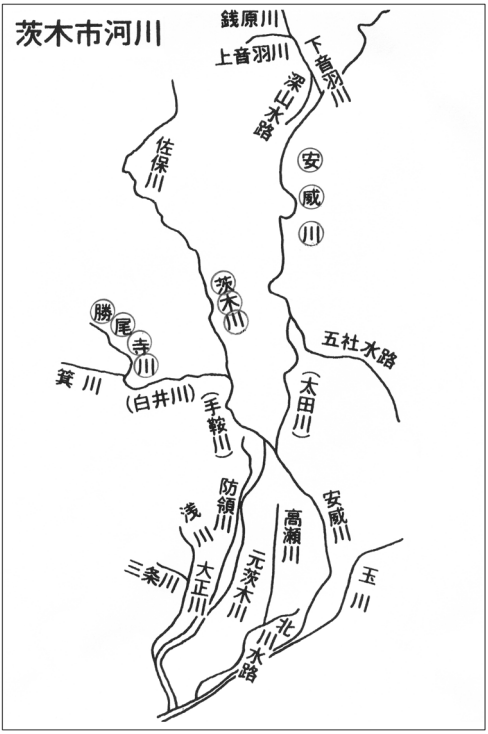
第３章
流通拠点・茨木

京谷信弥

1、15 の河川

現在、茨木市には大小 15 の河川が流れています。そんなに広くない茨木市に多くの河川が存在する理由は、ひとつには北摂山系の急な斜面から市内に雨水が流れ込んでいること、ふたつ目は古来から市の南部、現在の目垣あたりまで湿地帯が広がり、水利対策としての水路が発達していたことなどが考えられます。

茨木では地域特性から水害対策とともに、水運や用水の確保など流通手段としての河川の歴史があります。



「わがまち茨木　水利編」より

①茨木の水運 ― 寒天の生産・搬送

昭和の初期まで北摂地域の天然寒天は質量ともに全国一を誇っていました。寒天はその名の通り寒い天（そら）のもとでつくられる農閑期の貴重な収入源でした。寒天の製造工程は凍結と融解があって、冬季の野外の低温と乾燥した気候を利用する必要があり、北摂地方はその条件を満たしていました。このような気象条件を満たしている地域は日本全国に多くありますが、北摂地方は原料である天草の確保と運搬の流通の利便性に優れていたことに理由があります。

天草のおもな生産地は紀州（和歌山）や伊豆（静岡）ですが、現地の温暖な気候では寒天づくりには不向きです。北摂は安威川、神崎川など水運による天草の運搬に便利で、冬には厳しい寒さがあり、山間部では燃料の炭が生産されます。

現在、茨木市内では残念ながら天然寒天は生産されていませんが、江戸寛政年間には大田村、西河原村、田中村、安威村、道祖本村、上音羽村などで生産されていた記録があります。

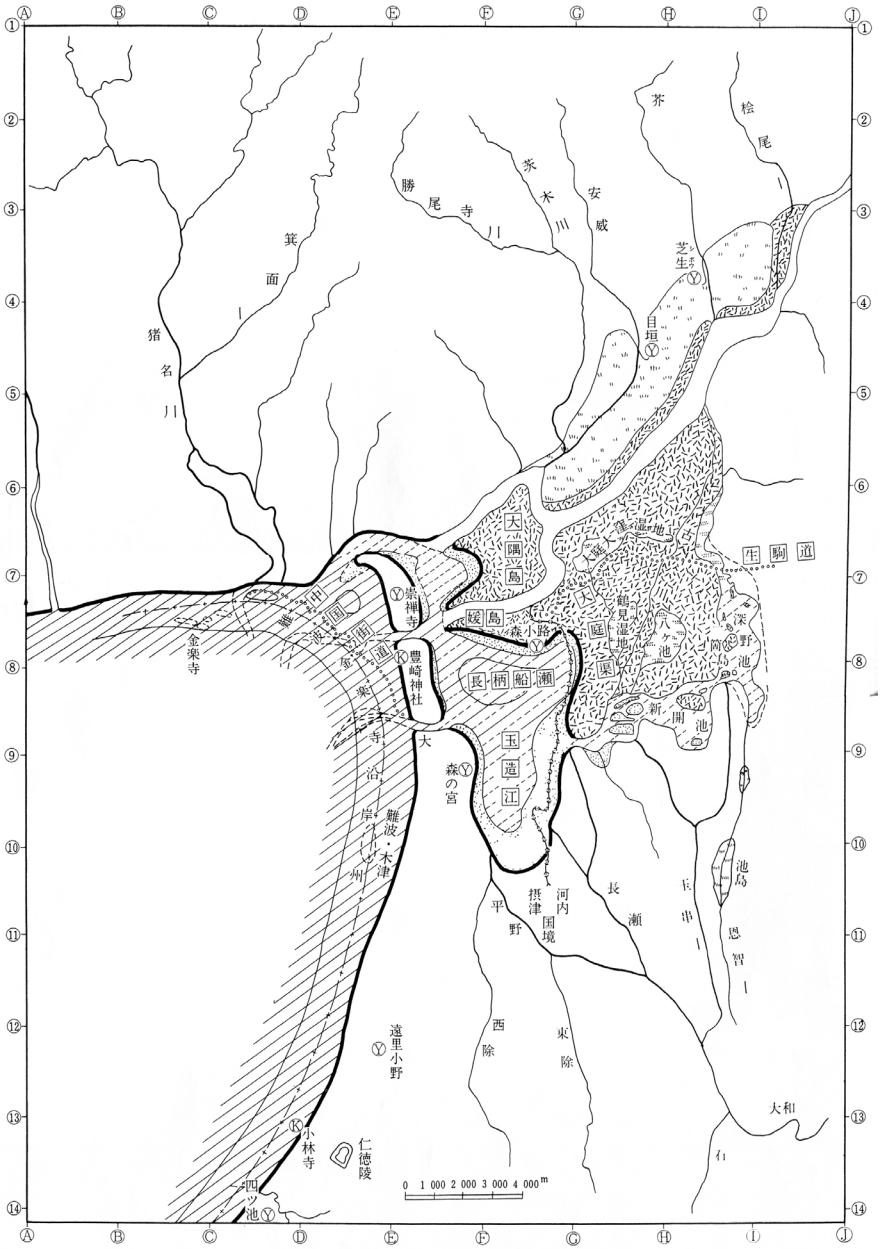
②茨木の水害 ― 安威川と茨木川の合流

現在は元茨木川緑地として整備されていますが、その名の通り、茨木川は茨木市内中心部を流れる幅の狭い天井川でした。記録が残っているだけでも永禄年間（1560 年頃）から何度も氾濫し、中心部が洪水に見舞われ、慶安 3（1650）年には梅林寺が流されています。近年では、明治 29 年に茨木川、安威川、佐保川で堤防が決壊し、多くの田畑、民家が浸水し、昭和 10 年には、床上浸水 835 戸、橋梁 3 か所流失などの大きな被害を受けています。

水害対策のため昭和 12 年に、茨木川を今の田中町あたりで安

河内湖Ⅱの時代（５世紀頃）

「続大阪平野発達史」梶山・市原、1985 による



安威川・茨木川合流の碑

威川と合流させ、現在の姿となっています。その後昭和 18 年にかけて、安威川の大改修工事が行われました。昭和 42 年の台風７号の集中豪雨では、床上浸水 1739 戸などの被害を出していますが、さらに安威川の護岸工事も進み、最近では大きな水害はなくなっています。

昭和 24 年に、安威川との合流地点より南の茨木川は廃川となり、その後元茨木川緑地として整備されています。また堤防は桜通り、川端通りとして流通に欠かせない重要な道路となっています。

③農業用水 ― 車作の深山水路

車作の土地は安威川のそばにありながら、数 10 ｍも高いところにあり、水が引けず水田は川べりの限られた場所にしかありませんでした。車作の庄屋・畑中権兵衛（のちの権内）が、宝永（1704 年）のころ自分自身の手で深山（ミヤマ）水路を完成させています。

水路はＵ字型に掘り、底部には粘土を使用、岩盤に突き当たるところは、焚き火で焼いて叩き割り、断崖を削り、石を積む工事で、私財をなげうって約 20 年の歳月で出来上がったといわれています。水路は幅 50 ～ 60cm、深さ約 30cm、延長約 2.5km あります。

畑中権内遺功碑

この水路によって清水が車作集落に流れ、飲料水、非常用水、水車に利用され畑は水田に変わりました。この水路は「権内水路」と呼ばれ、氏神の境内には「故畑中権内氏遺功碑」と彫った石碑が建てられています。水路は近年コンクリート造りに改良されてしまっていますが、今も集落の用水として利用されています。

④参詣水路 ― 仏照寺

目垣にある仏照寺は浄土真宗本願寺派のお寺です。仏照寺の由緒記に、遠祖は近江の地頭佐々木盛綱の子俊綱とされています。俊綱が合戦に敗れて後、親鸞聖人の直弟子となり順心の名を受け、弘長２（1262）年摂津国溝咋郷（目垣１丁目）に仏照寺を建立しています。西国、四国を教化して有力寺院となり、

本願寺３世の覚如も建武３（1336）年に巡賜し、８世の蓮如が文明７（1475）年に仏照寺に逗留しています。

遠方からの信者が多く参詣し、大正時代には大阪からは水路が使われていました。神崎川から安威川をさかのぼり、野々宮の落合で小船に乗り換え、玉川（現在の番田井路）へ入り、西面（サイメ）で下船して安威川沿いの仏照寺まで歩いて参詣していました。

仏照寺（目垣１丁目）

2、水路サイクリングコース

真宗最古の寺「仏照寺」を起点に、番田井路（玉川）、安威川、神崎川、淀川の河川敷を中心にめぐる平坦なコース（約 30 Ｋｍ）。

＜コース道順＞

市民会館前→育英橋→西面（番田井路沿い）→鳥飼八町（安威川沿い）→相川（神崎川沿い）→一津屋（淀川沿い）→柱本→野々宮→市民会館前

番田井路の親水公園

安威川遊歩道

鳥飼　淀川河川公園

＜見どころ＞

・仏照寺（目垣１丁目）

1262 年親鸞の直弟子西順が開創した真宗最古の寺。神崎川から安威川を遡り、野々宮の落合で小船に乗り換え、玉川（番田井路）へ入り、西面で下船して、安威川沿いの仏照寺まで歩いて参詣していました。

・なにわ自転車道

大阪市旭区から西淀川区に至る神崎川、淀川、大川の河川敷を中心に 21.6 ＫｍのＡ転車・歩行者専用の一般府道です。このコースでは相川、一津屋間の約２ＫｍのＡ走行します。

・淀川河川公園（鳥飼地区）

テニスコート、野球場、陸上競技場などスポーツ施設がそろっていて、バーベキューができる場所も完備しています。淀川河川敷 20 箇所の施設広場地区の一つで、国土交通省と（財）河川環境管理財団が運営主体です。

＜コース案内＞

市民会館前から主原町まで南下し、三島江茨木線を東へ進み、安威川に架かる育英橋を渡る。育英橋を渡ってすぐ右手に目垣の集落があり、その中心に仏照寺（目垣１丁目）がある。

三島江茨木線に戻って約 1Km 東へ進むと高槻市との境界の番田井路（玉川）に架かる西面大橋を渡る。渡ってすぐ右手にとり、番田井路沿いに下流に向かって進むと、野々宮あたりで安威川と平行した流れになる。

安威川河川敷の遊歩道をさらに南下すると、阪急京都線のガー

ドをくぐったあたりで神崎川との合流地点に出る。ここから左手の神崎川沿いの河川敷は「なにわ自転車道」として整備されている。この道をそのまま一津屋まで進むと神崎川と淀川の合流地点に出る。

淀川右岸の河川敷を川の流れと逆に北上すると、淀川河川敷公園を通り、京阪ゴルフ倶楽部あたりで淀川新橋が見えてくる。ここで河川敷の土手を登って茨木寝屋川線を西に向かうと野々宮を経由してもとの三島江茨木線に帰ってくる。

3、18 の街道

①街道の成り立ち

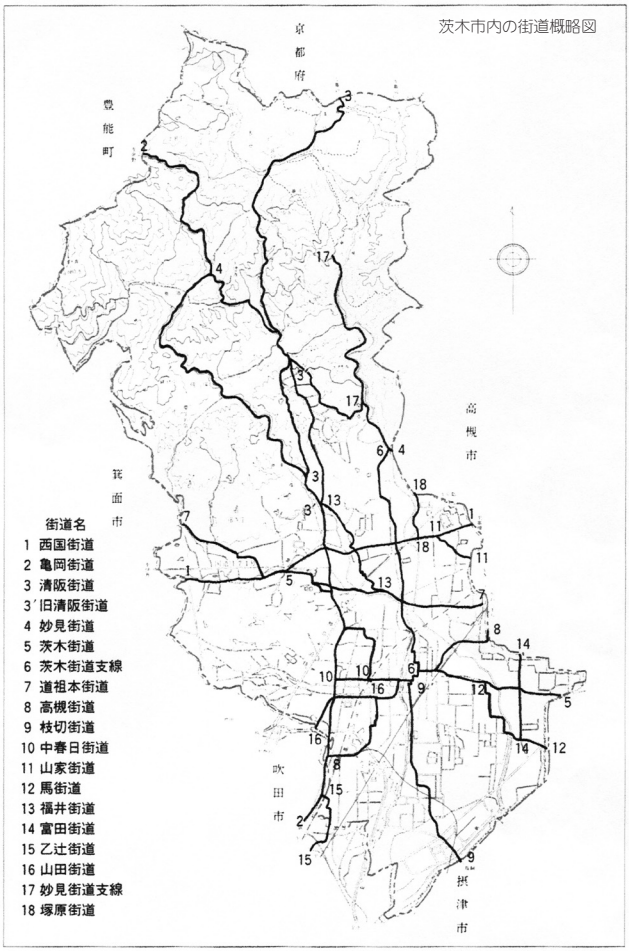
茨木には 18 もの街道があり、歴史的に重要な流通拠点でした。古来から京都、大坂、西国との間で人やモノの往来が多く古墳、神社、仏閣、道標など現在でもその面影がうかがえます。

街道の成り立ちは、大化の改新（646 年）による律令国家のもと、中央政府と地方の交通、連絡、通信の機関として駅場・伝場を置いたのが始まりと言われており、4 里（約 16 Ｋｍ）1 駅を備えていました。

戦国時代には各大名が伝場制を定め、国境を越えて隣国との往来に備えていましたが、信長は物資の流通という経済効果を重要視して橋梁、並木などを整備しました。秀吉はさらに 36 町を 1 里と定め一里塚の築造を行って、全国的交通政策を進めました。

江戸時代には主要街道の制度化を進め、五街道（東海道、中山道、奥州道中、日光道中、甲州道中）および脇街道（山陽道、伊勢路、佐渡路、長崎路、松前道、西国街道など）を定めています。

明治２年には、里程単位をすべて 36 町を１里に統一し、新たに国道、県道、里道を定め、それぞれに１等～３等の等級を定めました。明治 19 年に、大阪府は里道の整備に補助制度を定め、茨木では枝切街道、茨木街道支線、清坂街道などが１等補助里道として整備されました。



出典：「わがまち茨木　街道編」

②西国街道

西国街道は山崎道と呼ばれる脇街道の一つですが、京都と西国を結ぶ重要路でした。明治になって、京都、大阪間の鉄道が開通すると交通量は激減し、その重要性が低下した時代が続きました。しかし、戦後、モータリゼーションの進展とともに西国街道とほぼ並行する国道 171 号線が整備され、中国自動車道の起点が茨木になって、交通路としての重要性が再び増してきました。

西国街道は茨木市高田町から太田の茶臼山古墳の南を通り、一里塚から安威川を渡って耳原へ、勝尾寺川に架かる幣久良橋を渡ります。下井町では国道 171 号線に切られていますが、これを横断して宿川原町に入ります。豊川を経由して箕面に通じます。

○郡山宿本陣（椿の本陣）

宿川原町の郡山宿には、本陣や脇本陣、旅籠屋が多数ありました。現在も残っている郡山宿本陣は、多くの古文書によると西国諸大名が利用していたことがわかります。播州赤穂城主浅野匠守長矩が江戸刃傷事件の前年ここに泊まっています。事件を伝えた早籠の一人は萱野三平で、西国街道を経由して赤穂に伝えています。途中、現在の箕面市の西国街道沿いに三平の実家があり、母の葬儀に出会いますが早籠の任務のためそのまま通過した逸話が残っています。

←椿の本陣（宿川原町）

○白井河原の合戦

白井河原　上野町付近

元亀２（1571）年、勝尾寺川に架かる幣久良橋付近の白井河原では、信長方の荒木村重、中川清秀軍と、将軍足利義昭方の茨木佐渡の守、和田惟政軍との激しい合戦があり、勝尾寺川は赤く血で染まったといわれます。和田勢の陣の跡が耳原の糖塚として碑が残されています。

←ぼろ塚（南清水町）

○ぼろ塚

西国街道の清水川を西に渡ったところの宿川原に「ぼろ塚」があります。「徒然草」の 116 段に宿川原を舞台にした「ぼろ（虚無僧の元流）」の話が載っています。

「しら梵字」は、自分の師の仇「いろをし房」と宿川原で出会い、ともに死んでしまいます。「いろをし房」は自分が殺されれば仇はなくなると思い、自ら望んで殺されます。「しら梵字」もそこで死を選んでしまう話です。宿川原は武蔵（現在の川崎市）という説もあります。

③亀岡街道

起点は大阪の高麗橋で、摂津東北部を通って京都府亀岡市に至ります。茨木では宇野辺から下穂積、上穂積、郡と北進し、中河原で西国街道と交わります。さらに東福井を通り、新屋橋を渡って庄の本、免山から泉原、上音羽を経て亀岡の別院町に至ります。亀岡へは以前清坂街道を通っていましたが、険しく物騒な地形であり、明治 25 年、現在の道路が整備され亀岡街道と呼ばれるようになりました。

○新屋坐天照御魂神社（ニイヤニイマスアマテルミタマジンジャ）

新屋坐天照御魂神社

亀岡街道の通る福井の北西部に小高い丘があり、日降山という一連の古墳群があります。その中腹に延喜式の古社があって、古くから福井の人々から親しまれた新屋神社です。この神社の祭神は３坐あり、天照御魂御皇大神（あまてるみたまこうたいじん）、天照国照彦火明命（あまてるくにてるひこほあかりのみこと）、天津彦瓊瓊杵尊（あまつひこににきのみこと）です。この神社の由来は古く鎌倉時代の初期の文献にその名があります。

○福井城跡

明治以降の「福井村村史」には、回字型の石垣の跡や土壇型の城跡があったとの記載があります。「摂津誌」には、1334 年楠正成によって築城され、1527 年細川氏の家臣三好筑前の守長元に滅ぼされています。今はその面影がありませんが、小字名には搦め手跡、大手跡、本丸などの地名が今も残っています。

○千提寺

キリシタン遺物資料館（千提寺）

福井を北進すると亀岡街道は山道に入り、竜王山南部の山間の開けたところが千提寺です。ここに忍頂寺の塔頭千提寺があったところから地名になったと言われています。千提寺の東方を南北に連なる小高い丘陵地を、地元では来栖山と呼んできました。大正８年に、千提寺から隠れキリシタンの遺物が多数発見され、昭和 62 年に市立キリシタン遺物資料館が建設され、一般に公開されています。来栖山は十字架を表すクルスからきたものといわれています。

④枝切街道

別名「鳥飼街道」とも呼び、淀川右岸の五久（摂津市）を起点として茨木へは島、真砂、水尾、新庄町、大手町で高槻街道と合流します。

兵枡（新庄町）

○兵桝

府立茨木高校のすぐ東側を枝切街道が通っており、新庄町には「兵桝」の広場があります。兵の集合場所であったり、集会所でもあったと伝えられています。南の隅には石灯籠があって昔の面影をとどめています。

兵桝の東側には茨木童子貌見橋の石碑があって、現在は川はなく暗渠となっています。

○鐘銘事件

慶弔 19（1614）年、京都方広寺大仏殿の鐘銘事件で釈明の使者であった片桐且元は、駿府で家康側近の本田正純らに詰問を受けました。大坂城に帰って報告した且元は裏切り者扱いを受け、身の危険を感じて鳥飼の渡しから枝切街道を通って茨木城に入場しています。これを題材にして坪内逍遥は「桐一葉」を著し、主家のため豊臣、徳川の和合を説いた忠臣としてえがいています。

⑤妙見街道

妙見街道は能勢妙見参詣の道として、信者の多かった大坂より亀岡街道を北にとって、国見より左折して能勢街道に入り千提寺を経て再び亀岡街道と重なり、上音羽の手前で分かれて多留見峠を越えて余野に出ます。

道筋には妙見案内の道標や常夜灯、妙見鳥居など多くの史跡が残っています。今日では芥川より、塚原、桑原を経て国見峠を越えて

妙見街道（千提寺付近）

泉原にいたる道筋の呼称となっています。

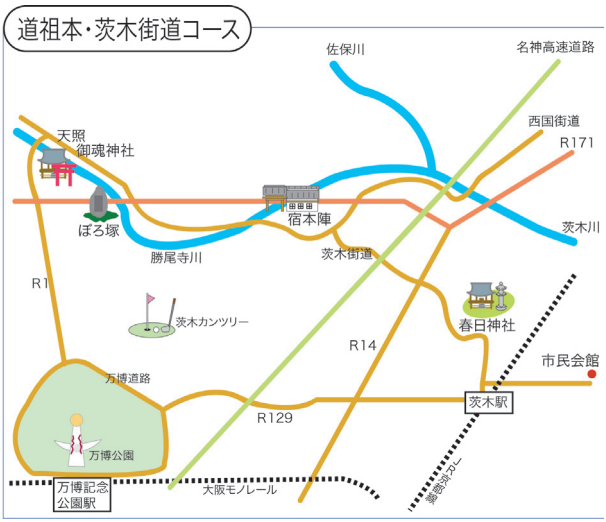
近世の領主能勢頼次が、諸願成就の神「北辰妙見大菩薩」として妙見山頂に安置したのが妙見信仰の始まりとされています。妙見信仰は中国の道教の影響が大きいと伝えられていて、妙見菩薩の図像には北斗七星が表現され、密教とともに流入したものと考えられます。

妙見山は能勢氏の祖源満仲の鎮守の地と伝えられ、頼次も天象 10（1582）年為楽山城をこの地に築いています。

茨木街道（郡３丁目付近）

道祖本街道と勝尾寺川

万博周回道路



4、街道サイクリングコース

①道祖本・茨木街道コース

比較的交通量が少なく、走りやすいお勧めコース（約 20 Ｋｍ）。

＜コース道順＞

市民会館前→万博記念公園周回（時計回り）→阪大前→清水→宿久庄→宿川原→郡→見付山→市民会館前

＜見どころ＞

〇天照御魂神社（宿久庄 5 丁目）

茨木に 3 座ある天照御魂神社のひとつ。

〇ぼろ塚（南清水町）

「徒然草」116 段に出てくる「ぼろ」（虚無僧の源流）の墓が祀られている。

〇郡山宿本陣（宿川原町）

西国街道にある大名の参勤交代の際に使われた有名な宿泊・休憩施設で国の史跡でもある。別名「椿の本陣」。

＜コース案内＞

市民会館から西進し、ＪＲ・名神の高架をくぐって、万博周回道路に入る。

周回道路を時計回りに進み、阪大前を左折して、宿久庄まで北上する。勝尾寺川のすぐ手前に天照御魂神社の小さな森が見えてくる。

勝尾寺川を渡って右折すると、川沿いの道が道祖本街道であるが、交通量が多いため勝尾寺川を渡らずに勝尾寺川の右岸の農道が快適に走行できる。やがて道祖本街道は国道 171 号線に合流するが、その合流地点のすぐ正面の川沿いにぼろ塚の標識が見えてくる。

ぼろ塚から勝尾寺川を渡り、少し南下すると西国街道に出る。これを左折して少し進めば郡山宿本陣が見えてくる。このすぐ東に道が二つに分かれており、左に行けば西国街道、右は茨木街道となる。茨木街道に進んで、郡、上穂積、春日を経由して市民会館に戻ってくる。

②西国街道・歴史探索コース

西国街道と茨木の史跡を探索できる遊覧コース（約 20km）。

＜コース道順＞

市民会館前→春日神社（春日５丁目）→郡山宿本陣→耳原公園→太田一里塚　→茶臼山古墳→磯良（疣水）神社→総持寺→須賀神社→溝咋神社→市民会館前

＜見どころ＞

〇春日神社（春日５丁目）

鎌倉時代から伝わる重要文化財の石灯篭が境内にある。

〇磯良（疣水）神社（三島丘１丁目）

名水が現在も湧き出ていて疣に効能があることから別名疣水神社と呼ばれる。

〇須賀神社（鮎川２丁目）

天然記念物で樹齢 942 年の楠が境内にあり、なかなか全体を見渡せない。

〇溝咋神社（五十鈴町）

神武天皇の后となった五十鈴媛が祀られており、相当長い参道がある。

＜コース案内＞

市民会館前から東へ進み、ＪＲ高架をくぐってすぐに右折し、北上すると春日神社の正面に出る。春日神社前を左折し、産業道路（大阪高槻京都線）を渡ると茨木街道に合流する。茨木街道を北上すると郡を経由して西国街道に出てくる。

西国街道を東にとり、国道 171 号線を横断すると西国街道の古い町並みとなって、亀岡街道と交差する。その先の茨木川に架かる幣久良橋を渡ってすぐ左に耳原公園がある。さらに東へ進み、安威川に架かる太田橋を渡ったところに太田の一里塚があり、その少し先に茶臼山古墳が左手に見えてくる。

茶臼山古墳から元東芝の前を南下し、171 号線を渡ると磯良神社（疣水神社）の前を通って、その少し先に総持寺がある。阪急総持寺駅前から駅前商店街を通って、突き当たりを左にとると、ほどなく須賀神社の小さな森が見えてくる。

須賀神社から西へ数百メートル行くと安威川に出る。安威川左岸を少し南下し、五十鈴橋を渡るとそのすぐ南に溝咋神社がある。

五十鈴町からジャスコ前を経由して市民会館前に戻ってくる。

西国街道　太田３丁目

磯良（疣水）神社

西国街道　黒塚

③亀岡街道・忍頂寺コース

亀岡街道沿いに忍頂寺まで北上して、サニータウン、キリシタン道を下ってくる健脚コース（約 30 Ｋｍ）。

＜コース道順＞

市民会館前→田中のまるまた→耳原公園→東福井→佐保→忍頂寺→大岩→サニータウン→キリシタン道（安威）→耳原公園→市民会館前

＜見どころ＞

〇糠塚（耳原公園）

茨木佐渡の守が信長軍の武将荒木村重・池田輝政連合軍と対峙するための陣地と食料庫の史跡。

〇忍頂寺

摂津国 33 ヶ所第 23 番札所。貞観 2（860）年、清和天皇から寺号を賜った勅願寺。

〇キリシタン道（安威）

サニータウン北陵中学前から追手門学院大学裏手まで数百メートルが現在も残っている。

＜コース案内＞

市民会館前から元茨木川沿いに北上し、ＪＲ高架の田中のまるまたをくぐると、ほどなく茨木川に突き当たる。これを右折し、新茨木本橋を渡り、茨木川左岸を北上すると耳原公園を経由して福井街道に入る。

福井街道は東福井２丁目あたりで亀岡街道に合流し、すぐに左右の分かれ道となる。右手が亀岡街道、左手が余野茨木線だが、交通量が少なく登りが緩やかな余野茨木線に入る。しばらく登りが続くが、佐保川・免山と快適なサイクリングコースが続く。

北辰中学前を過ぎると左右に道が分かれるが、右手に進んで忍頂寺スポーツセンター前に出る。その先の忍頂寺前で亀岡街道にぶつかり、右折して南下すると大岩を経由してサニータウンの入り口に到着する。

サニータウンの中を通過して北陵中学南西の角からキリシタン道（安威）に入れる。キリシタン道を数百メートル通過すれば追手門学院の裏手に出てくる。ここから安威川沿いに市内に帰ってくる。

亀岡街道　田中のまるまた

キリシタン道　安威付近

佐保川

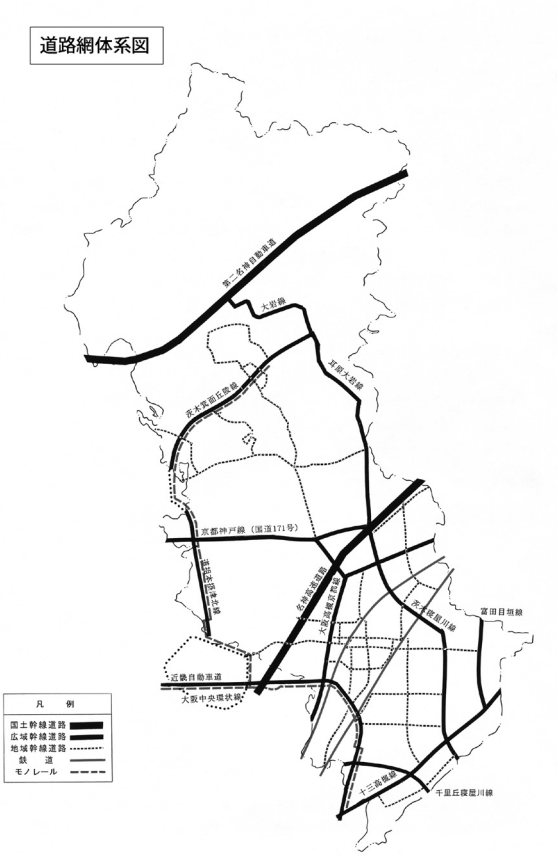
亀岡街道・忍頂寺コース
安威川
亀岡街道
忍頂寺
佐保
スポーツセンター
免山
大岩
R46
佐保山砦跡
豊臣亀岡線
忍頂寺福井線
サニータウン
キリシタン道
桑原橋
桑原橋
長ヶ橋
東福井
福井街道
勝尾寺川
耳原公園
幣久良山
耳原交番北
名神高速道路
西国街道
幣久良橋
三咲町
国道171号線
茨木川
JR京都線
まるまた
茨木カンツリー
R14
R15
市民会館
茨木市駅
茨木駅
R129
阪急京都線

5、道路網 ― 都市の発展と生活

茨木は歴史的にも陸上交通の要衝であり、多くの幹線道路が行き交っています。東西方向には国道 171 号線（西国街道）が三島江から茨木市に入り、西河原で安威川、三咲町で茨木川を渡り、畑田交差点で府道 14 号（大阪高槻京都線）と交差しています。ここから北西にカーブし、さらに上郡付近でゆるやかに左にカーブして西に向かい、勝尾寺川を渡って清水へと抜けてゆきます。

南方向には、府道 14 号線（大阪高槻京都線）が畑田町から春日、宇野辺へと茨木市内では、ほぼＪＲ東海道線と並行して大阪市内へと続きます。

北方向には、府道 46 号線（茨木亀岡線）が国道 171 号線の三咲町を基点として、安威、桑原、車作、清坂へと北上して、亀岡市に通じています。また、同様に 171 号線の中河原を基点として、府道 110 号線（余野茨木線）があります。福井からほ



「茨木市都市計画マスタープラン」（平成 10 年 3 月）

ぼ佐保川に沿って北上し、泉原、上音羽から豊能町へとつながり、妙見口を経てやはり亀岡へと通じています。

高速道路は名神高速道の茨木インターチェンジが上穂積にあり、ここから南へ約２km 南には中国自動車道と近畿自動車道とをつなぐ吹田ジャンクション・吹田インターチェンジがあり、文字通り、交通の要衝となっています。

さらに、第２名神高速道（近畿自動車道名古屋神戸線）が一部着工されており、計画では茨木市の北部を通り、茨木北インターチェンジが建設されることになっています。2018 年度全線開通の計画ですが、様々な要因によって現在のところ見通しは立っていない状況です。

都市における道路交通の発展は、私たち市民にとっても有益であり、快適な生活のためには欠かせないものとなっています。茨木市の道路交通事情は一部を除いて利便性が高く、道路整備も継続的に進められています。

しかし、経済的な合理性や産業流通の効率性のためだけの道路交通網の発展では、私たち市民の生活空間の快適さや人間生態系リズムを壊してしまう危険性があります。また、産業の立地誘導や住宅地域の整備だけでは、そこに住む市民の誇りや地域コミュニティを育むことは難しくなります。

都市は「第２の自然」とも言われています。都市としての利便性と住民を基点とする人々の心のよりどころとしての都市構造を考えていく時代になっています。

例えば、茨木市を中心とする北摂地域は関西のサイクリング愛好家から「サイクリングのメッカ」と呼ばれています。大阪中心部から交通の便が良く、比較的自動車の通行量が少なくて

景観の良い府道 110 号線（余野茨木線）、府道 114 号線（忍頂寺福井線）、そして旧西国街道などが主なルートです。

私たち（ふるさと茨木連帯）は、多くの分野の芸術家が市北部の山麓に工房を構えて創作活動をおこない、同時にそこへ市民が参加し集うことのできる「芸術の森構想」を推進しています。経済的な流通のためだけの道路や産業立地、住宅地開発などハードの整備だけでは都市の発展は望めないと考えています。芸術を通じてソフトな都市づくりを提案し推進したいと思っています。

［参考文献］
「わがまち茨木　街道編」
「わがまち茨木　水利編」
「日本地誌 15　和歌山県・大阪府」 日本地誌研究所
「大阪平野のおいたち」 梶山彦太郎　市原実　青木書店
「水をさぐる　下」 山本善稔　梅田出版

第４章
日本の磁場、時代の先進地・茨木

佐藤眞生／梅鉢明英
悴山紀一／福丸孝之

１、銅鐸と埴輪の工房・弥生の先進地三島

佐藤眞生

東奈良遺跡は、完形で日本唯一の銅鐸鋳型が出土したことで日本国中に有名になりました。それは 13 個の石製銅鐸鋳型です。その紋様は５つくらいあるようです。

鋳型ですから、これを使って銅鐸が生産されていたということになります。その生産期間は紀元前後から古墳時代の４世紀頃までといわれています。この時期は丁度耶馬台国卑弥呼の時代です。東奈良で生産された銅鐸は、北は兵庫県豊岡気比から南は香川県善通寺あたりまで配布されています。

銅鐸は、祭器といわれていますが、これまでに全国で 470 個ほど出土しており、その殆どが近畿地方です。出土の状況は、村はずれの丘の麓、山でいえば頂上の少し下で、頂上からの出土はありません。また、副葬品としての出土もありません。これらのことを考えると弥生時代の神器だったのでしょう。銅鐸はやがて銅鏡へと展開していきます。

銅鐸の鋳型「茨木の史跡」

神器は同族や氏族の精神的統合の象徴です。また、支配の象徴でもありました。東奈良一帯は弥生の神器を生産し、配布させることのできた先進地だったといえます。弥生の盟主といってもいいでしょう。

同じ三島で、茨木に隣接する高槻ですが、ここには埴輪工房があります。埴輪は古墳時代３世紀後半から６世紀後半、聖域の区画、葬送の副葬品、あるいは殉死に使われた中空の素焼きの焼き物です。

高槻の新池遺跡は３万㎡に及ぶ埴輪工房です。ここでは 450 年頃、太田茶臼山古墳のために窯３基・工房３棟・工人の住居７棟が営まれていました。480 年頃には窯５基と住居７棟が追加されて番山古墳などの埴輪が生産されています。そして 530 年頃には今城塚古墳のために窯 10 基と５棟の工房兼住居が追加されています。

こうしてみると、茨木と高槻は銅鐸と埴輪という弥生の統治の象徴を生産し、配布する先進地であり、弥生の盟主の存在を窺わせます。

埴輪工房遺跡（高槻市新池）

2、神功皇后の三韓征伐と茨木

佐藤眞生

神功皇后は、第 14 代仲哀天皇の后です。「古事記」によると、后が天皇と筑紫国（福岡県）にいるときに、「西の方（新羅）に金銀宝の国がある。おまえに与えよう」という神さまのお告げがありました。后はそのことを天皇に告げますが、天皇はこれを信じなかったために神さまの怒りをかい、亡くなってしまいました。

仲哀天皇の没後大祓をすると、さらに皇后に神さまのお告げがあり、「お腹の子が西の方を統治する。神に捧げ物をして海を渡れ」といわれました。皇后は戦いの準備を整え、362 年 10 月、博多湾から新羅に出兵します。

皇后軍は、怒涛のごとく新羅に至り、甘浦（カンポ）の大鐘川を遡上して慶州に向かいました。この勢いに、新羅は日本を神国とみたためか戦わずして恭順を誓い、百済と高句麗もこれにならいます。

神功皇后の三韓征伐は、日本のあちこちに、鮎を釣ったとか、出産を遅らせるために石を抱いたというようなさまざまな伝承を残しています。中でも、茨木と関係する「戦勝祈願・航海安全祈願・戦勝報告」が行われた伝承地を拾ってみましょう。

唐津鏡山
対馬鰐浦
沖ノ島・宮地嶽神社
京都宮津・籠（コノ）神社
新屋坐天照御魂神社（西河原）・磯良神社

茨木の磯良（疣水）神社の由緒書によると、神功皇后が三韓征伐出兵にあたって、新屋坐天照御魂神社（ニイヤニイマスアマテルミタマジンジャ）で戦勝祈願をし、磯良神社の玉の井というお神水（コウズイ）で顔を洗うと、顔に疣ができて男のような顔になり、戦勝報告の折にふたたびお神水で顔を洗うと元の美形に戻ったとあります。

西河原にある新屋坐天照御魂神社には複数の神が祀られていますが、建御名方命（タケミナカタノミコト）という軍神も祀られています。神功皇后は大国主の子で、日本の三大軍神（建御名方神（タケミナカタノカミ）・建御雷神（タケミカヅチノカミ）・経津主神（フツヌシノカミ））の建御名方命に戦勝祈願をしたわけです。そして、新屋坐天照御魂神社の境内社だった磯良神社には、磯良大神という水先案内を司る神さまが祭られています。神功皇后はここで航海の安全を祈ったのです。この神さまは九州の安曇氏の祖神であり、安曇氏は住吉三神（底筒男命（ソコツツノオノミコト）、中筒男命（ナカツツノオノミコト）、表筒男命（ウワツツノオノミコト））とともに、神功皇后を新羅まで案内したといわれています。

３、耶馬台国三島説の証明

―茨木は邪馬台国の中心であった―

大阪府立福井高校教諭　梅鉢　明英

景初三（239）年、魏に使いを出し、親魏倭王の称号を受けた邪馬台国の女王卑弥呼が亡くなったのは正始八（247）年、狗奴（クヌ）国との交戦中で、径百余歩（約 140 m）の大きな冢（ちょう）（塚、墓）を造り、奴婢百余人を殉葬したと記す『魏志倭人伝』。その墓を茨木市耳原にある幣久良（てくら）山とし、邪馬台国の中心地を、今はなき茨木市のランドマーク、フジテックの塔の立っていた総持寺周辺とするのが「**耶馬台国三島説**」。その証明に 12 の項目を挙げて説明していきます。

①標高 49 m（標高差 23 m）で、東西南北どこから見ても丸く見える幣久良山の直径約 140 mは『魏志倭人伝』の卑弥呼の塚の規模に合います。1994 年 12 月耳原公園工事が強行されるまで、幣久良山頂の明治天皇碑と大正天皇碑の間の東斜面に横穴式石室と判断される石組が残っていました。４世紀築造とされる将軍山前方後円墳の前方部に接して築かれていた将軍山３号墳横穴式石室とそっくりです。｛写真など詳細は『大和の証明』第５号「卑弥呼の挽歌」に記載｝将軍山古墳に隣接する幣久良山は、古墳として利用された可能性があります。それに、幣久良山南半分の字名（あざ）は毛受野（もずの）で

明治天皇碑（上）
大正天皇碑（下）

幣久良山（古墳）

すが、耳原（みのはら）にある古墳の字名は皆毛受野となっており、幣久良山古墳説の裏づけとなっています。幣塚（ぬさ）とも糠（ぬか）塚とも呼ばれた幣久良山を古墳とする学者は少ないのですが、明治の地理学者吉田東吾はその著『日本地名大辞典』に幣久良を古墳と記しています。

②耳原にある幣久良山は、三島の島下郡茨木のランドマーク的存在で、その歴史は、高々、30 年程度のフジテックタワーの比ではなかったし、茨木市の学者が説く 500 年程度でもなかったのです。耳原公園入口にある「天正年間明智光秀糠塚（幣久良山）築造云々」の化粧石板説明は、造り直すだけ恥の上塗り、税金の無駄使いとなることがまだ解っておられないようです。幣久良山の土台は（少なくとも地上 23 ｍの

下部半分ほどは）独立のMa7層といって何万年も前から堆積された大阪層群の上部地層で出来ていて、この茨木の地に人間が上陸した時には既に存在していたのです。３世紀に活躍した卑弥呼がその独立丘に己が墓を築かせる余地は充分にあったのです。現に、西側上層部 13 m程は後世の土盛りとなっています。耳原大池のある東側及び北側は、瓦用採土で削られたりして不明ですが、上記①に記したように推定６世紀頃の横穴式石室石組が残されていました。

③幣久良山が古代から重要視されていたのは、次の二つの点でも理解してもらえるはずです。即ち、幣久良山が、三島における古代条里制の起点であったという事実です。東西、南北の線で区画された条里を辿っていくと、幣久良山が起点となっていることに気づくというのです。更に、幣久良山はもう一つ重要な起点の役をしていました。三嶋路と呼ばれた古代山陽道（後の西国街道）とＴ字形に交差する、三嶋路南半区間（通称三嶋南下路）の分岐点が幣久良山の南に設定されていたのです。足利健亮氏の『日本古代地理研究』には「幣久良を起点として難波京へ向けて南下する道は条里到来以前の計画的設定の道である」と記されています。私は、幣久良から井於（イノヘ）神社までほぼ直線で辿ることのできるこの道を「幣久良南下道」と呼ぶことにして、第８回、第９回と２年かけて三島古道歩きを実施しました。三島において幣久良山がいかに重要な役を果たしてきたかを知ってもらいたかったからです。｛この２回の古道歩きの詳細は最新の『大和の証明』第６号「第３章」に記載｝

④山陽道は山陰道に先駆けて造られたようです。いわゆる陽の地（中国山脈の南、瀬戸内海の北）にあって、人の住みよい場所を繋ぐ道であるからですが、239 年の邪馬台国の女王卑弥呼の朝貢に応えて魏の使節が利用するにはまだ問題があったようです。なぜなら、水行（船）なら 10 日で済むのに陸行はその３倍の１月も掛かるようだからです。難波（なにわ）の港から九州博多まで、人間が櫓を漕ぐ昔ながらの船では約 30 日掛かりました。『魏志倭人伝』に記される奴（ぬ）国（博多）から東行百里（三百歩＝一里＝約 400 mなので約 40 ｋｍ）の不弥（ふみ）国、その不弥国は不明ですが奴国からほぼ一日の行程で着く港。そこから南に水行 20 日で投馬国（江戸時代まで朝鮮外交使節が潮待ちした鞆（とも）ノ浦と考えられます）。そして、南に水行 10 日陸行１月で邪馬台国に着くと書かれているのですから、南を東に訂正するだけで、どんぴしゃり。邪馬台国は難波つまり大阪湾に港を擁する七万余戸の大都、つまり三島（島上・島下・豊島）となるのです。

⑤「どこがどんぴしゃりや！」と耶馬台国三島説を快く思わない人は考えられるでしょうから、きっちりと説明します。邪馬台国を九州に拘（こだわ）る人は「南を勝手に東に変えるな」と言われます。しかし、中国人は倭人の住む処をナンと随分南にあると考えていたことが分かります。７世紀、聖徳太子が親書を出した隋の時でさえ「邪靡堆を都とする倭国は、会稽の東にあり、儋耳（たんじ）と相近し」としていますし、そのずっと後の宋の時代に使われていた『混一疆理歴代国都図（こんいつきょうりれきだいこくとず）』は九州を北に本州を南にしてあります。「南は東のまちがい」であることを認めない邪馬台国九州説の方がまちがいなの

です。また、邪馬台国を奈良の大和に拘る人は「海に囲まれる狭い日本、陸行１月はありえない。１日のまちがい」とされます。しかし、それこそ奈良一県の古墳だけでも百枚を超える銅鏡が出土していますが、たとえばそこに書かれる「天王日月」の文字、一枚として書き間違えているものがありますか、と聞いてみたい。陸行１月でよいのです。但し、水行なら 10 日、陸行なら１月、と読むべきなのです。従って、邪馬台国は、船が着く港を擁した国であることが重要な条件となってくるのです。着岸港を持たない奈良大和は、卑弥呼の居る邪馬台国ではありえないのです。まして、径二百歩とも言うべき箸墓古墳を卑弥呼の墓とする学者は誰なのか連れて来て欲しいものです。すぐ傍のホケノ山古墳の方が築造年代から言って卑弥呼に近いのですが、径五十歩強で、帯に短し襷に長しで、悩んでおられるようです。それもそのはず、奈良大和は『魏志倭人伝』に記される「21国」中の「邪馬国」と私は見ています。

⑥『魏志倭人伝』には「今、使訳通ずる所三十国」とあって対馬国から邪馬台国までの８国と斯馬国から奴国までの 21 国、そして奴国の南とされる狗奴国の 30 国が記されています。21 世紀の今日に至るまで、邪馬台国を含め不弥（フミ）国から狗奴（クヌ）国までの 25 国の比定はまだできていません。最大の原因は邪馬台国が定まらないからですが、私は 21 世紀に入ったその年に 21 カ国の比定ができたので、拙著『大和の証明』第４号「女王卑弥呼の属国と末裔」に発表しました。過去発表されたどの仮説よりも筋が通っていると自負しております。詳しくはその第１章を読んで戴くことにして、ここ

では21カ国の最初の斯馬国と２番目の己百支国を紹介します。『魏志倭人伝』をよく読めば簡単に解けることでした。最初の国の「斯馬国」は「投馬国」・「邪馬台国」とほぼ一直線に並んでいると読めます。なぜなら、方角の記載抜きに邪馬台国の「次」の斯馬国が挙げられているからです。問題はよみです。倭人国名はその後の地名にその痕跡を残しています。21カ国も同様で「シマ」「イホキ」と続く地名を探すのです。邪馬台国を京都と接する島上郡を含む三島と比定すると、ほぼその東に位置する近江の志賀が斯馬国であると分かってきます。逆三角形の琵琶湖の南端の志那湊を中心とした国。すると次は伊吹で、己百支国となります。

⑦16番目の「邪馬国」を奈良県大和桜井と比定できたのは、それまでの積み重ねもありますが、東北津軽の「我らは神武と戦い敗れた安日彦・長髄彦の子孫にして、アイヌの末裔」と記す『東日流外三郡誌』や『津軽家古系譜号』に出会えたからだと考えています。大和には日本を意味するものと奈良を指すものとがあるように、邪馬台国の時代にも二種類の大和があって、邪馬台国はヤマトアイ国、邪馬国はヤマト国という私の仮説が証明できたのは『東日流外三郡誌』の次の主旨の文でした。「耶馬台国の安日彦王は陽の地、摂津国の安倍野にして、弟王長髄彦は陰の地河内に居住していた」1994年、邪馬台国研究を始めた時は「夢と歌」しか手がかりはなく、「ヤマトアイ→ヤマタイ」は失笑ものでした。それでも独自のアイヌ語による解読などで『大和の証明』１号、２号を自費出版し、高槻市小寺池図書館

で講演をした時に、私の三島説にそっくりな内容が書かれているとして教えてもらったのが『東日流外三郡誌』でした。学者に言わせると江戸時代の偽書だそうですが、私の説の補強になるので『大和の証明』第３号「卑弥呼幣久良に死す」からは引用させてもらっています。中でも、安日彦・長髄彦を邪馬台国王とする記述は既に鎌倉時代成立の『曽我物語』に出ている訳で、全て偽書として抹殺することには異議を唱えます。

⑧『東日流外三郡誌』を『古事記』や『日本書紀』同様、資料として使えるなら、神武天皇とのかかわりを通して耶馬台国三島説にとって有利な証明ができます。二つに分けるべきかも知れません。一つは、神武が九州から東征してきて長髄彦と会う前です。神武が初代天皇となる以前の行動であるにしても東へ向けて移動する場面に三度までも「上る」という謙譲語を使っているのです。誰に対してなのか。長髄彦ではありません。河内日下（くさか）より手前で播磨より東の「聖地」の存在が見えてきます。記紀では特定できませんでしたが『東日流外三郡誌』を読むと、それが耶馬台国王安日彦の住む摂津国の安威（あゐ）野と分かってきます。ちょっと強引でしたか。それなら二つ目は少し謙虚に論証してみましょう。神武が長髄彦を倒すために饒速日命（にぎはやひみこと）を利用する場面です。記紀に違いはあるものの本当に簡単です。「長髄彦は神武天皇に逆らって妹婿の饒速日命に取って代わられた」これは新聞で言うなら見出し（ヘッド）に近い文です。『東日流外三郡誌』を使って書き出し（リード）文にすると「登美の長髄彦は兄の耶馬台国王安日彦と謀って、九州から東遷し大和の大王になろう

とした神武に逆らって初戦は勝ったが、逸早く見切り裏切って初代神武天皇（ハツクニシラススメラミコト）についた妹婿の天照国照天火明饒速日命（あめのほあかり）と甥の宇麻志麻遅命（うましまじ）に取って代わられた」となります。そして、この文を証明する考古学的遺跡が、天照国照天火明饒速日命を祀る西河原の新屋坐天照御魂神社（ニイヤニイマスアマテルミタマ）や総持寺周辺から出土すると予言して書いたのが、2008 年秋に出版した『大和の証明』第 6 号「アイの卑弥呼とニキの豊宇迦」であり、2008 年 10 月 26 日に実施した「第 10 回三島古道歩き」の冊子です。詳しくは、この 2 冊をお読み下さい。

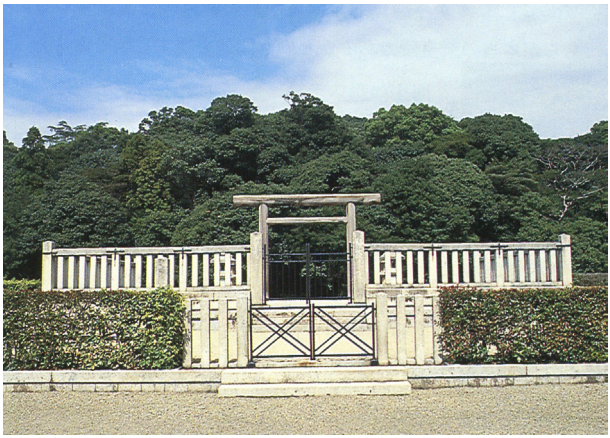
⑨『古事記』や『日本書紀』に記される神武天皇だけでも、「あきづしま大和（ヤマト）安威（アイ）」が日本列島の中で最も重要な聖地であることを証明できます。初戦は長髄彦に敗れ、熊野（邪馬台国に敵対する狗奴（くぬ）国と私は比定する）で回復した神武は、宇陀から敷島の大和に入り、登美の長髄彦が支配する北大和・南山城・河内を攻め取って大和朝廷を樹立するに当たってどうしても必要なものがあった。それは、大和の新しい覇者としての権威であった。大王として聖なる血を受け継ぐ必要があった。神と崇められる大物主（オオモノヌシ）の正統な血を継ぐ女性を皇后として迎える必要があった。その女性こそが茨木溝杭（ミゾクイ）の五十鈴姫（ホトタタライスケヨリ姫）であった。茨木の持つ特別神聖な精神的、歴史的重みは一朝一夕で作られるものではないのです。祭祀具としての銅鐸は銅鏡の比ではありません。東奈良（サワラギかせめてイバラキ南と命名してほしかった）は銅鐸生産地でしかもその配給先は四国や日本海に及びます。発見された鋳型にしても銅鐸にしても氷山の一角。卑弥呼に先行する弥生の一時期、

この茨木は倭国 30 カ国の盟主的存在であったと言えるのです。いや、紫金山古墳出土の銅鏡を見ていると弥生の終末邪馬台国時代まで続いていたと思えます。神武が望んだのは茨木の文明先進性だけではなく、数値では測ることのできない価値もあったと考えます。現代の人にはちょっと分かりにくい証明となってしまいました。しかし、今の茨木に一番欠けているもので、だからこそ、この本を読んでいただきたいものです。

⑩神話の世界から飛び出してきたような神武天皇で耶馬台国三島説を証明しても、得心してもらえない人のために、３世紀に実在した可能性の非常に高い人物で説明することにします。『魏志倭人伝』の邪馬台国には「官有伊支馬、次曰弥馬升、次曰弥馬獲支、次曰奴佳鞮」と４人の副官の名が記されています。この中の弥馬獲支（みまくき）を内籐博士は御間城（みまき）入彦、つまり第 10 代崇神天皇の御名代としていました。『古事記』にはこのハツクニシラス崇神（スジン）天皇の没年干支が記され、258 年と読み取れます。卑弥呼没後 10 年です。ところが第一副官伊支馬（イクメ）も活目（イクメ）入彦、つまり第 11 代垂仁（スイニン）天皇と取れます。そこで内籐博士は迷われたのですが、私は迷いません。活目は幣久良を卑弥呼の墓と後押しをしてくれる存在だからです。

私は副官の伊支馬を大和朝廷第 11 代垂仁天皇と比定します。垂仁は諡（おくりな）で、諱（いみな）は伊久米・活目。伊支馬と同じ発音のイクメ。この天皇の御陵は『古事記』に「菅原之御立野中」と記され、第 20 代安康天皇陵と共に奈良の菅原所在とされていましたが、本居宣長を始め疑問視する者多く、先ず安康陵

が古墳ではないことが解明されました。では安康陵はどこか。諸説出ましたが、私は茨木市の太田茶臼山古墳と考えました。全長 225 ｍの茶臼山古墳と同大相似形の古墳が古市に二基あり、市野山古墳は安康天皇の父第 19 代允恭天皇陵とされているのです。岸部との関係からも、太田茶臼山は安康陵の可能性が高いのです。すると、菅原に二基あるとされていたもう一基の垂仁天皇陵も同じ所になくてはなりません。では、どこか。鍵は「御立野中」にあります。幣久良山は明治天皇・大正天皇が共に使われた「御野立」です。「御立野」「御野立」同じものと考えられます。その御野立幣久良と目と鼻の先に全長 107 ｍの前方後円墳将軍山古墳があり、４世紀前半の築造と発表されています。この将軍山古墳は「御立野」の「中」に在ると言えるのです。当然、「御立野」が先に造られています。垂仁天皇陵に先立ち且つそれを中に包みこむほど大きくて、しかも目印とされる３世紀代の築造物となれば自ら「径百余歩の冢」になるのではないか。



太田茶臼山古墳（「茨木の史跡」より）

⑪耶馬台国三島説の弱点は、考古学者の支持がないために考古学的証明がないというところです。原因は 1994 年６月、私が邪馬台国研究を始めた動機にありました。幣久良山が工事で崩されるのを救って欲しいという夢告がスタートでした。幣久良は卑弥呼の塚でそのまま保存して欲しいと言っても、夢や歌では証明になるわけはなく、12 月に公園工事が始まって木が切り倒され、山が削られ道がつけられるのを見るしかなかったのです。そこからどうしても他者に対して、とりわけ考古学者に批判的になったのが原因です。証明する手段は文献になってしまいました。考古学的証明がないこと、お許し下さい。

さて、幣久良の初出文献ですが、『日本書紀』の第 27 代安閑天皇紀です。皇后の屯倉として選ばれたのが、三島県主飯粒の良田竹村四十町。桑原・御野（耳原）四十町の総称として「タカフ」と呼ばれていますから、標高 49 ｍの幣久良山を措いて他には考えられません。どこから見ても、たんこぶのように目立つ丸い独立丘です。実は、たんこぶはアイヌ語のタッコプ（丸い土山）を語源としていました。６世紀、継体や安閑の時代は、タッコプとたんこぶの間の子「タカフ」と使われ、その後「テクラ」と訛ったようです。別名の幣塚も幣山と読めばアイヌ語イナウの複数形になります。アイヌ語による解説は次項に回して、ここで少しだけ考古学的解説を付け加えることにします。幣久良には周濠のような耳原池があります。すぐ傍に佐保川や勝尾寺川があるのにわざわざ遠くの安威川の一ノ井堰から水を引いてきています。下流の五社井堰は対岸（安威川左岸）の藍野に農業用水を提供し、その水路で島上郡と島下郡に分け

耳原大池

られています。築造推定年代は５世紀ですが、４世紀とする考古学者もいます。五社井堰より上流にある一ノ井堰および安威川右岸の水路は当然先に造られており、４世紀は堅いのですが、私は耳原大池の中に走る「シララ＝シラル」の存在から、３世紀と希望的観測をまじえて考えています。

⑫耶馬台国三島説の強みはアイヌ語による地名解釈という、まだこの地域では誰もしていない方法で古代の歴史解明をしているところでしょう。恐らく、前項の途中から多くの読者が戸惑われていると思います。しかし、アイヌ語抜きには私の耶馬台国三島説の証明はできませんので、できるだけ簡潔に説明していくことにします。

茨木市の初代市長の高島好隆氏はイバラキ（茨木）をは

じめ、サワラギ（沢良宜）、ナイゼ（内瀬）、ヘカ（倍賀）といった地名をアイヌ語で解釈できることに興味を持たれ『私本いばらき風土記』に、ウバラキ（茨城）アイヌ語解釈を、梅原猛氏の『地名と風土』から引用していました。「アイヌ語では、ウバラギのウは群れをなす、バラはバラバラになる。キはする。集団をバラバラにして殺してしまう。多勢いた土クモを追いつめて皆殺しにした。それが地名になった」私はイバラキとウバラギを同語と考えます。シラヌイの筑紫の宇土で生まれた（奇しくも映画「幻の邪馬台国」の宮崎康平氏と同じでした。日に輝く干潟を歩くシーンは感動で涙があふれてきました）。卑弥呼はアキヅシマ大和の安威で亡くなり、宗女トヨが跡をつぐのですがウラギリの太田の御子のためにヤマトアイの人々はバラバラになってシサンしてしまうのです。夢や歌や奇跡による証明は、絶版となった『大和の証明』１号・２号にしておりますが、ここでは『摂津風土記逸文』でしてみます。

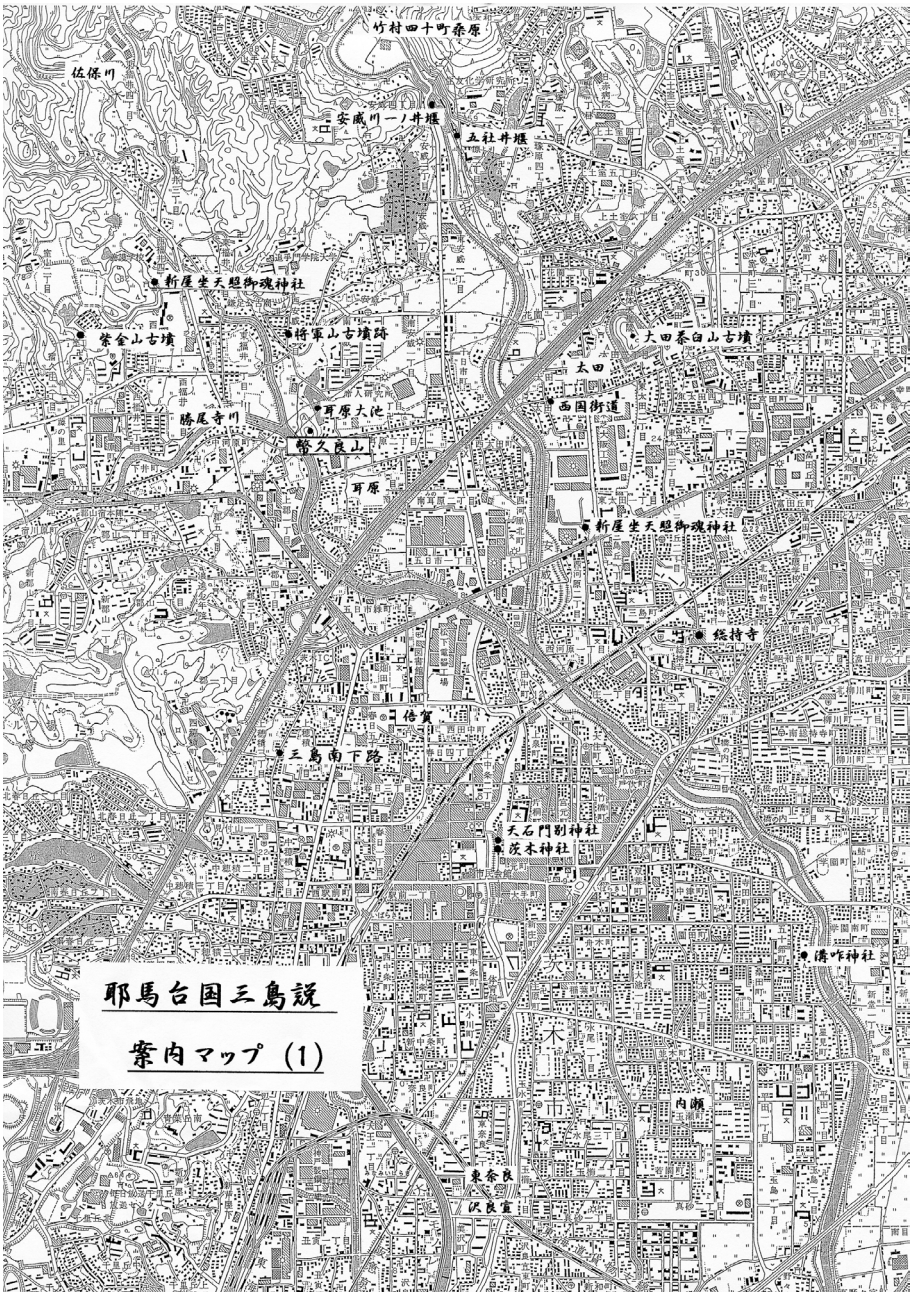
「宇禰備能可志婆良能宮（うねびのかしはらのみや）に天の下をお治めになった天皇（神武）の御世に偽物土蛛（つちくも）がいた。――稲倉山。昔、止与宇可乃売神（とようかのめがみ）は山の中にいて飯を盛った。それによって名とした。また云う。――昔、豊宇可売神はいつも稲倉山にいて、この山を臺所（ダイドコロ）にしていた。のちにわけがあって、やむを得ず、ついに丹波の国の比遅（ヒジ）の麻奈井（マナイ）に還られた」

邪馬台国の卑弥呼の後継者「トヨ」と幣久良山の麓にあった延喜式内社の幣久良神社の御祭神「トヨウカ」は同一人物と見ています。明治時代に合祀（ゴウシ）された阿為（アイ）神社では稲荷（イナリ）神として相殿（アイドノ）に祀られていますが、伊勢（アイヌ語チセなら古代の家）の外宮神「トヨウケ」も同一人物で、共通し

ているのは御食津神であることです。漢字を当てると「止与宇可・豊宇迦・臺与宇気」など種々あります。ただ、「稲倉御魂」をなぜ「ウカミタマ」と読めるのか不明なのですが、稲荷神の場合は「宇迦御魂」と表記するより「稲倉御魂」の方が「稲の豊饒をもたらす神」に相応しいのでしょう。『摂津風土記逸文』と同じ「稲倉」がよく使われます。私は、稲荷の起源はこの「豊宇可売神はいつも稲倉山にいて、この山を臺所にしていた」にあったのではないかと考えるようになりました。九州の伊都国の長官「爾支＝伊尼翼（冀の誤りで稲置のこと・アイヌ語ではｎｉｓｐａ）」がヒントです。それにまた、幣久良南下道と淀川の交点、茨田（アイヌ語ではｍａ・ｔｕ＝浦曲のこと）の高瀬での神楽歌「天に坐すや　豊岡姫のやあいそ　誰が贄人ぞ　しきつぎ上る網下し小網さし上る」や、それこそ柳田国男採集の御幣倉歌「みてぐらは　わがにはあらず　天に坐す　豊をか姫の宮の御幣久良」が三千以上ある延喜式内社のうちたった一社しかない「幣久良神社」の祭神「トヨウカ」のことを歌っていると考察できるからです。そしてこのニキの豊宇迦が一心に祀り申し上げている神は誰か、そのヒントは茨木神社の棟札にありました。宝徳元（1449）年の棟札には、[高林大明神・櫛石窓神と豊石窓神] とあって、天石門別神を祀ってありました。「高林」とは「竹村」即ち「幣久良」のことと考えられるのです。幣久良の耳原池の中のシラル（干潮になると現れる波かぶり道）の付け根にはシラ髭猿田彦神が祭られていました。高林大明神・櫛石窓神と豊石窓神と共通するのは、ともに「荒神」とされていることです。神武天皇に追われた「土蜘蛛」は『常陸風土記』ではアイヌ

人とされています。彼らが元主と仰いでいた指導者は「荒神」とされていくのです。

「イバラキ」という地名を、アイヌ語で解読していくと、これまた、邪馬台国の歴史が透かし出されるように浮かんできて、やはり「茨木は邪馬台国の中心であった」証明ができた、と思うのは私だけでしょうか。


竹村四十町条原
佐保川
安威川一ノ井堰
五社井堰
新屋坐天照御魂神社
紫金山古墳
将軍山古墳跡
大田春白山古墳
太田
西国街道
耳原大池
勝尾寺川
磐久良山
耳原
新屋坐天照御魂神社
総持寺
佐賀
三島南下路
天石門別神社
茨木神社
溝咋神社
耶馬台国三島説
案内マップ（1）
内瀬
東奈良
沢良宜

4、大織冠（タイショクカン）鎌足公暗殺説

悴山紀一

（1）小説と歴史的事実

私の鎌足研究は、小説を書くための取材からはじまった。文献を調べ、史跡のある現地にも足を運び、想像力をたくましくして、一本の歴史小説を書く。正史だけを頼りにして、小説が書けないことはないが、誰もが知っている事実を、少し脚色しただけの小説では、読者の心を掴むのは難しい。鎌足の場合でいえば、正史は日本書紀である。だが、日本書紀を小説家の眼で読んでも、鎌足の実像は浮かびあがって来ないし、むしろ、謎が深まるだけである。

私は、何度も奈良明日香村に足を運び、鎌足が政治的に活躍した歴史舞台を見ている。甘橿丘に登り、飛鳥川を眺め、大和三山や雷山を臨んだ。多武峰談山（トウノミネダンザン）神社に足をのばし、鎌足の墓に参詣している。だが、大織冠神社の存在を知ったのは、妻と結婚してから後のことである。

大織冠神社は、安威山の頂上の古墳をご神体にした小さな神社で、茨木市西安威にある。妻と結婚したばかりの頃、岳父の植村勝純に連れられ、はじめて大織冠神社に上り、鎌足公古廟の石碑を見た。

「鎌足の古廟とは、どういうことですか」

古廟の意味くらいは、小説家であるから知っている。草深き田舎の荒れはてた神社に、鎌足の名を見て驚いたのである。

「鎌足の墓は、もともとここにあったらしい。定恵と不比等という息子が来て、墓を掘り起こし、頭だけ多武峰に持って帰り、談山神社に埋め戻したと、この村では言い伝えられている。そ

れで、ここは胴塚と呼ばれているが、この話はうそや。阿武山の京大地震観測所の裏にある貴人の墓が、鎌足さんの墓や」

安威山の頂上に立つと、安威川をへだてた阿武山が一望できる。古朝鮮語で、アブは父親、アイは息子を意味する。哲学者の梅原猛は、貴人の墓を鎌足の墓と断定しているが、安威山を阿武山の遥拝所だとも言っている。

「息子が父の墓所をあばき、その頭部だけを持ち帰るとは、ただごとではない」

岳父の話を聞いて、私は、鎌足は暗殺されたのではないかという発想を得た。鎌足が生きて首を切られていたのであれば、頭だけ多武峰に持ち帰ったという伝承があっても不思議ではない。

「鎌足公古廟の石碑は、箕面の豪商が、大正時代に建てたものといわれている。名前は忘れたが、この辺では有名な商人やった。それからやろな。ここが鎌足の墓があったといわれるようになったのは」

岳父はそう言ったが、その認識は間違いであることは、その後の私の取材であきらかになる。その一つを示すと、大念寺から安威の村中を下がってくる旧亀岡街道は、村はずれで二つに分かれる。左に行くと、小野又の坂を下って亀岡線に、右にとると追手門大学の正門に出る。そこに、明治以前に建てられたと思える石の道標が、やや傾きながらいまも立っていて、「左いせ（伊勢）。右鎌足公古廟」と刻んである。すなわち、大正時代以前に、大織冠神社は鎌足の古廟として定着していたのである。

私がはじめて岳父と大織冠を尋ねたのは、三十年も前で記憶はうすれているが、鎌足暗殺考の原点になったのは、その日であった。

大阪府立福井高校の教諭で、郷土史家の梅鉢明英などは、小説家は情念だけで、歴史を断定できるが、研究家はそうはいか

ない云々と述べているが、鎌足暗殺説は、構想三十年に及ぶ新説である。小説は情念があれば書けると思われがちだが、情念のほかに、地道な取材があって、書いていることを一般は知らない。研究家は、反論に対してむきになって弁明するが、小説家はそれをしないだけのことである。

自然科学において謎（ブラックボックス）に突き当たると、仮説を立てる。その仮説にもとづき、いろんな実験をして、ブラックボックスを開けて見たわけではないのに一つの結論を出す。理論物理学などは、実証されていないのに、いずれ実証されるであろうと判断して、ノーベル賞をどんどん出している。

歴史学での新事実の発見は、やはり仮説をたてることからはじまる。古代日本史を解明するブラックボックスは天皇陵にあると思うが、これを開けて見るということは出来ない。私の鎌足暗殺説は、仮説からはじまっているが、伝承を取材して検証し、日本書紀を読みなおして見ると、新しい事実がつぎつぎに浮かび上がって来た。一編の歴史小説では収納しきれないのではないかと思う。

（2）三つある鎌足の墓

毎年十月十六日になると、旧安威村の有志が集まり、安威山の大織冠神社で、鎌足の生誕祭が行われる。日本書紀によると、十月十六日は鎌足の命日である。誕生日と命日が同月同日の人が、いないわけではないので、それはそれでいいのである。私は、脚を痛めてからは、参加していないが、家から安威山にむかって遥拝だけは欠かしたことがない。

貴人の墓が見つかったのは、昭和六年で、京都大学地震観測所建設のトンネル工事の途中であった。大織冠と思われる錦帽、

玉枕、黄金の太刀など、副葬品が見事であったため、天皇陵かも知れないという見解が出て、すぐに埋め戻された。だが、このことが新聞に報じられると、三万人もの人が阿武山に登り見学したとのことである。

その場所は、うばめ樫に囲まれて、京大地震観測所の裏にあり、貴人も静かに眠っている。うばめ樫は、安威の村でも生垣としている家が見られるが、もともとは聖域を示す樹木だそうである。貴人の墓所にうばめ樫を植えたのは、安威の庄屋だった家の吉田正一郎という人だと聞いているが、九十年後のいまでは、私の家からでも、それとわかるほど大きく茂っている。

二十年ほど前、阿武山の貴人の墓を見学するということで、またまた三万人が登るという騒ぎが起こった。その発端は地震観測所の隅から、発掘当時に撮影したガラス板写真が発見されたことで、その写真をもとに、副葬品を再現すると、貴人の墓に眠る主は、藤原鎌足であることが判明したからである。

貴人の墓が、鎌足の真の墓だとすると、痛手を受けるのは、多武峰談山神社であり、大織冠神社を祀る安威の人々である。

「談山神社は、鎌足公の霊魂を祭る神社であるから、ご遺体が阿武山にあろうと、安威山にあろうと、動じることはありません」

新聞に報道された宮司の公式コメントであるが、談山神社側が動揺しなかったとは考えられない。

「胴体だけしか残っていないといわれれば、それまでだが、安威山は鎌足さんのお墓です。お墓でないところをお墓だとして、何百年もの間、お祭りを続けまっか。藤原九条家が、ちゃんと認めているのでっせ」

安威神社の氏子総代の宮後悦二さんは言う。大織冠神社は安威神社の管轄であるから、大織冠神社の氏子総代でもある。

戦前は、大織冠神社の祭事には、京都の藤原九条家から使者が来て、村に 2,000 匹を下賜したという。この 2,000 匹は反物であったといわれるが、匹という用語は、金銭に使われている例がある。反物 2,000 匹に匹敵する 2,000 貫を持参したのではないか。

明治十四年に、従二位の藤原九条道孝が安威山に来て、大織冠神社と刻んだ石碑を建てている。九条道孝とは何者なのかと調べて見て、驚いた。九条節子の父である。節子は大正皇后であるから、昭和天皇の母である。藤原鎌足と昭和天皇との結びつきを、安威山で知った私は感慨をおぼえた。

妻の実家、植村家の奥座敷に、ゆり根を皇室に献上したときの感謝状が飾ってある。植村家は高取植村藩の末裔で、明治十三年の安威村村誌に出て来る士族２戸のうちの一軒であるから、皇室に依頼されて、何かを献上したとしても驚くことはない。私があれっと思ったのは、ゆり根を献上したのは、皇太后であることである。日付は、昭和十二年とあるから、皇太后とは大正皇后、すなわち九条節子である。

藤原九条家の出である皇太后に、安威の百姓家からゆり根を献上していることと、大織冠神社とは何のつながりもない。しかし、たった一枚の感謝状とはいえ、安威の里と藤原鎌足とは、深いつながりのあることを、物語っていないだろうか。

（３）鎌足蟄居

藤原鎌足が日本書紀に登場して来るのは、皇極天皇三年正月の条からである。藤原姓を名乗るのは、後のことであるから、ここでは中臣鎌子の名で出ているのだが、神祇伯という官職を辞退して、いきなり三島に蟄居している。

神祇伯という官職は、時代が下がって出て来るが、これは高

官ではない。鎌足の時代において、どういう官職であったかは、歴史家でも意見が岐れるところだが、明治十三年の安威村村誌には、神祇塚の存在を記している。安威の人が天神山と呼んでいるその頂上にあった塚で、曲玉、金環、太刀などが出土している。その偉奇品から見て、歴史家や考古学者は、将軍または貴族の古墳と見ているが、私は藤原鎌足の一族の墓だと思う。その人物を比定するとなると、定恵が有力になる。

それはさておき、何のために鎌足が三島に蟄居したのか、その場所としてなぜ三島を選んだのか、三島のどこに蟄居したのかに、関心が集まる。鎌足が何のために田舎に蟄居したのか、それは蘇我入鹿打倒のクデター構想を練るためで、これは歴史家と小説家とで、一致している見解である。なぜ三島を選んだかは、ここに中臣氏の別業があったとされているから、政治の本拠地飛鳥から遠からず、近からずで絶好の場所である。別業とは後世の荘園で、三島は中臣氏の所領であった。

残るテーマは、鎌足は大化のクデターの構想をどこで練ったのかであるが、歴史家はとにかく、小説家にとっては重要な問題である。なぜなら、その場に立ち、鎌足の心境を追体験しなければ、小説は出来上がらない。調べて見ると諸説紛々、主たる説を挙げるとつぎの四説である。

① 安威と耳原と十日市を含む周辺
② 桑原の地福寺
③ 安威川下流左岸の高槻三個牧の三島鴨神社周辺
④ 高槻の塚原神社周辺

私は、四つの候補地というか比定地に、足を運んでいる。安威、

塚原、桑原は隣接しているが、三個牧の三島鴨神社だけは、安威川下流にあり、川からも離れているが、自然にまかせていた古代の河川は洪水が出るために変化しているから、四つの比定地は、安威川流域にあるということで共通している。

安威に移転する前には、私たち家族は、高槻の玉川橋団地に住んでいた。ここは卯の花と観月の名所で、芭蕉の句碑も残っている。確か高槻の市花は卯の花であったように記憶する。

玉川橋を渡ると、茨木市で大阪に出るにも、京都に行くにも茨木駅のほうが近く、買物や外食など団地の住民の生活圏は茨木にあった。子供四人は、すべて玉川橋団地で産まれたので、お宮参りは、三島鴨神社でお世話になっている。鎌足の蟄居の比定地として、雰囲気は感じられるが、淀川に近すぎ、大化のクデターを練るには開け過ぎている。

阿武山の麓に原子炉を建設するという話があったとき、土地所有者が塚原神社に集まり、売却の相談をしたことがあった。そのとき、神社の楠の大樹が突然、貴人の墓の方向に倒れ、鎌足さんの怒りに触れたのではないかと怖れたという伝承がある。原子炉建設は、茨木市民の猛烈な反対運動に遭って、実現しなくて済んだが、鎌足蟄居の比定地としての雰囲気は、塚原神社にも感じられる。

しかし、塚原神社説は、大原の第は高槻にあったという、作家で郷土史研究家の宇津木秀甫（高槻市西面出身）説に引きずられているように思える。第とは、別業にある別荘というほどの意味だが、大原の第は、滋賀県か京都府あたりとするのが、歴史家の一致する見解である。鎌足の蟄居先を塚原神社にあてるのはとにかく、大原の第、高槻説には関心がある。

四つの比定地のうち、桑原地福寺説にだけ伝承がある。鎌足

は桑原に来て、入鹿打倒の構想を練っているとき、阿武山の中腹にある大石が、朝日で赤く輝くのを見て、構想がかたまったと、桑原村村誌に出ている。それを知った私は、村誌を片手に、家から歩いて持福寺に行った。

阿武山は全山緑で、阿武山の大石、村誌でいう光明石など見えなかった。私は、鎌足塾居は、安威だと信じていたので、安威でいいであろうと考えた。文献には遺っていないが言い伝えはある。大念寺の住職だった河合孝熙によると「大念寺は、鎌足の庭園があったところだったという。屋敷は南にあった。南といってもどのくらい南かは解らんが」という話を私は聴いている。

大念寺の住職だったと過去形を使ったが、住職は私が安威に移って、二年か三年くらいして卒せられた。私と住職との縁は、鎌足を通してだけの関係ではなく、住職が大阪府立北野高校定時制課定の教諭だったとき、私はその夜間の学生だった。私は住職の享年を超えてしまったが、いまから四十年も前のことである。

安威に移って来たことの挨拶をかねて、大念寺の河合孝熙教諭を訪ねたのであるが、それも二十年前のことで、双葉寿司からの出前の寿司をごちそうになり、大念寺と鎌足の関連、とくに定恵和上との因縁について聴いた。定恵和上とは、日本書紀にも名が出て来るが、鎌足の長男で、実は孝徳天皇の皇子である。その話のなかで、大念寺は鎌足の庭園で、南に鎌足の屋敷があったことを、教諭に聴いた。どれほど南かは解らないが、庭園と屋敷が遠く離れているとは考えにくい。おそらく安威の村のなかにあったに違いない。住職の言い伝えのほかに、私は安威比定地説に、もう一つの根拠を持っていた。それは、地福寺伝承にある光明石が、安威の村から見える位置に存在することを知っていたからである。

阿武山の中腹に、ばかでかい朱の鳥居が建てられている。そこは安威神社の所領で、安威の村人が建てたものだが、いつ、何のために建てたのかは、いまは古老になっている村人でも解らない。昔から鳥居はあり、それを安威の村からそれと見えるほど大きくなったのは、戦後のことであるらしい。

その鳥居を潜り、しばらく登ると稲月神社の祠がある。この周辺は、ヤマモモの樹があり、木イチゴの群落があり、秋にはアケビ、山柿が熟し、鳥たちの楽園である。稲月神社は、安威神社の奥の院的存在であるが、ブルトーザーですくえるほどの小さな祠に、大鳥居は不似合いである。おそらく阿武山の貴人の墓を意識して建てた鳥居であろう。

桑原から阿武山に登る自然歩道が整備されているが、大鳥居の少し手前に、山道のかたわらに大石が露出している。一般のハイカーは、見過しがちだが、私は若き日に、ロック・クライミング（岩登り）に熱中したことがあるから、藪の中に入り調べたことがある。樹木が茂り、地形というか、地層は変化しているが、鎌足の生きた時代には、ここに岩壁があったことを確認したのであった。私は、大鳥居下の岩壁を、鎌足が見た光明石と比定して、鎌足が蟄居したのは安威の地であるという自説に確信を持った。

茨木駅まで出れば幾らでもあるが、昼間に酒を飲める店は、安威では数えるほどもない。その一つに安威団地の商店街に双葉寿司があって、安威に移転した当初から、妻の眼を盗んでよく通った。その店でよく会うのが、十日市の入江一博さん、私は彼に鎌足の光明石のことを話した。

「あるでえ。阿武山の赤石というてな、でっかい岩やがな」

「その岩から桑原は見えますか。桑原との位置関係が知りたい」

「明日、枝打ちに入るから、よかったら午後にでも上がってこないか」

入江一博さんは、安威森林組合の幹部である。阿武山の西斜面、すなわち茨木領は、旧安威が天領であったときからの持ち山で、安威村が茨木市に合併してからも、地元に所有権を残し、株権を発行して管理している。移転してきた私の家には株権はないが、妻の実家の植村には株権があって、代理として私も山仕事の手伝いに行ったことがある。

翌日の午後、入江一博さんに聞いた通りに、林道の上の道を登っていくと、山仕事を終えたばかりの男衆が、二隊に分かれて、隊列を組んで下山して来た。その最後尾に入江一博さんの姿があった。

「こっちや」

入江一博さんの案内で、林道を少し登ったところに、鎌足石はあった。

崩壊が激しく、すぐに岩だとは気づかなく、入江一博さんの説明で、これは光明石だとわかった。崩れ落ちて地肌が見えたところに雑木が茂り、それに植林の桧が成長して、鎌足石の下部を包んでいるようになっているから、下の桑原からは岩とは見えない。中学生の頃、植物採集に熱中して、少しは地勢学を習っている。赤っぽい岩肌の輪郭をたどっていくと、かなりの大岩で、千二百年前には偉容であったことが推定できた。

入江一博さんは、私を残して男衆と下山して行ったので、私は一人、関電の見廻りルートであろう山道を登って、岩の上に立った。岩の上には、関電の鉄塔が建ち、まるで展望台のように展けている。鉄塔が立つのであるから、地下は地質学的に見て岩盤がある。

私は、桑原の地福寺に行ったとき、四辺を山に囲まれたこの地は、身を匿すのにふさわしいと感じた。私は鎌足石の上から、銅板葺きの地福寺の六角形の赤屋根を見て、ここは紛れもなく光明石だと思った。私は、幾度となく、阿武山を歩き廻ったが、ついに鎌足石を見つけたのだと思うと、感慨がこみあげて来た。

阿武山の赤石が輝いたとき、鎌足は桑原で何を発想したのであろうか。入鹿を殺すとともに、蘇我氏の権威も叩き潰さなければならない。それには皇極天皇の御前で、入鹿を殺害するしかない。いささか小説的な発想であるが、鎌足が桑原で描いたシナリオ通りに歴史は動いている。

（4）孝徳天皇と鎌足

桑原で入鹿打倒のシナリオを描いた鎌足は、やはり塾居していた後の孝徳天皇である軽皇子に、ひそかに会って計画を相談している。軽皇子の館で一泊した鎌足は、皇子が愛していた阿倍という夫人に、寝床の世話をこまごまとしてもらったと、日本書紀に出て来る。鎌足は大いに感激して、軽皇子を天皇にすると約束をする。大化のクデターの後、皇子は孝徳天皇になるのであるから、鎌足の実力は、たいしたものであったといえる。

それはさておき、日本書紀では語っていないが、大念寺伝承やそのほかの伝承によると、鎌足はこのとき、その夫人を妻として貰い受けている。しかし、夫人はすでにお腹に子を宿していた。その児が女子であればこちらに引き取ってこちらで育てる。男子であれば、そちらの子としてそちらで育てるようにという軽皇子の談話が大念寺伝承に載っている。生まれたのは男子、すなわち後の大念寺の開山、定恵和上である。日本書紀では、定恵は鎌足の長男となっているが、孝徳天皇の皇子であったの

である。

定恵の母親となる阿倍夫人だが、日本書紀の注では、阿倍内麻呂の娘の小足媛だとしている。そうだとすると、阿倍夫人は、有間皇子を生んでいるから、有間皇子と定恵はどちらも孝徳天皇の皇子、それも同母の兄弟になる。ちなみに、阿倍内麻呂は、孝徳天皇に即位したときの左大臣である。右大臣は、入鹿を大極殿におびき寄せる役を演じた蘇我倉山田石川麻呂で、大化のクデターの実行犯の一人である。

後に大化改新とよばれる新政権は、孝徳天皇と皇太子の中大兄皇子（後の天智天皇）を頂点として、スムーズに経営されていたかに見える。だが、孝徳五年に、左右大臣がたて続けに横死するという事件が起こり、孝徳と天智は不和となり、中大兄皇子は、天皇一人を難波に置きざりにして、鎌足ら百官を連れて、古都飛鳥に引揚げている。

このとき、間人皇后も天智とともに引揚げている。間人皇后は、中大兄皇子の異母妹で、不倫関係が疑われている女性である。この引揚げ作戦は、鎌足が指揮したもので、実権を握った天智は、鎌足に大臣の冠、大紫冠と八千戸の増封をした。年を置かずして、孝徳は崩御している。

（5）定恵の悲劇

孝徳天皇が死ぬと、もっとも身の危ない人物は有間皇子である。孝徳天皇の死の四年後、この皇子は天智によって殺されている。そうなると、鎌足の息子にはなっているが、有間皇子の弟にあたる定恵の身が危ない。鎌足は定恵のために、安威に大念寺を建て、恵隠和上に預けて出家さす。定恵九歳のときである。それでも不安な鎌足は、定恵十一歳のとき、遣唐船の学生僧と

して唐に送り出している。このことは、日本書紀の孝徳四年夏五月の条に見えるが、弟の不比等はまだ生まれていない。一人息子として育てた定恵を、唐に送り出さざるを得ない鎌足の心境はいかに、という場面である。

定恵の帰国は、天智四年九月で、劉徳高の唐船に乗ってである。これは日本書紀の注にも見える。定恵がなぜ唐船に乗って帰って来たのであろうか。五年前、百済は滅亡するが、それを救済すべく、日本は朝鮮半島に海軍を遣り、唐・新羅の連合軍に大敗している。劉徳高は、朝鮮戦争の司令官で、日本と講和条約を結ぶためにやって来たのであるが、戦勝国の唐船に乗って帰国した定恵は、当時、センセーショナルをまきおこしたことになるだろう。

天智は、渋い顔をしたであろうし、鎌足は、困ったことになったと思ったに違いない。唐に滞在していれば、定恵は安全だが、日本に帰ってきたとあっては、天智の猜疑心の前に立たなければならない。孝徳の長子、有間皇子を抹殺した天智が、その次子定恵を、生かしておくとは考えられないからである。

定恵は帰国後すぐに変死している。その死を、日本書紀は伝えていないが、藤原氏家伝に記載されている。家伝によると、鎌足の所領、大原の第で死んでいるが、帰途、百済滞在中に、百済の才人に毒を盛られたことが死因となっている。毒を盛られて半年後に死ぬというのは、いささか不自然であるが、定恵このとき、二十三歳であった。弟の藤原不比等は、わずか六歳で、山科の田辺大隈の家で養われている。

定恵は死んではいなかった。大念寺伝承と多武峰談山縁起の記事はほとんど同じであるが、定恵の帰国は、壬申の乱が終わった天武二年としている。大原の第で定恵が死んでから八年後の

ことである。

帰国した定恵は、父の死を知り墓所はどこかと、弟の不比等宰相に問う。不比等は言う。摂州安威山なりと。定恵言う。私は在唐中に、父の夢を見た。和州談峰に社して、寺塔を建築して修せよと。夢を見たのは、己己十月十六日になりと。

不比等は驚いた。鎌足公の他界は、まさに同年同月同日であったからだ。定恵と不比等は大念寺で法要を営み、鎌足の遺骨を談山に改葬すべく、村人と安威山の墳廟に登った。ここで事件が起る。安威の村人が談山への改葬を拒んだからである。そこで定恵と不比等は、仕方なく、胴体を安威山に残し、鎌足公の頭部だけ多武峰に持ち帰り改葬したのが、現在の談山神社である。

以上は、小説家の発想ではなく、明治十三年の安威村村誌の大織冠鎌足公の古墳の項に出て来る。大織冠神社が鎌足公の古廟といわれるゆえんであり、別名胴塚と呼ばれるゆえんである。

しかし、この伝承には謎が多い。貴人の墓が鎌足の墓だとすると、ここに眠る貴人の頭と胴体がそろっている。だいたい、子供たちが、父の墓をあばき、その頭だけ改葬することがあり得るであろうか。

私は、大織冠神社を鎌足公の古廟と信じる一人である。だが、歴史家は、安威山の古墳は、鎌足公の死以前に構築されたもので、考古学的に見て、鎌足の墓とは考えられないという。

私は、一歩譲って、安威山古墳を鎌足の父、中臣御食子の墓と比定し、殯（モガリ）の概念を持ち出し、安威山に鎌足公を殯（モガリ）したと、自説を修正することにした。すると、歴史家は、父の墓所に、子供の遺体を殯（モガリ）することなどありえないと反論する。

歴史家や考古学者は、頭が固く、自由な発想をする人が少ない。

殯（モガリ）とは、貴人の死体を正規の墓所に埋葬する前に、棺に納めてしばらく安置しておくことである。私は、鎌足は天智に暗殺されたと見ている。その原因の一つに、定恵が孝徳の皇子であったことが関係する。暗殺されなかったとしても、暗殺に近い不慮の死で、その死を匿さなければならなかった事情が、あったものと思われる。

それであれば、父の墓所の安威山に、鎌足の死体を安置するのは絶好である。ほとぼりがさめた後、すなわち、藤原不比等が朝廷の高官になってから、阿武山に鎌足を本葬したとしても、何の違和感はない。古代朝鮮語で、アブは父親、アイはその子であるという。

安威山から談山への鎌足改葬の伝承は、何を意図してつくられたかは不明であるが、あまりにも謎が多い。しかし、その謎は、歴史の真実を解くキーワードでもある。定恵の悲劇は、すなわち鎌足の悲劇であったのではないか。

（６）天智と天武の不和

壬申の乱は、古代日本史の最大の内戦であったが、その火種は、鎌足存命中に存在したのである。天智天皇の皇子は、大海人皇子（後の天武）であった。天智の弟であったため皇太弟などと呼ばれているが、天智が崩御すれば、天武が即位することが約束されていた地位、すなわち皇太子である。その約束を天智が破ったため壬申の乱が起ったのであるが、鎌足が健在ならば、絶対に起り得なかった内戦である。

歴史を少し戻すと、白村江での日本の敗戦後、唐の将軍劉仁願が来日している。劉仁願は、何のために日本に来たかと言うと、日本の戦争責任を問うためと、講和条約を結ぶことである。

昭和二十年に日本に来たアメリカ指令軍のマッカーサ長官に似ている。

その外交はどのように展開したか、日本書紀を見るかぎり、はっきりしない。戦争の最高責任者の天智は、外交の席上には出られないはずで、講和は大海人皇子と鎌足で行ったと思われる。唐側がどのような要求をしたのかはわからないが、領土の割譲もなく、百済難民を日本が受け入れただけで、講和は、なっている。

この外交によって、天武は実力を示した。次期天皇の地位を固めたのである。天智は面白くない。日増しに成長してくる大友皇子に天皇を譲りたくなる。弟よりわが子というのは、人情である。天智の言いなりになってきた鎌足は、ここは譲れなかった。天智から天武へ、これは鎌足の国政を安定させる信念だったのである。それを示す文献があるので、つぎに紹介する。

（7）天智・天武確執の段

五月五日に、天皇、蒲生野に縦猟し給う。大皇弟、諸王、内臣中臣鎌足及び群臣、皆悉く従なり。時に額田王、大海人皇子を看て、一首贈る。

あかねさす紫野行き標野行き
野守は見ずや君が袖振る

大海人皇子、人眼を忍び、応えて返歌する。

紫草のにほへる妹を憎くあらば
人嬬ゆえに吾恋ひめやも

縦猟の後、天皇、皆を浜台の下に召し、置酒す。越国の燃土

と燃水とを以って、夜を照す。諸の魚、水を覆ひて至る。

天皇日す。天皇に在らざるは無しと。大海人皇子、舎人の長槍を奪い、梢を払う。穂先、天皇に向く。額田王、大海人皇子の恋人たり。天皇、額田王に佞媚（ネイビ）し、寵妃とす。大海人皇子、此を怒む。

大海人皇子の槍、天皇の眼前、敷板を貫く。天皇、立って長剣を払う。天皇曰く。

「執害せん」と。

時に、中臣鎌足、転び出て、両腕を展げ、大海人皇子を庇ふ。中臣鎌足曰う。

「大計、誤ってはなりませぬ」と。

天皇が双眸、青炎の狂気に燃ゆ。中臣鎌足此を看る。蘇我入鹿、誅殺し時の眼色と窺う。中臣鎌足曰う。

「長剣の処置、難在れば、内臣を斬れ」と。

天皇、酔狂止む。長剣捨てて、奥に退く。

（８）鎌足の死

前章の文献は、私の未発表の小説の一節で、私の創作である。まったくの創作であるかというと、そうではない。日本書紀、万葉集、藤原氏家伝の記述を参考に、小説として演出すると、こうなる。天智と天武の緊迫した場面があって、鎌足が体を張って止めたという事実は、小説家でなくても、歴史家でも想像可能であろう。

この事件が遇った五ヵ月後、鎌足は没する。日本書紀では病没になっているが、その記述はいかにもあわただしく、不自然である。鎌足の死は、十月十六日だが、六日前、すなわち十月十日に、天智天皇が鎌足の家に行幸して、見舞って会話している。

鎌足の家は、どこにあったかわからないが、私第で薨じたと日本書紀にあるから、山科にあったという大原の第であろう。十月十五日、天皇の名代として、大海人皇子（後の天武）が鎌足を見舞い、藤原姓と太政大臣の地位と大織冠を授けている。鎌足の死の前日に、その後の歴史に影響する鎌足の存在観を定着させようとする記述はいかにもあわただしい。

鎌足の死後三日、十月十九日に、天智天皇は、再び鎌足の家に行幸している。そのとき、蘇我赤兄に鎌足への恩詔を述べさせて、金の香鑪を下賜させている。時代は下がると、天皇や将軍など為政者が、重臣などに香鑪を賜る場面はよく出て来るが、これは政治に口を出さず、隠居せよという暗黙の指示である。自害して、仏道の法輪に従えという暗示さえある。

死後の鎌足に、香鑪を送る天智の行為は、非常に不自然であるが、鎌足は大原の第で死に、山科の南に殯（モガリ）するという日本書紀の記事はもっと不自然である。鎌足の墓と称されるものは、山科のどこにもない。

鎌足は天智天皇と離反して、安威に隠棲しているところを、天智の指示を受けた蘇我赤兄の軍団に襲撃され、暗殺されたのである。天智は、鎌足の存在を、二つのことで惧れていた。一つは、天武に政権を渡さずに、息子に譲ることを鎌足が反対したこと、もう一つは定恵が生きていて、鎌足が孝徳の皇子として、天皇として擁立することを怖れたのである。

鎌足は安威の地で死んでいる。山科で死んだ鎌足の遺体を、わざわざ安威に運んで、殯（モガリ）（安置）する必要がどこにあろうか。蘇我赤兄は、鎌足に香鑪を渡しに来たのではなく、弓矢でもって鎌足を射殺するための、天智が送りこんだ刺客だったのである。

安威川ダム建設の関係で、安威と桑原の間の初田というとこ

ろが発掘され、考古学調査がおこなわれた。墳墓の群落が出土して、中臣氏の集墓と比定され、なかに天皇級と見られる墳墓があり、それに似つかわしい玉石も出土した。

天皇級の墓は、中臣氏では定恵しかいない。私は、この墓を定恵の墓と比定した。ところが、歴史家の梅鉢明秀などは、群墓であることが気に入らないと、私の見解に反論する。しかし、二十基近くある墓が、死者同時であったとすれば、群墓の存在は中臣氏の歴代の墓という現代の墓所概念をくずすことができる。

天智と天武の離反があって、鎌足は安威に二度目の蟄居した。そこに、蘇我赤兄軍団が襲い、鎌足安威軍が応戦し、そのときの戦死者が、初田の中臣氏群落墓だとすると、歴史の謎の一つを埋めることができる。安威川のダム建設は、古代のブラックボックスの一つを開いたことになる。蘇我赤兄は、天智の命を受けて香鑢を贈ったのではなく、弓矢でもって鎌足に死を賜ったのだ。

（9）古代史のミステリーゾン茨木

鎌足は、天智天皇に殺されたというのが、私の鎌足公暗殺説である。その事由は二つ、一つは定恵が孝徳の皇子であったことに拠る。天智の死後、鎌足が定恵公を擁立して、孝徳のご落胤だとして挙兵すれば、天下は藤原氏のものになる。鎌足にそのような考えがなかったであろうが、定恵が死んでいなかったなら、天智がそういう猜疑を持ったとして不思議ではない。

もう一つの事由は、大友天皇である。大友皇子を天皇として算えるかどうかは、歴史家の歴史観によって論議のあるところだが、鎌足が生きていれば、壬申の乱はなかった。政権は天智から天武に、スムーズに移譲されていた。しかし、天智は、わ

が子を天皇にしたいがために、反対する鎌足を蘇我赤兄に殺させたのだ。

私の鎌足公暗殺説は、仮説の域を出ない。しかし、大織冠神社にまつわる伝承の謎を解いていくと、鎌足は殺されて安威山に埋められたとしか考えようがないのである。日本書紀では、鎌足は山科の第で死んだことになっているが、どうして遠い安威まで死体を運んだのか、その説明をできる歴史家はいない。

私は、ふるさと茨木連帯の伝承塾の講師として呼ばれ、茨木市立生涯学習センターで、大織冠神社を演題にして、講演したことがある。

発表が終わって、質疑のとき、三十代ほどの若い婦人が手を挙げて、こういうことを言った。「講師のお話を興味深くお聴きしました。しかし、歴史をねじまげるのはどうかと思いますが」

「私は小説家ですので、歴史をねじまげることはあるかと思います。しかし、ねじまげることを意図してはいません。歴史をななめから見て、虚構をつくり、虚構のなかに真実を見ようとしています。歴史に if はありません。小説には、if はふんだんに出て来ます。それを認めないといわれるならば、小説は、とくに歴史小説はなりたちません。

さて、ご質問ですが、テーマの鎌足は if の世界のことではありません。もちろん、小説としてこのテーマは書いていますが、私の歴史認識です。歴史を教える学校の教科書が、唯一正しい歴史認識だと、あなたがとらえるのなら、そういう思想は危険だと思いますが」

私はそう答えた。前きの大戦は、日本の侵略戦争か、欧米から東南アジアを解放するための戦争かで、歴史認識が揺れていることが頭にあったからである。

継体天皇陵が、なぜ茨木藍野にあるのか、明確な解答を出した歴史家はいない。そのようなことでは越前から天皇がやって来たという、歴史上の大事件の謎は解決はしない。神武の皇后がどうして溝咋から出たのか、銅鐸工房がなぜ東奈良にあるのか、神功皇后と疣水神社の関連など、茨木市域は、歴史の謎に満ちあふれている。政治を政治家にまかすように、茨木の歴史を大学の偉い歴史家にまかせていたのでは、いつまでたっても、歴史の街茨木の謎は解けないと思う。

みどり豊かな自然を愛するように、市域に点在する史跡を愛し、その歴史を知り、茨木を愛する市民になりたいと思う。私は高槻から茨木に移って二十数年になるが、鎌足の安威に住むことを誇りと感じている。　（了）

鎌足伝承地・安威の里歩き

（１）大織冠神社

ＪＲ茨木駅から追手門大学・安威団地行きのバスに乗り、終点下車。休日は運行が少なくなるため、事前確認が必要。万博側の３番乗場。

バスが追手門大学に着く前に、バスの正面に見えるのが安威山で、山全体が大織冠神社で頂上の古墳が、鎌足の墓といわれている。したがって、神社は鎌足

大織冠神社

公古廟とも呼ぶ。

道順は、追手門大学から西へ徒歩２分。広い道は大学の敷地で、横にある細い道をまっすぐ西に歩くと、自然に神社前に着く。石段を 50 段、頂上の古墳がそれである。

南に御幣久良山は指呼の間、梅鉢明英説によると、耶馬台国の卑弥呼の墓であるという。

樹々の間から、らくだの背に似た阿武山が東に望める。左手の頂上が阿武山の頂点、右手の頂上に建つ、京大地震観測所の裏にあるのが貴人の墓。

伝承によると、鎌足は 56 歳で死に、この地に埋葬されたという。９年後、鎌足の長男、定恵が弟の不比等と来て遺体を掘り起こし、頭部だけ奈良の多武峰談山神社に持ち帰った。鎌足の墓としては談山神社のほうが有名である。

この安威山には、将軍山住宅が開発したとき見つかった将軍塚が、ここに移設されている。案内板あり。

大織冠神社から旧福井村山西を通って、真龍寺に寄る道もあるが、地元の人もめったに通らない山道であるため、安威の里ガイドから割愛する。

岩作大明神のムク（樹齢 442 年）

（２）岩作大明神

追手門大学に戻って、正門からまっすぐの村中に入る道を行く。右側は桜の古樹、左側は竹薮、辻工設の前、右手に樹齢 442 年（市樹に指定）の椋の大樹が見える。

ここには、岩作大明神の祠あり。でんぼの神様で知られ、遠く奈良、

和歌山の参拝者がある。いわれは解らないが、地元西垣内の人たちが、毎年 11 月 23 日にだるま講という祭事を行っている。

（3）大織冠神社の石標

辻工設の前をまっすぐ行って、突き当たりを左に、また突き当たりを右へ、そのまま道なりに東へ進むと安威の村中である。つぎの目的地、大念寺は通る人の誰に訊ねても知っているので迷うことはない。安威小学校の南面を過ぎ、道なりに進み、突きあたりを左に通ると、安威村のメイン通りである。メイン通りに入ってすぐに、右手に下り坂があり、下りると亀岡線のバス停安威南口がある。

右、大職冠の石標

この坂を地元では小野又の坂と呼ぶが、坂の途中に昭和初期まで、小野又という料亭があった。なぜ、田舎に料亭があったかというと、安威川の水利権を安威村が握っていたからであろう。一ノ井堰、五社井堰などで安威川の水を止め、下流の村々の田地に水を分配していた。安威村の水利権を分配してもらうため、下流の有力者たちは小野又に来て、たびたび酒宴を開いたであろう。

この小野又の坂との分岐点に、「右、大織冠」「左いせ」の石の道標あり。見落とすことのないように注意。

（4）富士正晴の旧宅跡

安威村のメイン通りを、まっすぐ北に進むと、右手に安威城

跡の石標と案内板あり。そこを過ぎると塚酒店あり。塚酒店の横の道を右手に少し入ると、両側に竹薮。左手の竹薮の奥に、富士正晴の終いの棲家があった。

旧宅はとりこわされ、弟子たちが通った道も藪が茂り、おもかげは何もない。ただ、うっそうたる藪の中である。

富士正晴旧邸跡

（5）大念寺

安威村のメイン通りを進むと、大念寺に行き着く。追手門大学より徒歩 20 分。いまは浄土宗知恩院に属しているが、鎌足が恵隠和上のために建立した寺で、開山は鎌足の子供、定恵である。定恵は、実は孝徳天皇の皇子で、唐から帰国後変死している。悲劇の皇子、定恵を祀る寺であるともいえる。

境内には、鎌足が南方から持って来て植えたという、黄金竹がある。南方からといい伝えがあるだけで、どれほど南方かはわからない。定恵が鎌足の首を多武峰に持ち帰ってから、笹の末が枯れるようになり、片折笹ともいう。見学にはお寺に声を掛けるのが礼儀

大念寺

であろう。団体の場合には事前に連絡を。

なお、黄金竹には触れてはいけない。岩作大明神の椋の樹と同様に、枝を折るとたたりがあると、地元では、古くから言い伝えられている。

安威神社

（６）安威（阿為）神社

安威神社は、大念寺の西に隣接する。鎌足さんの神社として、関西中に知れわたっているが、その伝承は何もなく、銅鏡一枚が保存されている。ただ、境内はおびただしい末社が合祀されているため、氏子は安威だけではなく、太田、十日市、福井、桑原、大門寺、生保、安元、車作に及ぶ。

祭礼は、毎年５月４日で、近郷にも知れるほど盛大である。安威、十日市、耳原では、どの家も親類縁者を客として迎え、静かな村は、はなやかな一日を送る。毎年秋には蹴鞠の会を催されるが、鎌足と天智天皇の出会いの故事にちなんでである 。

（７）神祇塚

安威神社の裏から神祇塚に抜ける山道があるが、大念寺門前に戻ったほうが無難。安威村のメインストリートを少し戻ると、桑原に抜ける広い道が左手にある。そこを少し進むと、右手に竹薮、左手に住宅があり、住宅と住宅の間に車が通れるほどの広い急坂があり、そこが天神山で、頂上が神祇塚である。

文献伝承によると、将軍あるいは貴族の墓とされているが、

神祇塚という名称から見て、鎌足一族で、歴史に名を残す人物の墓と思われる。中臣金達、定恵和上、中臣塩屋枚夫などが浮上するが、大念寺との地理的関係から見て、定恵か、定恵の遣唐船に随行した金達の説が有力である。

しかし、神祇塚の根跡は、藪の中で何もない。安威川から安威西ん代、川西、耳原の水路を確保するポンプ場になっていて、タンクなどその施設があるばかりである。史跡の案内板はあるが、鎌足とのゆかりの記述はなく、茨木市教育委員会の郷土愛の良識を疑いたくなる。

（8）阿武山頂上と鎌足石

桑原の地福寺は、鎌足塾居の最有力候補地であるが、安威川ダム建設工事で、桑原地区全域がずたずたになっている。地福寺も、かつて鎌足が入鹿打倒を構想した場所より移転して、まったく風情を感じさせない。

地福寺探訪を敬遠して、阿武山に登ったほうが、いくらか情緒がある。神祇塚からもとの道に戻り、そのまま進むと、亀岡線に出る。長ガ橋を渡り、安威川は左岸に移る。

長ガ橋から、旧長ガ橋とそして水青き長ガ淵、一ノ井堰などが見えるが、古きよき時代の景観はない。阿武山への登山口も、安威川ダム工事によって、破壊されて昔のおもかげはないが、かろうじて、新設されている道路工事の現場内に、確保されているので見落とすことはない。安威神社より徒歩 20 分。

阿武山登山道は、武士自然歩道に組み入れられているので、迷うことはない。登山口から朱の大鳥居まで徒歩 10 分。ここから景観は絶好で、大阪市内の高層ビルが見え、晴れた日には淡路島が見える。

朱の大鳥居から徒歩５分。安威神社の奥の院である稲月神社。そこを過ぎてさらに５分。左は阿武山山頂、右は貴人の墓。貴人の墓は、帰路に尋ねることにして、右足は高槻領に、左足は茨木領に、尾根筋を歩くこと 15 分、280.9 メートルの阿武山に着く。

阿武山大鳥居

阿武山は、別名旗振り山と呼ばれている。北浜の米相場を京都にいち早く伝えるため、北浜からどこかを中継して、勝尾寺山に信号を送り、その信号を阿武山が受けて山崎に送り、山崎からどこを中継したかは解らないが、京都の相場師に伝えられたという。電信がなかった、古きよき時代のことだが、阿武山の山頂にたつと、西に勝尾寺山、東に山崎の天王山は、よく見える位置にある。

阿武山山頂のすぐ北に、関電の鉄塔がある。その鉄塔を安威側に下がった第２鉄塔の下に、桑原から鎌足が見た光明石が存在する。そこを見に下る山道はあるが、ガイドが必要であろう。

（9）貴人の墓

阿武山山頂から、登山して来た道を戻って、貴人の墓まで徒歩 10 分。きれいに整備されていて、案内板も立っている。

貴人の墓は、歴史家、考古学者の見解によると、100％鎌足の墓だとしている。周辺に奈良公園を思わせる馬酔木（アセビ）の群落がある。

帰路は高槻側にいくつもあるが、住宅などあって、ガイドが

必要。茨木側に下山するのが、無難。朱の鳥居を経て、もとの登山口に戻る。バス停桑原橋まで徒歩 15 分。桑原橋から阪急茨木市駅までバス 20 分。

阿武山古墳

5、本能寺の変でカギを握った中川清秀

福丸孝之

中川清秀は、天文 11（1542）年に旧福井村中河原で生まれ、池田勝正、荒木村重、織田信長、羽柴秀吉と４人の主君に従い、元亀２（1571）年 29 歳の時、白井河原の合戦における武勇により荒木村重より茨木城をあずかり、４万４百石の城主となりました。

白井河原の合戦は、荒木村重率いる池田勢 2,500 余騎と将軍足利義昭に属する和田惟政の茨木・高槻勢 500 余騎が、白井河原（現在の茨木市中河原附近）で戦った茨木市内で唯一最大の合戦です。

清秀が城主のころは、茨木地方平野部が茨木城勢力下にあり、山間部（清坂・銭原・下音羽・上音羽・忍頂寺・車作・安元・生保・大門寺・大岩・泉原・高山・千提寺の地域）は高槻城主高山氏の勢力下にあったようです。

1578 年に荒木村重が織田信長に謀反を起こしました（有岡城の戦い）。清秀は当初、荒木村重についていましたが、利休七哲の一人である古田左介（織部、義弟にあたる）や福富平左衛門らが熱心に信長への投降を説得したので、これに応じて信長に仕えることになりました。

信長の配下になったことにより秀吉との親密な交流が始まったのでしょうか。竹田市教育委員会発行の「中川氏御年譜（付録）」には天正８（1580）年には秀吉から清秀に義兄弟の契りを結んだ内誓紙が掲載されています。これが「本能寺の変」が起こるちょうど２年前にあたります。

天正 10（1582）年５月、毛利の先陣備中高松城（岡山県）を

中川清秀の墓（梅林寺）

攻略していた秀吉は、信長に再三援軍を求めました。これに応じた信長は、明智光秀・池田恒興・中川清秀・高山右近らの派遣を決め、自らは近江から京都に入り、本能寺へ泊まりました。同年６月２日明け方、明智光秀が本能寺を襲い信長を自害へと追い込みました。有名な「本能寺の変」です。

茨木の地で出陣の準備をしていた清秀は異変に気付き秀吉へ書状を送りました。秀吉は、以下の返事を清秀へ送っています。秀吉は、他の情報網で信長の死を知っていたのでしょう。

『これから書状を出そうと思っている時に貴報を受けて嬉しく思う。さて、ただいま京都より下った使者の確かな報告によると、信長様・信忠様はいずれも、なんのお障りもなく難を切り抜けられ、膳所ヶ崎（滋賀県大津市）へ退かれた。その間、福富平左衛門が三度も力戦をして比類なき働きをし、何事もなかったとのことである。まずはめでたいことである。我々は合戦の結末がつきしだい帰城するので、おいおい話を聞こう。貴殿も油断なく注意されるようお願いする。なお、ただいま野殿（岡山県御津郡）まで到着したところ、貴殿の書状を拝見した。今日できれば沼（岡山県上道郡）まで進もうと思っている。また古田左介にも同様したためておこう。』

この書状は、茨木市片桐町の梅林寺で保管されています。

福富平左衛門や古田左介（織部）といった清秀と縁の深い人物の名前を返事におりこむあたりは、さすが秀吉といったところです。

この返事を受けた中川清秀はどの様な思いだったのでしょうか。秀吉から清秀に送られた返事は、６月５日付けですので本能寺の変から３日経っています。本当に信長の死を知らなかったのか、知っていたのかは現在となっては分かりません。しかし、中川清秀が秀吉につくのか、明智光秀につくのかで歴史は大きく変わったはずです。いや、秀吉からすれば清秀というよりも京都の玄関口であるこの茨木の地を味方につけるかどうかが大切な問題だったのでしょう。

清秀と茨木の地を手中に治めた秀吉は、山崎の戦い（天王山の戦い）で光秀に勝利し、天下人への足がかりとしました。

［参考文献］

「茨木市史」 茨木市役所

「わがまち茨木（人物編）」 茨木市教育委員会

梅林寺（茨木市片桐町）

6、秀吉の朝鮮出兵と茨木

佐藤眞生

豊臣秀吉は、国内を統一した後、大陸の支配を目論み二度に亘って朝鮮へ出兵しています。最初が 1592 年の文禄の役、次が 1597 年の慶長の役です。

秀吉は 1591 年、肥前名護屋（現在の佐賀県唐津市）に朝鮮出兵の基地として名護屋城の築城を命じ、1592 年３月に完成をみています。その月、秀吉は京都を発ち名護屋城へ向かっています。「摂陽群談」（元禄 14 ＝ 1701 年刊）によると、このとき秀吉は茨木に立ち寄っています。秀吉の愛馬が死んで、白井河原の合戦で池田方の陣があった馬塚に葬ったことが書かれています（「茨木の史跡」・茨木市教育委員会編）。

秀吉が茨木に立ち寄ったのは何故でしょうか？

時代を遡ると、神功皇后が三韓征伐に出立するときにも、茨木へ来て、新屋坐天照御魂神社（ニイヤニイマスアマテルミタマジンジャ）で戦勝祈願をし、磯良（疣水）神社で顔を洗い疣顔に変身しています。秀吉も戦勝祈願に来たのでしょう。

新屋坐天照御魂神社は、茨木の上河原・中河原・西河原にそれぞれあり、３座とも平安時代（927 年）の延喜式神名帳に載っている式内社です。

なかでも西河原社は、朝廷から相嘗祭（アイナメノマツリ）に幣帛（ヘイハク）を奉られる、全国の 40 社 71 座に加えられる格式の高い神社です。相嘗祭は、五穀の収穫に感謝する 11 月 23 日の新嘗祭に先立って行われる新穀を諸社に供える神事です。そのときに朝廷から神への捧げもの

新屋坐天照御霊神社（西河原）

が与えられるわけです。

さらに、806（大同元）年に神封一戸という領地を与えられており、859（貞観元）年には従四位が授けられています。これは律令制の神階で、正六位から正一位まで 15 階あり、従四位は、正四位の下で、正五位の上とされています。

西河原社の祭神は、太陽と農耕の神・天照国照彦火明命、祝詞と出世の神・天児屋根命、それに建御名方命の三神です。この建御名方命が戦勝祈願に関係があります。元は水神といわれていますが、軍神なのです。その上、農耕と狩猟の神でもあり、風の神でもあります。神風を吹かせることができるのです。

上河原・中河原・西河原にある新屋神社は、それぞれ佐保川・勝尾寺川・安威川の川辺に位置しています。暴れ川の洪水をな

だめる水神を祀ったのでしょう。

そして、磯良（疣水）神社ですが、この神社の本宮は西河原社で、1669 年まではその境内にありました。磯良神社の祭神は磯良大神といって、九州安曇氏の祖神で、水先案内の神です。実際に神功皇后を三韓まで海上を導いたといわれています。

大陸への道は摂津三島が起点になっています。元々摂津は港でした。天武天皇の時代（685 年）には港を治める摂津職という役人がいました。かつての河内湾、今の大阪湾へは幣久良山を起点に南下する古代山陽道、いわゆる西国街道が通じていました。

神功皇后と秀吉が、摂津三島にある西河原の新屋坐天照御魂神社と磯良神社に戦勝祈願に来たわけはここにあります。

7、家康天下統制のカギを握った片桐且元

福丸孝之

片桐且元は、弘治２（1556）年に滋賀県で、豊臣秀吉から 20 年、中川清秀から 14 年、徳川家康から 14 年遅れてこの世に誕生しました。

初めは浅井氏に仕えていましたが、浅井氏が織田信長に滅ぼされてからはこの領地を与えられた木下藤吉郎（のちの豊臣秀吉）に仕えることになりました。秀吉はこの地から多くの若い人材を発掘したといわれ、その代表格が石田三成であり、片桐且元もこの時に秀吉から見出されたようです。

天正 10（1582）年本能時の変の時には、秀吉に仕えて毛利家を攻め備中高山城攻略に加わっていたといわれており、この時は中川清秀が茨木城主でしたが、後の茨木城主である片桐且元は秀吉と共に毛利家を攻めていたわけです。

明智光秀と戦った山崎の戦いにおいては、「絵本太閤記」に片桐且元の武勇伝が記載されています。片桐且元が勇猛な武将として名を上げたのが「賤ヶ岳の戦い」で、賤ヶ岳の七本槍として現在まで語り継がれています。中川清秀が命を落とした戦いです。

武勇だけでなく、道奉行として街道整備や九州征伐での軍船の調達、各地での検地や境界論争の調停など内政面でも存分に力を発揮しました。

茨木城主となったのは慶長６（1601）年だとされています。

豊臣秀吉死後、片桐且元は豊臣家と徳川家康の間で本当に苦労をしました。

狭山池改修奉行や方広寺大仏殿の造営奉行など豊臣家家老としての仕事を行う一方、大久保長安ら徳川家康の奉行と連署し

て知行目録を発行したり、旧太閤蔵入地の年貢算用状を発行したり、徳川家の奉行としても仕事をしています。

文武共に優れていた且元は、豊臣家と徳川家の間の微妙な関係を絶妙なバランス感覚で乗り切っていったのでしょう。これだけの能力があったからこそ豊臣・徳川の両家から認められ、任用されていたのだと考えられます。

しかしながら、徳川家康が仕掛けた大坂の陣へとつながる「方広寺鐘銘事件」では、そのバランスも保てなくなりました。

方広寺鐘銘事件（ホウコウジショウメイ）

徳川家康の勧めにより、かつて羽柴秀吉が建立し、地震で倒れたままになっていた東山方広寺の大仏殿を豊臣秀頼が再建することになります。そして、その修営も終わり、慶長 19（1614）年に、その梵鐘の銘が入れられたとき、家康はその文言に重大な言いがかりをつけます。

「国家安康」という句は、家康の名を切ったものであり、「君臣豊楽、子孫殷昌」は豊臣を君として子孫の殷昌を楽しむと解釈し、徳川を呪詛して豊臣の繁栄を願うものだと激怒します。

これを受けた豊臣氏は、家康のもとに片桐且元を弁明のために派遣しますが、且元は家康に会うこともできず、本多正純や（金地院）崇伝といった家康の側近から、ようやく「淀殿を人質として江戸へ送るか、秀頼が江戸に参勤するか、大坂城を出て他国に移るか、このうちのどれかを選ぶように」との内意を受けます。

しかし、豊臣氏いまひとりの使者・大蔵卿の局が言うには、「家康は機嫌よく会い、鐘銘のことには少しも触れないばかりか、秀頼は将軍・秀忠の娘婿でもあるのでいささかの害心もない」と明言したと報告します。

淀殿は家康に直接会った大蔵卿の局の報告を信じ、且元の持ち帰った３ヶ条は徳川氏と示し合わせて豊臣氏を陥れようとするものに違いない、と信じ込みます。

こうして淀殿の信頼を失った且元は大坂城を退去します。しかし、これこそが家康の仕掛けた策謀だったのです。

豊臣氏討伐を目論む家康が、方広寺その他の寺社再建をさせることで莫大な経費を消費させることから始め、且元が復命した報告こそが真の要求であるのに、それを無視して且元を放逐したことは幕府に対する反抗であると断定、大坂城攻撃を決定するに至るまで、すべて家康の描いた筋書き通りに事が運ばれます。

この時、大坂城を退去して籠ったといわれているのが茨木城です。片桐且元が茨木城へ籠るという選択をしなければ歴史は変わっていたでしょう。この事件を理由に徳川家康は豊臣家を攻め、大坂の陣で豊臣家を滅ぼします。

織田信長から豊臣秀吉に時代が移る時も茨木がカギを握り、豊臣家から徳川家康へ時代が変わるきっかけとなった事件にも茨木が関わっていたわけです。

歴史の転換に関わってきた茨木の土地には何か特殊な磁場があるのかもしれません。

［参考文献］

「片桐且元」 吉川弘文庫　日本歴史学会編集
「茨木市史」 茨木市役所
「わがまち茨木（人物編）」 茨木市教育委員会

第５章
農と食の革新地・茨木

赤松民男／三村夫美
茨木青年会議所／
片山重正／佐藤眞生

１、神武東征と茨木

佐藤眞生

神武東征は、「古事記」（712 年、41 代天武天皇の勅語にある天皇家の系譜と古い伝承を太安万呂が編纂した国史）と、「日本書紀」（720 年、第 43 代元正天皇の命により舎人親王が編纂した勅撰の正史）に書かれています。

記紀両書とも、神武東征は日本の中心地に都を造ることが目的であるとしています。

記紀には、記述が同じ部分と異なる部分がありますが、まず日本書紀にならって神武東征の径路を辿ってみましょう。

出発地の記述はありませんが、宮崎県（日向）といわれています。大分県宇佐（筑紫国）を経て福岡県岡水門（オカノミナト）に１年滞在し、広島県（安芸国）に至り１年滞在しています。その後岡山県（吉備）に入り、ここに３年留まります。

難波の崎に至り、孔舎衛の坂（クサエノサカ）で長髄彦に苦戦しています。さらに、東大阪市日下（河内国）から、泉南市男里・山城の水門、和歌山市和田（紀伊国）を経て、和歌山市吉原・熊野名草邑で名草戸畔（ナクサトベ）と戦いこれを討っています。

ここから海路をとりますが、楯ケ崎・熊野市甫母町（ホボチョウ）で難破しています。そこで、今度は熊野山を越え、奈良県宇陀に至ります。ここで兄猾（エウカシ）と戦い苦戦しますが倒します。その後、奈良県桜井市・忍坂（オッサカ）から奈良県橿原に到着し、都を造り、初代天皇に即位します。

東征は、日向から橿原まで７年の歳月を要しています。

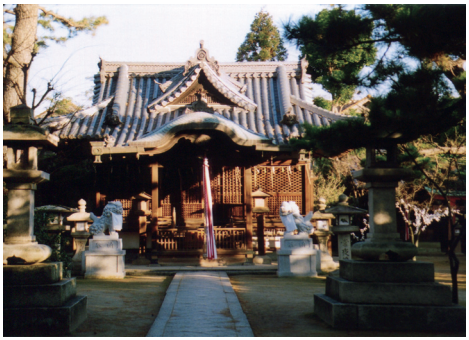
神武天皇は、橿原に都を築き、天皇に即位するや即座に三島の豪族・三島溝咋耳命と接触し、提携を進めます。そして一族の媛踏鞴五十鈴媛を初代皇后に迎えます。なぜ、三島溝咋耳命だったのでしょうか？

それは、神武天皇の国づくりが稲作を基礎にしていたからです。神武天皇は稲作の技術を各地に導入しながら橿原までの道を進んできました。稲作には農耕のための道具が必要です。さらに水の管理技術も欠かせません。三島溝咋耳命は三島で銅や鉄の鋳造技術を持つ豪族でした。その上、川や池や灌漑用水、溝を掘り護岸の杭を打って水路を築くなど農業神であり統治者でした。「耳」は最も偉い人という意味で使われます。

神武は、稲作の技術と、農耕道具作りの技術と、水の管理技術の統合をはかったのです。そして、それを見事に成し遂げ、日本の国づくりの礎を固めたのです。神武東征の道は稲作による国づくりの道だったのです。

佐和良義神社は、火の神である加具土神（カグツチノカミ）を祀る神社です。サワラは銅を、ギは村を意味しています。カグは銅の古語です。神社と村の名前が一致していて、この一帯に鋳造工房があったことを思わせます。それは神社の北300メートルにある東奈良遺跡から銅鐸の鋳型が出土している

佐和良義神社


溝咋神社

ことでも裏付けられます。

溝咋神社は、第 10 代崇神天皇の時代に創建された、茨木最古の神社ですが、ここに三島溝咋一族が祀られています。本殿には媛踏鞴五十鈴媛命と溝咋玉櫛媛命（五十鈴媛の母）が、相殿には三島溝咋耳命（五十鈴姫の祖父）・天火方奇日方命（五十鈴媛の兄）・素盞嗚尊（スサノオノミコト）（＝五十鈴媛の祖先）・天児屋根命（アメノコヤネノミコト）（＝藤原氏の祖神）が、それぞれ祀られています。

神武天皇は、崗の水門や安芸や吉備でかなりの期間滞留していますが、これは入植のために必要だったからです。その地を統治する部下を入植させ、彼らを含めて生活できる田畑の開拓が必要でした。武力で統治するだけが目的ではなかったのです。

その地で力をもつ豪族の抵抗もかなりありました。長髄彦や名草戸畔や兄猾はその例です。彼らは神武天皇の部下の入植に抵抗したのです。恐らく、稲作による国づくりにも抵抗があったのでしょう。

神武天皇は７年という時間を費やして、国づくりの基礎を固めたわけです。その終着地が三島・茨木だったのです。

2、鉄と銅・産鉄の民のものがたり

五十鈴媛……うた芝居シナリオ：三村夫美

うた芝居「 五十鈴 」（ＩＳＵＺＵ）

どん帳 開いている
中幕 閉めたままで暗い
Ｍ１（ミニ序曲）
Ｍ２（主題歌）
{リン コーロ リン
リン コーロ リン
耳を澄ますと聞こえるよ
リン コーロ リン
リン コーロ リン
銅鐸の 可愛い 響き
眠り続けた弥生の宝
五十鈴姫の 夢ものがたり
むかしむかし ずっとむかし 茨木は
はろばろと 青い山並み
はろばろと 黄金の稲穂
人は人は 人々は
大きな自然に いだかれて
ほっこり ゆったり暮してた
リン コーロ リン
リン コーロ リン
耳を澄ますと聞こえるよ
リン コーロ リン
リン コーロ リン
銅鐸の 可愛い 響き
土の中から今よみがえる
五十鈴姫の恋ものがたり
五十鈴姫の恋ものがたり}
中幕あがる
資料館
上手から小学生達登場
●小学生Ａ「こんにちは、誰か いてはりますか？」
●小学生Ｂ「どないしょ、誰も おらんわ」
●小学生Ｃ「資料館へ来たら昔の事ぎょうさん聞けると
思ったのになあ。がっかりや」
●小学生Ｂ「あしたまでに昔の事 調べて行けへんかったら先生に
叱られるやんか」
●小学生Ｄ「宿題して行けへんかったら立たされるゾー。
どないするー？」
●小学生Ｂ「うるさいなあ お前も立たされるやろ」
●銅　鐸「私でよかったら昔の事 お話ししましょうか？」
●小学生Ｃ「今 なんか言うたん？」（Ａにたずねる）
●小学生Ｄ「ううーん」
●小学生Ｅ「ぼくらの他に誰もいてへんで」

●小学生Ｂ「気持ち悪るー！」
●小学生Ｄ「あんたら意外と怖がりやなあ」
●銅　　鐸「怖がらなくてもいいわ」
●小学生Ｂ（下手にある銅鐸に気付いて）「ここや、この銅鐸が
しゃべっとーる」
●銅　　鐸「そう、私は銅鐸。昔の事聞いてくださる？」
（小学生はお互いに顔を見合わせ、それぞれが思い思いにメモの
用意をする）

舞台暗いままで

Ｍ３　●ナレーター（銅鐸）「私は１９９９年の夏、茨木市の東奈良遺跡から
（ＢＧＭ）　掘り出された小さな銅鐸です。
ここには、今から二千年以上も昔から、銅鐸造りの工房が
ありました。そこで私は奉られたり、音を出したり、それは
それは忙しい毎日を送っていました。
ところがある時、事件が起きたのです。それからというもの
私は永い間、土の中で暮らさなければなりませんでした。
それでは、むかーしむかし、ずっとむかし東奈良がまだ沢良宜ムラ
と呼ばれていた頃のお話から始めましょう。

明るくなる

（銅鐸工房の職人達は　あちらこちらからやって来て、互いに朝の挨拶を交わす。）
●職人の長（幸緒野の祖父）「さあ、みんな。今日も元気に働こう」
●職人達　「おお！」
（全員祭壇の前に　かしこまって座る）
●職人の長「光の神様、土の神様、火の神様、生きとし生ける物を
お造りになられた神様、どうか霊験あらたかな銅鐸をお授け
くださいますようお願いいたしまあーす」
●全　　員「お願いいたしまあーす」
●職人の長「今日は溝咋耳命様と玉櫛姫様が一緒においでに
なるぞ。みんな張り切って仕事に精を出すように」
●全　　員（歓声を上げ、お互いに喜び合う）

Ｍ４　●職人作業歌（全員持ち場に着く）
（コーラス）｛一、　燃えろ燃えろボーボーと　燃えろ燃えろボーボーと
この世で一番美しい銅鐸になれ
ひとふたみいよ いつむゆななや このたーり

○職人の長作業準備
沢良宜ムラの銅鐸は　豊作かなえる宝物
キラキラキラとまぶしくて
不思議な魔力 ふりまくよ

○職人二人釜に原料入れに立つ
沢良宜ムラの銅鐸は 豊作かなえる宝物
キラキラキラとまぶしくて
黄金の稲は ざわめくよ

○竹踊り
燃えろ燃えろボーボーと　燃えろ燃えろボーボーと
この世で一番美しい銅鐸になれ
ひとふたみいよ いつむゆななや このたーり｝

●職人の長「速度をあげろー」

転調（M４）

○竹と炎の踊り　〔二、　燃えろ燃えろボーボーと　燃えろ燃えろボーボーと
この世で一番美しい銅鐸になれ
ひとふたみいよ いつむゆななや このたーり
燃えろ燃えろもっともっと燃えろ
燃えろ燃えろもっともっと燃えろ
豊作叶える銅鐸造ろう　暑さも辛さも 吹っ飛ばせ
ひとふたみいよ いつむゆななや このたーり
ひとふたみいよ いつむゆななや このたーり〕

●職人の長　「さあ、銅鐸の鋳型 準備用意」
●職人達　（互いに呼び合う）「鋳型の準備用意」
●職人１　「鋳型の準備完了」
下手から　●村人１　「溝咋耳命様と玉櫛姫様をお連れしました」
「どうぞ」（二人に）
●溝咋耳命　（溝咋耳命が幼い玉櫛姫と登場）「やあ、みなさん
また玉櫛にせがまれてやって来ました。よろしく」
●　職人の長　「これはこれは溝咋様、ようこそおいでくださいました。
今日 一日、姫様と ごゆっくり私どもの仕事をご覧ください。
加羅耶、姫様にあれを」（棚に置いてある銅鐸を指す）
●加羅耶青年「はい」（銅鐸を取ってくる）［姫様、はいどうぞ」
●玉櫛姫　「加羅耶、ありがとう 」（彼女は銅鐸の音を楽しむ）
下手から　●村人２　（慌てて駆け込んでくる）「大変だーっ！兵隊がやってくるぞ！
目に入れ墨をした今までに見たこともない連中だ」
（村人の後を追って兵隊達がやって来る）
●隊長　「此処は沢良宜ムラの銅鐸工房だな」
●職人達　「そうです」「それが何か」
●隊長　「よーく聞け！これからは鏡女様の世の中になる」
●職人達　（どよめき、あっけにとられている）
●隊長　「だまれ、だまれ。（みんなを制してから咳ばらい）
これから鏡女様のお布令を伝える。よーく聞くように。

（鳴り物）　ひとーつ、今後一切、銅鐸を祭ってはならぬ。（エーツ！）
（鳴り物）　ひとーつ、今後一切、銅鐸を造ってはならぬ。（そーんな！）
（鳴り物）　ひとーつ、鏡女様は鏡がお好き。これからは鏡を崇め奉る
世の中になる。 今すぐ銅鐸を土に埋めてしまうように、以上」
●職人達　（騒然となる）「そんな無茶な！」「何と言う事！」
「溝咋様」（みんなの視線が一斉に溝咋耳命に集まる）
●溝咋耳命　（立ち上がり凛として）「三島の豊かな実りは銅鐸
あっての事。勝手なふるまいは許さぬ」
●職人達　「そうだ　そうだ」
●隊長　「おお、溝咋はここにいたのか。いくら捜しても見つからぬはず。
御同行願いたい」
●溝咋耳命　「望むところ。鏡女とやらに会わせい」
●職人の長　「行ってはなりませぬ。溝咋様」

●玉櫛姫　「おとうさま、行かないで！」
●溝咋耳命「心配いたすな。話せばわかる。玉櫛を頼む」
●職人２「はい、お守り致します」
（隊長は溝咋耳命を引っ立てて行きしなに兵士達に「やれ！」
と顎で命令を出し、下手へ去る）

Ｍ５　（二人の姿が下手へ消えたと同時に兵士達の破壊行為が始まる。
（ＢＧＭ）　玉櫛姫の持っていた小さな銅鐸を兵士が奪い投げ捨てるのを
皮切りにそれは始まった。加羅耶青年は慌てて姫に駆け寄り、
守ろうとする。釜はひっくり返され煙が立ち、数個の銅鐸を奪おう
とする兵士とそうはさせまいとする職人達の争い。騒然とする中
から玉櫛姫の「加羅耶助けて！　とうさまあ」と悲痛に泣き叫ぶ声）
照明消える（スポットで鏡女浮かび出る）
Ｍ６　●鏡女｛三島の民よ　よーくお聞き。
もう銅鐸に用はない
銅鐸よりも何よりも 鏡が一番の宝物

お日様を二つにする鏡は
豊作を二倍にする

お日様を二つにする鏡は
財宝を二倍にする

三島の民よ　よーくお聞き。
もう銅鐸に用はない
銅鐸よりも何よりも鏡が一番の宝物｝

スポット消える
●ナレーター「あの事件でムラはひどい事になりました。私は頭
を強く打って気が遠くなり、気の付いた時はなんと土の中で、
何十年も時が経っていました。あの活気あふれる銅鐸工房は
見る影もなく、沢良宜ムラは、すっかり寂れてしまいました」
明るくなる　（舞台には山百合の花が咲き乱れている。幸緒野は野良仕事をしている）
Ｍ７　●五十鈴（踊りながら幸緒野を意識して歌う）
（わらべ歌風）　｛お婿さん お婿さん あなたは誰のお婿さん
願いが叶えば 辛いお酒をあーげよ｝
●幸緒野（畑を耕す手を止めて）
｛お嫁さん お嫁さん あなたは誰のお嫁さん
願いが叶えば 甘いお酒をあーげよ｝
（二人は顔を見合わせ 幸緒野は作業を続ける。
五十鈴は少し照れて、うつ向き 土を蹴りながら又歌う）
●五十鈴　｛お婿さん お婿さん あなた‥‥｝
「幸緒野 ちょっと来て ここに何か埋まってるわ！」
●幸緒野　「まったく！　五十鈴様は呑気なんだから。
ちょっとのいて。きっと もぐらでしょう」
●五十鈴　「わあ！いやだ！」

○不安な響き　●幸緒野「ちょっと大きめの石でしょう。あれ？（掘りはじめ、
本気になってそれを掘り出す）こ、こ、これは！
昔、おやじから聞いた事のある銅鐸という物ではないかなあ？
それにしては 小さくて、光っていないけれど‥‥」
●五十鈴「まさか」
●幸緒野「そうに違いない」
（銅鐸が「リン コーロリン」と鳴る）
●五十鈴「あら？音が出る。でも、銅鐸って黄金色だったと
聞いていたけれど？」
●幸緒野「きっと長い間 土の中で眠っていたからこんな色になっ
たんだ」
●五十鈴「眠りから覚めたら また輝くのかしら？」
●幸緒野「まさか！」

M８　●二人｛まさか 、まさか、 まさか、まさか　二人だけの秘密
（デュエット）　シー、だれにも言わない秘密 シー、二人だけの秘密、
シー、秘め事よ、　指切りだ　約束よ｝
●五十鈴｛わたしの様に可愛い銅鐸｝
●幸緒野｛わたしの様にかっこいい銅鐸｝
●二人「よく言うよ」（同じタイミングに気付き笑う）
上手から加羅耶登場
M９　●加羅耶｛今日は青空　いい天気だなあ
（鼻歌気分）　ああ、いい気持ち、ああ　いい気持ち
おかげで ますます寿命が伸びそうだ！
うれしい事よ。　困った事よ｝
（あわてて銅鐸を隠そうとする二人を見とがめ驚いて）
「何をしている お若い二人
そ、そ、それは ひょっとして銅鐸ではないか
何処にあった？（二人は堀った所を示す）
○不安な響き　ああ、いやな事を思い出した（厳しい口調で）元へ戻せ！」
（一人言）「まさか、また鳥の目の兵士がやって来るかも」
（思い直して）「そんな事はないだろう。まあいいか。
二人の前にこの可愛い銅鐸が現れたのも何かの因縁だよ。
銅鐸に稲の実りを祈るように、恋の実りを願いなされ」
（二人は照れる）
上手から
六人の娘登場　●村人３「加羅耶じいさん、やっぱり ここに居た」
●村人４「もう！、気がきかないわねえ」
●村人５「お二人だけにしておあげなさいよ」
●加羅耶「この二人だけではしめっぽくていかん。
そうだ、ちょうどよい所へ来た。昔の事を思い出したついで
に、みんなに蹈鞴踊りを教えてやろう」
●幸緒野「子供の頃、時々おやじが歌っていたなあ。
（遠くを見つめ）何だか悲しそうだった」
M１０　｛（自信なさそうに）この世で一番美しい‥‥
（ア カペラ）　キラ キラ キラ と輝く銅鐸の姿

ひとふたみよ いつむゆななや このたーり｝だったような？」
●加羅耶「ハ、ハ、ハ、そんな歌では炎は燃え上がらんぞ。
作業歌は大勢で息を合わせ、蹈鞴を踏んで風を送るのだよ」
Ｍ１１　（村人達は加羅耶から基本の足さばきを真似る）
（舞踊曲）　（二人は少女達のたたら踊りに見とれているが、やがて
約５分以内　五十鈴も幸緒野も踊りに加わる）
｛燃えろ 燃えろ ボーボーと　燃えろ 燃えろボーボーと
この世で一番美しい　銅鐸になれ
ひとふたみいよ いつむゆななや このたーり
ひとふたみいよ いつむゆななや このたーり
燃えろ 燃えろ もっともっと燃えろ
燃えろ 燃えろ もっともっと燃えろ
豊作叶える銅鐸を造ろう　暑さも辛さもぶっ飛ばせ
ひとふたみいよ いつむゆななや このたーり｝
●加羅耶「その調子 その調子！」（下手へ退場）
●幸緒野「姫、すごい すごい。よお！蹈鞴五十鈴姫！」
（はやし立てる幸緒野に五十鈴姫は微笑み返し、踊り続ける）
下手花道　（そこへ、磐余彦が颯爽と登場。家来の兵士の大久米が後に
スポット　控えている）
Ｍ１２（ＢＧＭ）
舞台照明暗く
スポット　ドラの音
●磐余彦「ああ 三島はなんて素晴らしい所だろう。
叔母上様の鏡女様がおっしゃっていたとおり、
なかでも沢良宜ムラはほっこり、ゆったりしているではないか。」
●大久米「この土地を治めていた溝咋耳命の孫娘がもう
年頃になっているはずです。母親の玉櫛様に優るとも劣
らぬ美しさとか」
●磐余彦「お名前は何と申される？」
●大久米「五十鈴姫と言われます」
●磐余彦「我々の住む大和から見ると　この三島は奥座敷
になる所。『三島に行ってまつろわぬ者達がいないか
もう一度確かめて来るように』と鏡女様が申された」
Ｍ１３
●磐余彦　｛こんな寂れた所には
まつろわぬ者 いるかも知れぬ
こんな静かな所には
素敵な人が いるかも知れぬ｝
●大久米　｛磐余彦様 お任せを
この大久米が探しましょう
どこにいるか　こっちかな
いやいや違う　そっちだろう｝
（舞台中央　群れの中から五十鈴姫は立ち上がって踊りはじめる）
●二人　｛山百合に包まれて｝
●磐余彦　｛香しい人待つでしょう｝

●大久米　　{美しい人待つでしょう}
●二人　　{山百合に包まれて}
●磐余彦　　{ひっそりと}
●大久米　　{ひっそりと}
●二人　　{ひっそりと}

舞 台　　（二人は踊りに気付く。踊っていた娘達も気付く）
明るくなる　●村人６「あら、見かけない人達ね」
●村人７「あの目は何？お化粧しているの」
●村人８「そうじゃないわ。入れ墨でしょう」
（五十鈴と村人達は二人に寄って行く。幸緒野は警戒し、
山ゆりの花の陰に隠れる）
●村人９「まあ、その目はアマ鳥みたいですね」
●村人１０「セキレイのようだわ」
●村人１１「千鳥のようにも頬白のようにも見えてよ」
●五十鈴「何故 鳥の目をしているのですか？」
●大久米「鳥のように目を大きくして美しい人を探し
ています」
●村人達 「まあ！」
●五十鈴（磐余彦の刀に目を止めて）「なんて立派な
刀でしょう。たまはがねでできていますね」
●磐余彦「なんて お目ざとい方。先ほどの踊りの足
さばきは、 たまはがねを造る時の、たたら踏みの
仕種に似ていますね」
●五十鈴「あなた様こそ 何てお目ざとい事」
●磐余彦「ひょっとして、あなたは五十鈴様では‥？」
●五十鈴「そうですが、どうして‥‥？」
●磐余彦「蹈鞴踏みの足さばきは実に美しい。
蹈鞴五十鈴姫とお呼びしてもいいでしょうか？」
●五十鈴「まあ、幸緒野と同じ事をおっしゃるあなた様は？」
●磐余彦「磐余彦と申します。この者は私の兵士」
●大久米「大久米と申します」
●村人達（ひそひそと）
●村人１２「かっこいいけど何だか下心がありそうね」
●村人達「ええ」
●村人１３「姫様、お気をつけなさいませ」
（上手へ六人の娘去る）
Ｍ１４　●磐余彦 （遠慮なく五十鈴を見て）
{匂い立つ 山百合のような人}
●五十鈴{剣振る　恐ろしい人でしょう？}
●磐余彦{人の心は　剣で奪う}
●五十鈴{人の心は　剣に負けぬ
誠の愛は　二人で育むもの
貴方には　分からない　わたしの気持ち}
●磐余彦{貴女には　分からない　わたしの気持ち}
●二　人{あなたには分からない　わたしの気持ち}

●磐余彦「そなたの言うことはよく分からぬわ。まあ、よい。そのうち
必ずわたしの方を向く様にして見せる。大久米、行くぞ」
●大久米「はい、はい、磐余彦様」（後を追いながら五十鈴姫をふり返り）
下手へ二人去る　●五十鈴「なんて激しい方なのでしょう。あれが噂に名高い
炎のような男、火火出見の磐余彦だったのか。
おだやかな幸緒野とはまるで違う男だわ」
●幸緒野（山ゆりの花の陰から あわてて飛び出してきて）
「ああ、何てずうずうしい連中だ！わたしから姫を奪う気だ。
絶対に、そうはさせないぞ！」（銅鐸をにぎりしめる）

舞台暗くなる
中央幕下りる

●ナレーター「あの時、五十鈴姫が私を見つけてくださったおかげで
私は久しぶりに地上に出る事ができました。
その昔、可愛かった玉櫛姫は、いつの間にか母親になられ、
慈しみお育てになったお子様の五十鈴姫は美しく成長され
ました。月日の経つのは早いものです。そこへ現れたのが
例の二人組みです」

舞台明るくなる
下手花道から　●磐余彦「先ほどの五十鈴とやら、わたしは気に入った。
大久米、よきにはからえ」
（大久米の他にも三人の兵士が槍を持って立っている）
●大久米「お任せください磐余彦さま。それにしても、この
あたりは思っていたよりも寂れていますね。
まつろわぬ者などおりませぬわ」

中央幕上がる
館の中から　●玉櫛「どなたかな？」
●大久米「おお、玉櫛様。この方は磐余彦命と申されます。
鏡女様の甥にあたるお方です。このたび、海のかなた
（幸緒野は　日向の地より、吉備、そして難波の岬へお着きになり、
隠れて聞いてる）　東へ東へと攻め昇って来られました」
●玉　櫛「まあ！それでは土蜘蛛も、長すね彦も負かされたお方？」
●磐余彦「そのとおりです。我々は攻めては必ず攻め取り、戦えば
必ず勝ってきました。このたまはがねの太刀のおかげです」
（太刀をちらつかせ、遠く昔に思いを馳せる）
●大久米「磐余彦様は 是非こちらの五十鈴姫様をお后様に
お迎えしたいと望んでおられます」
●玉　櫛「なんと！」
●大久米（磐余彦に聞こえないように玉櫛に囁く）
「断れば三島一帯は真っ赤な血の海に染まりましょうぞ」
●玉櫛「おお！」
●磐余彦「五十鈴様は実に美しい。それに なかなか利発な方と
お見受けしました。かねてより わが后としてふさわしい
方を探しておりましたが、やっとその方にめぐり逢えたの
です。後日､改めて五十鈴様を お迎えに参ります。
（上手から幸緒野飛び出して来る）
●幸緒野「やいやい、このあいだから姫につきまとっている

お前たちは何者だ。姫に指一本でも触れてみろ。この幸緒野様
が許さないぞ！」

●大久米「無礼者、おまえこそ何者だ。磐余彦様に指一本でも
触れてみろ。この大久米が許さぬ」

●幸緒野「かまうものか」

（かまわず磐余彦に寄ろうとする幸緒野を大久米は押しとどめよ
うとして二人が揉み合うと、幸緒野の懐から銅鐸が見つかってしまう）

○不安な響き　●大久米「あっ、これは」（幸緒野から奪い取る）

●幸緒野「そ、それを返せ」（大久米は素早く幸緒野をねじ伏せる）

●大久米「磐余彦様」（磐余彦を見る）

●磐余彦「鏡女様のお布令が出てからもう何十年も経っていると
いうのに、まだ銅鐸がこの世にある事は断じて許せぬ」

●大久米「どういたしましょう」

●磐余彦「たった一つの銅鐸だが、これは三島全体の問題」

●大久米「まず、こやつの首を切り落とし三島の民の見せしめに
致しましょうか」

●磐余彦「叔母上様の案じられていたとうり三島は、三島はやはり
まつろわぬ所だったのか」（無念そうに空を見上げる）

照明次第に暗くなる。（うめき声、煙がたちこめはじめる。異常な気配に一同 騒然となる）

Ｍ１５

五分以内（目に入れ墨をした兵士達と舞台の両側から現れたまつろわぬ亡霊達の群舞。
やがて亡霊は消える）

明るくなる　●大久米「今のは いったいなんだったんだ！」

（みんなが唖然としている所へ五十鈴が駆け込んで来る。
幸緒野の捕らわれているあわれな姿を見て）

●五十鈴「何て事を！幸緒野を放しなさい」

（五十鈴の見幕と、不気味な出来事に気弱になった大久米は幸緒野を放す。

●幸緒野（強気になって）「銅鐸の祟りだぞ。」

●磐余彦「もう銅鐸は過去の遺物。今となってはなんの値打ちもない物。
無駄な抵抗は止めて 今すぐ土に埋めろ。
叔母上様になりかわっての命令だ」

●大久米（慇懃無礼に脅迫）「玉櫛様、先ほどの件、
よーく お考えを」（態度を一変して）「さあ、磐余彦様
五十鈴様を迎える支度に 一度戻りましょう」

●磐余彦「うん」

（磐・大は下手花道へ去る）

Ｍ１６　●玉櫛「白さぎが飛んで行く　虹が坪の方へ
わたしが人生で一番 輝いたのは
そう　あの時だった
ある日　りりしい若者が　わたしの前に現れた
名前は事代主といった
彼は朱塗りの矢でわたしを射止め
空と海の区別がなくなるくらい お互いに溶け合ったの
そして 五十鈴を授かり 穏やかなムラの明け暮れが続いた
可愛いちっちゃな五十鈴を肩車して
彼は沢良宜浜の潮風に吹かれて歩く

わたしは二人を追いかける
でも、いくら走っても追いつかないの
何故？
五十鈴の はしゃぐ声が波音に消され遠のいて行く
今度は五十鈴が輝かなければ
なのに、なのに磐余彦が現れた
剣を持って現れた
愛と剣はたがう物
愚かな野望、虚しい打算、罪な脅迫作り出す
あはははは　あはははは　可笑しいじゃない　あの目付き
あはははは　あはははは　可笑しいじゃない　あの振る舞い
人は悲しすぎると　悲しくなくなるわ
人は悲しすぎると　笑えてくるものね
あはははは　あはははは　あはははは　あはははは
可笑しい　可笑しい　可笑しい　可笑しい
笑いが止まらない
あはははははははははははははは

わたしの愛した人は次々と姿を消して行く
事代主も とうさまも今はもう いない
もしかして 五十鈴も白さぎのように
飛んで行ってしまうの？ああ！｝

（玉櫛は泣きくずれる）

●五十鈴（駆け寄る）「お母様！」
●幸緒野（駆け寄る）「玉櫛様！」

上手から登場　●加羅耶「御前さん達が銅鐸を掘りだした時にはいやな予感が頭をかすめたが、やはり目に入れ墨をした兵士がやってきたか！あいつらは 又、ムラをめちゃくちゃにするのではないだろうか？ あの時の事を思い出すと ぞっとするわ！」
●五十鈴「あの時って？加羅耶じいさん、話を聞かせて！」
●幸緒野「おやじが話したがらなかった昔の話を」
●加羅耶「よーくお聞き。わたし達の御先祖様は銅鐸造りの職人だった。彼らが とても尊敬していたのは、三島の土地を治めていなさった溝咋耳命様。聞いた事があるだろう？
（二人 共うなずく）その溝咋様の娘さんが玉櫛様だよ」
●五十鈴「まあ！お母様」
●加羅耶「銅鐸造りの秘伝は幸緒野の爺様が受け継いでいた」
●幸緒野「真っ赤に燃えた炉を守ろうとして、わたしのじいさんは大やけどを負って亡くなったと聞いていましたが？」
●玉櫛（はっ として）「大久米が言った（もし、五十鈴の輿入れを断れば黄金の稲穂が赤く血に染まる ）と‥‥。
そうだからと言って五十鈴姫を…。
でも、この話をことわれば銅鐸の時と同じ惨状になる。
とうさまは連れて行かれ、あれっきり帰ってこなかった」

M１７　●四　人｛どうすればいいのだろう
（四重唱）　ムラを守ろう かんがえましょう｝

●幸　　{戦えば？}
●加　　{なりませぬ}
●五　　{戦いましょう}
●玉　　{なりませぬ}
●幸　　{やっつけよう}
●加　　{なりませぬ}
●五・幸 {やっつけましょう}
●玉・加 {なりませぬ なりませぬ}
●五・幸 {勝てるの？ 負けるの？ムラはどうなるの？}
●玉・加 {血の雨　火の海　ムラは滅びるわ！}
（ここまで繰り返し）
●五・幸 { 磐余彦の剣は たまはがねでできている}
●玉・加 {私達の剣は　そんなものは何もない}
●五・幸 {兵士達の剣もたまはがねに違いない}
●玉・加 { 村人の剣は石と木切れ　勝ち目ない}
●四　人 {どうすれば いいのだろう
ムラを守ろう 考えましょう}

●五十鈴「確かに勝ち目はありませぬ。あのたまはがねの
太刀ですもの。（しばらく考えて･･･悲壮な覚悟で）
○不安な響き　行きましょう、磐余彦のもとへ。私が行くことで戦い
が避けられるのなら」
●玉櫛「ああ、五十鈴！」
●幸緒野「ああ、姫様！」
（五十鈴は気持ちを変えて）
●五十鈴「ねえ、覚えてる？幸緒野がつかまえたこんなお魚」
（突然の五十鈴の会話の調子に皆は驚く）
●幸緒野「覚えていますとも。そう、これぐらい。いや、もっと大きかった」
●五十鈴「うそ！これぐらいよ。でも、おいしかったわ」
●幸緒野「姫様おいしそうにこーんなに口を大きく開けて食べてた」
●五十鈴「いやだー。幸緒野ったら！」
（逃げる幸緒野に すぐ五十鈴は追いついて、はっと現実にもどる）
中幕下りる（ 音楽が始まると玉櫛と加羅耶は気をきかせて館の中へ退場）

M１８
●五十鈴　　{あなたと育った三島の里}
●幸緒野　　{あなたと舞った たたら踊り}
●五十鈴　　{白さぎ遊ぶ　虹ヶ坪の景色　}
●幸緒野　　{青い山並み　黄金の稲穂波　}
●二　人　　{ああ、二人の思い出は
移ろう季節のように
ああ、 二人の思い出は}
●五十鈴　　{遠く}
●幸緒野　　{彼方へ}
●二　人　　{去るよ}

●五十鈴「私はどうなってもいいの。ムラのおだやかな暮らしが
守られるのなら。私はどうなってもいいの。

でも、私が去った後の幸緒野の悲しみを思うと･･･」
●幸緒野「姫のいない暮らしなんて考えられない。姫を失った後、
私は何を支えに生きていけばいいのか！」
（幸緒野は、はっとして）
加羅耶上手花道で聞いている　●幸緒野「姫様、おいたわしゅうございます。でも
本当にムラを救うために行かれるのですか？ひょっとして、この幸緒野よりもかっこいい磐余彦が････」
●五十鈴「なにを言うのです。彼がかっこよく見えますか？
たまはがねの大刀をたずさえて、戦に勝ち誇っている
姿はあわれです。人の命を奪ってきた者は、明日は我
が身と脅えています。私は彼の後ろ姿に孤独を感じました。
●幸緒野「なんですって！あわれですって？後姿が孤独
に見えるですって？姫、それって、まさか恋をなさ
ったのでは････？ああ、姫、姫、何て言うことに！」
●五十鈴「幸緒野はいつも、こわれものに触れるよう
に私を姫、姫と呼ぶわね。私は五十鈴。
ああ、私はなにを言っているのだろう。幸緒野、こんな
に私を大切にしてくれるのに。ごめんなさい。許して！」
中幕上がる　●幸緒野「ああ、あまりの悲しさで姫はどうかなさってし
まった。おいたわしい事よ。姫、姫、お気は確かか？」
●五十鈴「私は五十鈴。姫、姫と呼ばないで」
●幸緒野「また、あんな事を。嘆かわしい事よ」
M１９　●五十鈴｛私を五十鈴と呼んだ あの方に
私の夢を託しましょうか。
私を五十鈴と呼んだ あの方と
まだ見ぬ世界 造りましょうか

山百合の花のように　私は咲こう
山百合の花のように　私は咲くの
両手を広げ　明日に向って
心を開き　　明日を信じて　　ひかり 求め

●五十鈴「幸緒野、（しばらく思案をしてから 決心をして）
刀を造る原料で鍬や 鋤を作ってはどうかしら？」
●幸緒野「なんですって！鉄で農具を････」
●五十鈴「ええ、新しい時代にふさわしい技に挑みましょう」
●幸緒野「おお、すごいお考え」
●五十鈴「幸緒野、今度は農具を作るために蹈鞴を踏んで
ほしいのです。
鉄の取れる所は磐余彦が知っているに違いありません。
(しばらく考えて)そうだわ！舟で沢良宜浜に届けましょう。
遠く離れてもあなたと私の夢は同じ」
●幸緒野「嫁がれてもあなたとわたしの願いは同じ」
●二人　「鉄で沢良宜ムラをよみがえらせましょう｝
●五十鈴「約束しましょう」
●幸緒野（はっとして）「約束できない！」

舞台暗くなる　（幸緒野は五十鈴の手を振りほどき、上手花道に立っている
スポット　加羅耶じいさんの所へ駆けていく）
（五十鈴は村人達に花嫁衣裳をかけてもらいながら下手へ去る）
●幸緒野「加羅耶じいさん、聞いてください。こんな事って
ありますか？」
●加羅耶「とうとう歴史の大きな流れが、動き始めたぞ」
●幸緒野「どういう事ですか」
●加羅耶「まあ落ち着いて、よーくお聞き。
磐余彦は今までにない大物。五十鈴様にふさわしいお方」
●幸緒野「そーんな！」
●加羅耶「もっとも、大久米のやり方は確かに汚い！
しかし、姫と磐余彦は結ばれる運命にあったのよ。
姫の様に才知に秀で、慈悲深いお方がお后として磐余彦
のもとに行かれたならば三島も安泰。辛いだろうが
五十鈴姫をあきらめよ」
●幸緒野「いやだ。誰が 誰が あきらめるものか。
辛いよー 苦しいよう一 せつないよー」
●加羅耶「おお、おお、泣け泣け。涙が枯れるまで泣
くがいい。そして、 絶望の淵から立ち上がれ。
おまえには おまえの使命がある。
新しい技のために蹈鞴を踏むのじゃ。
銅鐸でもなく刀でもない農具を鉄で造れ」
●幸緒野（はっとして）「鉄で？　姫もそうおっしゃった！」
●加羅耶「丈夫な鍬や鋤で耕せば豊年満作間違いなしじゃ。
沢良宜ムラの元気が、豊かな大地の礎を作る。頼んだぞ幸緒野！」
（上手に歌いながら退場 ）{ひとふたみよ いつむゆななや このたーり このたーり}
●幸緒野「姫のように可愛い銅鐸よ、土にかえって静かに
お眠り。そして三島の平安と姫の幸せを守っていておくれ」
Ｍ２０　●幸緒野｛銅鐸よ　銅鐸よ
私の願い　聞いておくれ

五十鈴姫さま　守っておくれ
三島の暮らし　守っておくれ

銅鐸よ　銅鐸よ
私の願い　叶えておくれ｝

（幸緒野はうずくまり泣きながら銅鐸を埋める）
Ｍ２１　｛銅鐸に守られた三島は
（主題歌より　はろばろと青い山並み
陰コーラス）　はろばろとこがねの稲穂
人は人は、人々は
おおきな自然にいだかれて
ほっこり ゆったり暮してく｝

照明消える

銅鐸の音　　●ナレーター「私はあの時、あわれな幸緒野の祈りを聞いて
あげようと決心しました。でも、一人でまた何百年も土の中
で暮らすのはいや！幸緒野と一緒なら耐えられると思いま
した。ああ、何て事！私は あの時幸緒野に恋をしたのかも
しれません。
そして、また時が過ぎ 今日は姫のお輿入れの日。
ムラ人達は、何事もなかったように二人を大喜びで歌います。

照明点く　　（巫女奉納踊り）
Ｍ２２　　（祭壇に捧げ物を運んでくる人々。老若男女、村人達総出）
（コーラス）

｛１、おめでとう、おめでとう 媛蹈鞴五十鈴姫様
しあわせに、しあわせに 媛蹈鞴五十鈴姫様
どんな苦難が待ち受けていようとも、
お二人の愛の絆には かなわない
この喜びは はてしなく広がるよ
この喜びは いつまでも伝わるよ
２、おめでとう、おめでとう 媛蹈鞴五十鈴姫様
しあわせに、しあわせに 媛蹈鞴五十鈴姫様
どんな試練が待ち受けていようとも、
（二人は下手から登場）お二人で力合わせて 乗り越える
この喜びは はてしなく広がるよ
この喜びは いつまでも伝わるよ｝

●村人達「おめでとうございます」
●磐余彦（高らかに）「鏡女様と私から玉櫛様に二つの鏡を
お贈りいたします。末永く宝物となさいますように」
●大久米（うやうやしく差し出す）
●玉櫛（うやうやしく受け取りながら）「余命幾許もない私
です。私が永眠いたします時には、この鏡を北山の安威の
お墓へ持って行きましょう。
磐余彦様にお願いがございます。
この二枚の鏡に比べられない宝物を私達は あなたに差し
出しました。それは、私の娘、五十鈴。手塩にかけて慈し
み育てた、愛しい 愛しい五十鈴なのです。
五十鈴は貴方様の事も、村人達の事も考えて嫁ぐ決心を
したのです。
娘の健気さと、天晴れさに、この母の心は千々に乱れます。
お願いです。今後、このムラの永久の平安を約束なさいませ。
（次第に興奮してくる。悲しみから激しさへ変わる）
もし、もし約束を守らない その時には、銅鐸を奉っていた私の
父親 溝咋耳命の祟りがあろうぞ。
溝咋耳命は三島一帯を何時までも守り続けるであろう｝

Ｍ２３（ＢＧＭ）（あたりが暗くなり、一同空を見上げ不安になる
●溝咋耳命の声「五十鈴、安心して嫁ぐがよい。私は おまえ達を

何時までも見守っている。磐余彦と良き政を行え」

スポット　●磐余彦（声のする方へ向って）「溝咋耳命様、どうか安らかにお眠りください。この磐余彦は、五十鈴様を愛しく思い始めたその時から何故か この世のすべての物を愛しく思いはじめたのです」

M２４　｛磐余彦は 悟りました
磐余彦は 変わりました
政の礎は 平和な暮らし 守ること
磐余彦は 悟りました
磐余彦は 変わりました
永久に戦のない世界
五十鈴様と築きましょう｝

●大久米「さあ、出立の時がまいりました。
五十鈴姫様、最後のおなごりを」

●五十鈴「みなさん、お世話になりました。
五十鈴は みなさまの御恩と、この美しい
三島の里をいつまでも忘れません。
かあ様、お健やかに。長生きなさいませね。
五十鈴はきっと幸せになります。
磐余彦様がお誓いくださいましたもの。
幸緒野、幸緒野は何処に」

●幸緒野「はい、姫様 おなごりおしゅうございます」

●五十鈴「幸緒野、許せよ。母を頼ます」

●五十鈴「覚えていますか二人の秘密」

●幸緒野「覚えていますとも」

●五十鈴「あれを私と思って大切にして」

●幸緒野「誰も知らない所に埋めました」

M２５　（五十鈴は うなずき、改めて）

●五十鈴｛覚えていますか？ 二人の約束 ｝

●幸緒野｛覚えていますとも。 二人の誓いを｝

●五十鈴｛何時か きっと もう一度｝

●幸緒野｛何時か きっと たたら踏み｝

●五十鈴｛覚えていますか？ 二人の約束を｝

●幸緒野｛覚えていますとも 二人の誓いを｝

●五十鈴｛沢良宜浜に 舟を向けましょう｝

●幸緒野｛沢良宜浜に 舟がやって来る｝

●二人｛夢を見ましょう 叶えましょう
その日を夢見て 生きましょう
どんな試練が 行く手ふさごうと
あなたと会える日が来るでしょう
覚えていますか 二人の約束
覚えていますとも 二人の誓いを｝

●ムラ人達「ひそ、ひそ、ひそひそひそひそ
何が埋めてあるのだろう
何処、何処、何処に、何処に、何処に、

銅鐸だって、銅鐸だって
銅鐸は秘め事抱いて眠っているの？
銅鐸は三島を守って眠ってるのでしょう？
銅鐸は幾とせ過ぎても眠るのかしら？
みんなの暮らし守っていつまでも いつまでも」

Ｍ２２

（コーラス）●全 員｛おめでとう、おめでとう媛蹈鞴五十鈴姫
しあわせに、しあわせに媛蹈鞴五十鈴姫
どんな苦難が待ち受けていようとも
お二人の愛の絆にはかなわない
この慶びは 果てしなく 広がるよ
この慶びは 何時までも 伝わるよ｝

（歌の途中から磐余彦、五十鈴姫、大久米と その供達 村人全員は
舞台下手で待っている奥の方へ向かう）
（幸緒野は一人舞台に残り、みんなを見送る）
（上手で銅鐸が「さちおのー」と呼んで音をたてる）

舞台暗く

（幸緒野は我に返り銅鐸の音に引かれ、銅鐸の音に
誘われるように みんなとは反対方向の上手へ走り込む）

Ｍ２７　（ＢＧＭ 暗示と謎を秘めて‥‥）

音楽消え、舞台暗くなる

上手スポット　●館　長「あれ？誰かな？こんな所で昼寝しているのは」
（小学生達は半分寝ぼけながら）
●小学生Ｂ「この銅鐸 魂もってるわ」
●館　長 「うん 茨木市の宝物やからね」
●小学生Ｄ「時の流れってすごいなあ。私のおばあちゃん
のもっともっと昔の話や」
●小学生Ｃ「館長さん、五十鈴姫って知ってはりますか？」
●館　長 「うん、知ってますよ」
●小学生Ｅ「さすが！」
●館　長 「茨木市民の常識やからね。五十鈴姫がどうかしたのかな？」
●小学生Ａ「なんでもありません。おかげで宿題できました」
●館　長 「そうか、宿題してたんか」
●小学生Ｄ「ほな かえろか」
（小学生達はうなずいて）
●小学生達「おじゃましました」
●館　長 「もうそろそろ日が暮れるからね。気いつけて帰るんですよ」
●小学生達「はい。有り難うございました。さようなら」

小学生達は上手に去り、館長はみんなを見送った後、腕組みをして銅鐸を
まじまじと見る。

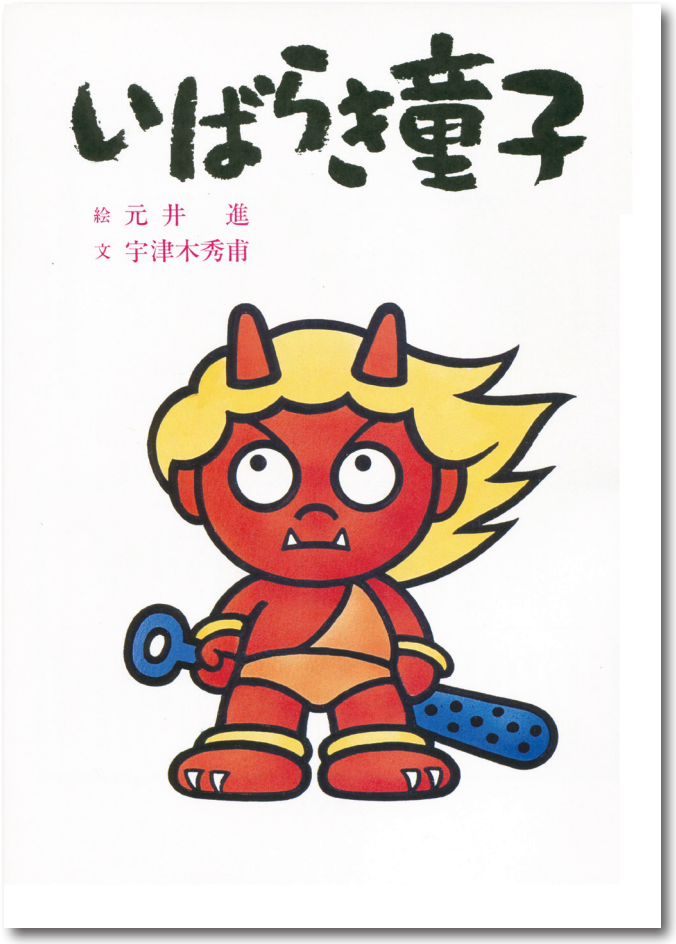
（完）

どん帳下がる

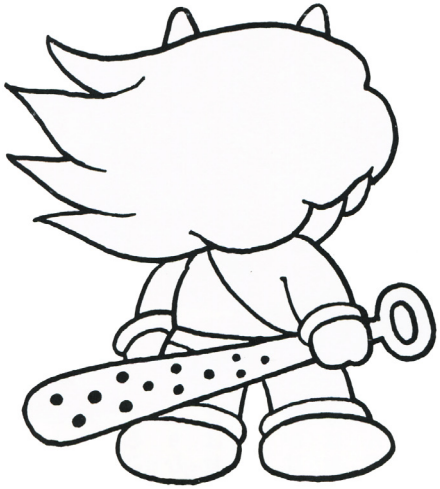
カーテンコール

Ｍ２　（主題歌）

茨木童子
絵本：茨木青年会議所



いばらき童子



むかし
　むかしの
　　ことやねん……

－ 1 －

京にいる茨木童子の歌

はなざかり　京のみやこで
花びらが　鴨川に散るよ
ひといっぱい　五條大橋
ひとごみに　まぎれていても
おもうのは　生まれ故郷よ

人びとに　まぎれこみたい
でもわしは　あいてにされん
かくれがの　羅生門で
空をみる　茨木の方
茨木の　子供やさかい

わしは人　人間や
けど鬼と　あいてにされん
かえりたい　茨木村へ
ふるさとの　ひとはやさしい
信じるよ　茨木のひとを

この本を読まれるみなさんへ

「いばらき童子」は、古くから茨木地方に伝えられてきたお話を、新しい物語に書きなおされたものです。

この本には、「はがはえそろおた」や「もどってしもおた」など、みなさんが聞きなれてない言葉で書かれていますが、これはこの地方で使われてきた特別の言い方で書かれているからです。

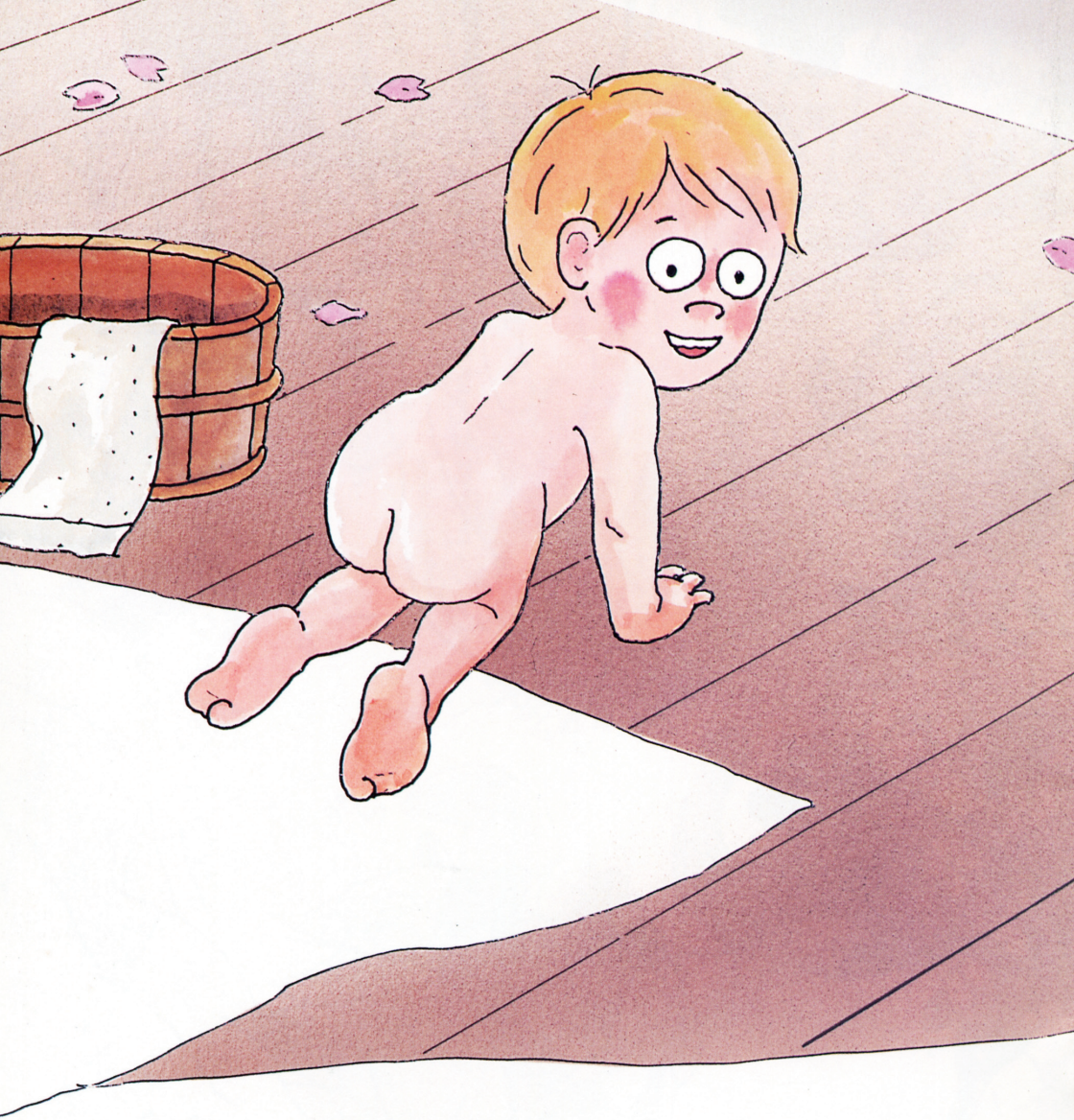
みなさんが使う場合は、「はがはえそろった」や「もどってしまった」になりますので、このことを頭において読書を楽しんでください。

ご指導いただく先生方へ

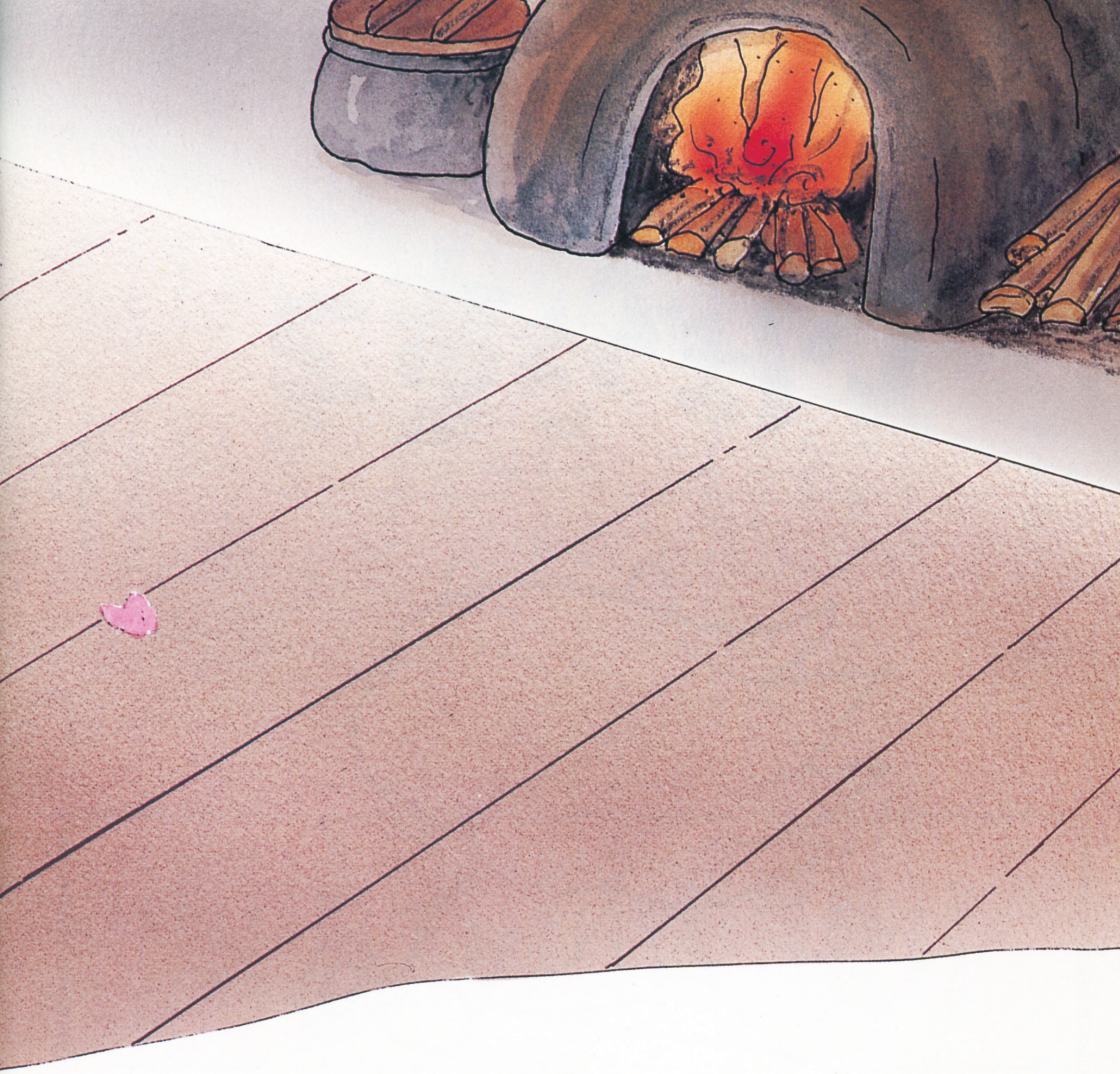
この絵本は、茨木地方に古くから伝わる伝説をもとに書き下ろされた創作民話です。

民話の文体は、その土地の風土や人々の生きざまをそのまま読み手に伝えるために、ふつうは方言を生かした独特の表現で書かれています。したがって、「はがはえそろおてた」「もどってしもおた」のような聞きなれない表現がされていますが、「はがはえそろってた」「もどってしまった」などの方言的な表現とご理解いただきたいと思います。

なお、教材などでご活用いただきます場合は、指導上ご留意いただきますようお願いいたします。



しばらくすると
こどものあたまに
つのがはえてきた。
ちちおやは
こまったことになったと
おもおた。
びんぼうなくらしを
してるのに
こんなこどもの
せわはやいておれん
どおしよおかと
ひとばんじゅう
かんがえた。



いばらきむらの
あるいえで
おとこのあかちゃんが
うまれた。うまれてすぐ
ごそごそ　はいだした。
ふりむいて
ははおやににこっと
わろおてみせた。くちには
はがはえそろおてた。
ははおやは　びっくりして
しんでしもおた。

あくるあさ　やまへくりひろいにいこおいうて　きたのやまに　つれていくとこどもをほかして　ひとりで　いばらきむらへもどってしもおた。

こどもは　だんだん　やまおくにはいってたんばの　おおえやまについておにのなかまにはいった。

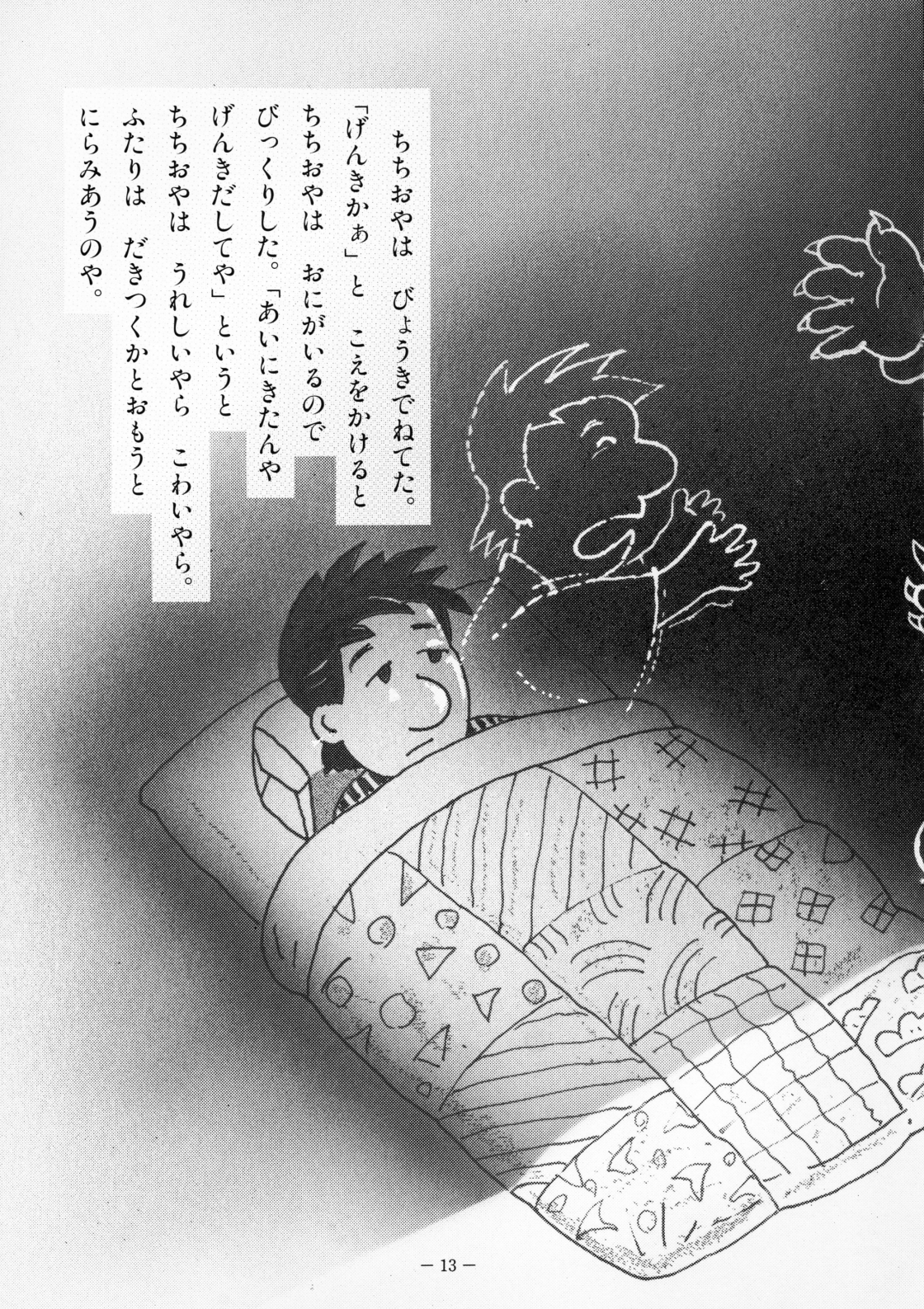
それからは　いばらきどおじ　とよばれるよおになった。

なかまが
こしらえた
かたなや　てっぽおを
きょうとの　みやこに
うりにいくと、
みやこのひとたちは
くさい　はだかんぼお　と
あいてにしてくれん。
いじめられる。

そのうち　だいじんの
めいれいで　さむらいが
やまぶしのすがたにばけて
おおえやまに　やってきた。
どくをまぜたさけを
おにのたいしょうに　のまして
やっつけてしもおた。
　のこったものは　ばらばらになって
ほうぼうへ　でていくことになった。

さむいふゆの　まよなか。
とおとお　いばらきにむかって
はしりだした。
らしょおもんから
いばらきへは　いっぽんみち。

いばらきどおじは
みやこの　いりぐちの
らしょおもんで
ねるよおになった。
みつけた　みやこのひとは
おにがでたぁ　と
さわいで　あいてにしてくれん。
いばらきへ　いってみたい　と
おもうよおになった。



ちちおやは　びょうきでねてた。
「げんきかぁ」と　こえをかけると
ちちおやは　おにがいるので
びっくりした。「あいにきたんや
げんきだしてや」というと
ちちおやは　うれしいやら　こわいやら。
ふたりは　だきつくかとおもうと
にらみあうのや。

「まて
ひをともす」と
ちちおやがいうと
「おやこで
はなしあうのに
ひはいらん」と
どおじがいう。
ふたりは　てを
つないで
おどりだしたそおな。

帰ってきた茨木童子の歌

帰ってきたぞ　茨木に
まよなかのみやこ　ぬけだして
走ってもどった　茨木や
お父さぁーん　元気かぁ

捨てられたのに　よぉもどった
茨木村は　よぉなった
いつもお前を　気にしてた
童子のことを　気にしてた

ふしぎやふしぎ　もどったら
あまえるどころか　えらそうに
童子はちゃんと　しゃべってる
村の人らは　みなやさしい

おおけにありがと　むらの人
ときどきもどって　きますけど
みやこで仕事　みつけます
だいじにします　茨木を

むらびとがきたさかい
「らしょおもんのおにと
いわれてるけど
ここのこどもだす
おやじを あんばいおたのみします」というた。むらびとは
「しんぱいいらん　ときどき
もどっといで」と
やさしかった。
「いばらきは　ええとこだすな」
そおいうて　いばらきどおじは
ときどき　いばらきへ
もどって
くるよおになったそおな。

（おわり）

3、稲作による国づくり

赤松民男

①稲作のはじまり

牟礼遺跡（「茨木の史跡」より）

きびしい自然条件の下で何千年もかかってゆっくり発展してきた縄文時代も晩期になると、自ら食料を生み出す段階を迎えたとみられる遺跡が茨木の沖積地にあります。それが牟礼遺跡です。昭和60年８月、市内中津町ショッピングセンター（いまのイオン・ジャスコ）建設の時、その予定地から「稲作のはじまり」を証明する井堰跡（取水堰）と、それに続く「水田遺構」が現れました。これは出土した土器から見て、福岡市の板付遺跡よりも古く規模も大きく、どうやら日本最古・最大の水田遺跡といわれています。水路は等高線を描いて東西に平行するように掘られていて、水田は優れた「乾田」であったと推定されています。

紀元前300年前後、中国では青銅器に替わって鉄器が武器にも農具にも使用され戦闘力も生産力も伸び、秦漢の大帝国を生み出した時代でした。当時、水稲栽培から調理までの技術は、模倣だけでは習得できるとは考えられないので、牟礼遺跡は中国の長江地方にいた人達か、朝鮮半島南部から移住してきた人達が営んだものではないかとの説もあります（茨木の歴史より）。

②神武天皇の稲作の東征と三島溝咋耳（ミシマミゾクイミミ）と五十鈴媛

神武天皇が稲作をもって九州から東征を果たした最後の地が

茨木ということになっています。牟礼遺跡をさかのぼること300年余の差がありますが、私達の町には太古のロマンに満ちた神々の物語が残っています。

［以下に「茨木の歴史・人物編　執筆者　三島紀之」を引用させていただきます］

茨木の地がようやく開けはじめたころ、神武天皇の東征に先立ち、山城、摂津、和泉、土佐方面に大きな勢力を持つ「三島溝咋耳」（大王・豪族）が、葦原の生い茂るこの未開の地に水路をつくり、水田を開いて治めていました。この神は京都下鴨神社に祭る「鴨建角身命（カモタケツネミノミコト）と同じ神様で、神武天皇東征のおり、紀伊の山中で道に迷われたとき、八咫烏（ヤタカラス）となって道案内をされました。また、和泉地方では大陶祇命（オオスエツミノミコト）といい、陶器製作にも力を入れ農業や工業の発展に功績をたてた大王（神様）で、三島地方の基礎を築きました。

三島溝咋耳には玉櫛媛（タマグシヒメ）という美しくふしぎな力を宿した娘が生まれ、成長すると出雲を開いた大国主命（オオクニヌシノミコト）の子の事代主命（コトシロヌシノカミ）と結婚されました。事代主命は大和の三輪地方の主で、三輪山のふもとの出雲屋敷に住んでいました。やがて溝咋の地で五十鈴媛が生まれ、成長すると大和三輪山のふもとの出雲屋敷に移り、父の事代主命のもとで暮らしました。この娘は長ずるに従い、母の玉櫛媛の血を受け、ますます美しくなり、大和の地でもその美人の名がひびきわたりました。大和を平定された神武天皇が、三輪山のふもとの狭井川（サイガワ）のほとりで、６人の侍女を従え、咲き匂う山百合を摘んでいる五十鈴媛に一目ぼれされ、是非妻にと望まれました。力ずくで五十鈴媛のホトを奪ったという説もあります。美人で心やさしい五十

鈴媛は天皇の求婚に応じ、畝傍山のふもと橿原の地に行き結婚され、正月元旦に皇后になられました（紀元前 660 年、現在の２月 11 日に当たり建国記念日、国民の祝日になっています。戦前は紀元節といわれていました）。

五十鈴媛は「媛踏鞴五十鈴媛命（ヒメタタライスズヒメノミコト）」といわれ、溝咋耳の一族が銅や鉄の鋳造技術を保持した三嶋縣の豪族であったことは間違いありません。稲作技術をもって東征し、大和の平定を目論んだ神武天皇は溝咋耳なる豪族と手を取り合い合体して、大和国家の基礎を築いていったのです。

③水稲耕作の展開

水稲耕作という新しい生産と生活の展開は、人々の原野に対する考え方を一変させました。低湿地の利用はもちろんのこと、山林を開発することも、農具を開発することも無限の宝庫となりました。弥生時代初期は乾田をつくるほどの技術の普及はまだ少なく、市域を流れる河川緑辺の湿地帯に弥生遺跡が多く出てきています。

阪急南茨木駅周辺の約１キロ四方に及ぶ東奈良遺跡がその１つで、同遺跡は弥生時代前期から鎌倉時代に及んでいます。この一帯の町名には水に関わるものが多くあります。水尾、玉水、沢良宜、真砂、葦原、島、玉島、平田、大池、舟木、中津、沢池、穂積、畑田、三島、西河原、高浜、橋の内などです。

弥生時代も後期に入ると、太田、総持寺、郡、馬場、溝咋、中条などから、稲の穂刈りに使われた石包丁などの石器、鍬や脱穀に使用された竪杵の木器、湿地に向かって杭を打ち込んだ溝の遺構、居住地を示す井戸や柱穴などが発見され、低湿地を追って農耕（稲作）

をすすめた当時の人々の豊富な生活資料が確認されており、市内の沖積地のほぼ全域に人々が居住していたことがうかがえます。

茨木川や安威川を利用して瀬戸内海と容易に結ばれる茨木の地は交通の要地であったこと。またこれほどの技術集団を支える生産力を生み出す沖積平野が広がっていたこと。さらに農耕・鋳造といった社会的分業を統率する体制が必要ですが、おそらく地域集団をまとめる首長が選ばれていたであろうこと。

茨木には大陸の先進文化をいち早く吸収し、それを維持する経済力と組織力が形成されていたと思われます。首長のもとに生産、交易のほか他の地域集団との戦争もあり、それらを統合して茨木の集団はひとつの政治的集団として成長していったものと考えられるのです。

耶馬台国は「大和安威（やまとあい⇒やまたい）」・茨木にあったとの説があるくらい茨木の高い文化と政治勢力は大和朝廷（国家）の形成に大きな役割を果たしていたのです。

④稲作農耕文化の発展の歴史

稲作農耕文化は、地方豪族の政権の移り変わりと同時に、現人神（アラヒトガミ）といわれる天皇制が確立されていく中で、私有地、私有民の形で発展していきました。

筑紫の国造磐井（クニノミヤツコイワイ）が反乱を起こし（527 年）、物部鹿鹿火（モノノベノアラカイ）が磐井を亡ぼし（528 年）、587 年には蘇我馬子らが物部氏を亡ぼし政権を掌握します。

６世紀末に即位した最初の女帝推古天皇は、甥の聖徳太子を摂政とし、馬子とともに政治をとらせました。推古朝において内政・外交両面で政治が刷新され、律令体制の整備がはかられました。天皇権力の強化を図る聖徳太子の諸政策が、その死によって中途

半端に終わると（622 年）、いままで太子と妥協してきた蘇我氏は横暴をきわめます（蘇我入鹿が山背大兄王＝聖徳太子の王子を殺す）。しかし、ここに蘇我氏の横暴を憤る中臣鎌足（ナカトミノカマタリ）がいました。鎌足は中大兄皇子（ナカノオオエノオウジ）（のちの天智天皇）と秘策を練り蘇我氏を亡ぼし、大化の改新を断行したのです（645 年）。

⑤有力者の私有地の拡大と荘園の発達

中大兄皇子（ナカノオオエノオウジ）（のちの天智天皇）と中臣鎌足（ナカトミノカマタリ）（藤原鎌足）が蘇我入鹿を亡ぼし、大化の改新（645 年）が始まります。

652（白雉３）年、公地公民とし全国の人民を戸籍に登録し、それをもとに口分田（クブンデン）を班給する班田収授法［男は２段（反）、女にはその２×２/ ３段（反）］が施行されますが、農民の負担は重く（収穫は低く租、兵役、雑役などの調庸に苦しめられ）、耕作を捨てて浮浪・逃亡する者も出て疲弊していきました。

そして、耕地が不足して来たため 722（養老６）年、時の政府は（藤原不比等の四子優勢の頃）、100 万町歩の開墾の計画を立てます（国家が公的な労働力を使い、食料の支給と用具の貸与によって開墾を図りました）。

さらに、723（養老７）年、三世一身の法（サンゼイッシンノホウ）を制定しました。これは、新たに溝池（かんがい設備）を造って開墾した者は、三世（子、孫、ひ孫）まで、旧い溝池を利用して開墾した本人には一代限り、その墾田を公収しないという法令です。

更に、743（天平 15）年、墾田永年私財法が発令されました。三世一身の法での収公期限ははずされ、墾田の所有の面積は位階によって制限が定められました（一品「いっぽん」・一位の 500 町歩から、初位（ソイ）庶人の 10 町歩迄）。

749（天平勝宝１）年、寺院に自らの開墾が許され、制限額は

東大寺の 4,000 町歩から、100 町歩までの諸段階がありました。ここにきて墾田の所有は貴族や寺院、地方の豪族、少数の富裕農民によって進められ、逃亡した農民や浮浪人はこれら有力者の受け皿となって、囲い込み地の開墾やその耕作に使われるようになり、貧富の差はますます大きくなっていきました。この弊害をおさえる為、765（天平神護１）年、墾田永年私財法の加墾禁止令が出たこともありましたが、772 年これもすぐに廃止され、有力者による墾田の所有はいよいよ進み、荘園が成立する芽と条件がこのころ整ってきたといえます。社寺や有力貴族は班田農民や浮浪人の労働力を集めて、すぐれた鉄製農具を使わせ、財力にまかせて開墾をすすめました。そしてこれらの墾田を経営する為、そこに倉庫や管理所を設けて「荘（ショウ）」とよびましたが、やがて荘を中心とする土地全体を、荘とか「荘園（ショウエン）」というようになりました。

北陸地方にあった東大寺の荘園では、その土地の郡司クラスの豪族が大量の稲を差し出して開墾の費用にあて、開墾後も荘長・墾田長（荘園の現地の管理者）として経営に参加し、耕作は近くに住む班田農民に小作させることで支えられました。これを「賃租経営」といいます。

一方、中央政府は財源を確保するため、公営田（クエイデン）・官田の制度を採用して、823（弘仁 14）年に、九州大宰府管内で、口分田や乗田（口分田の余り）のうちから良田を選んで公営田（班田農民に労賃・食料を支給して耕作させ、そこからの収入は、租や調･庸物を調達する代価にあてられる）を始めて設けています。

879（元慶 3）年には、畿内諸国に、4,000 町歩に及ぶ官田を設け、各官庁に分配されて、各官庁独自の財源となり、太政官や役人の俸給に当てられるようになったとあります。これは「官衙領荘園（カンガリョウショウエン）」といわれるものです（学研教科辞典：日本歴史より）。

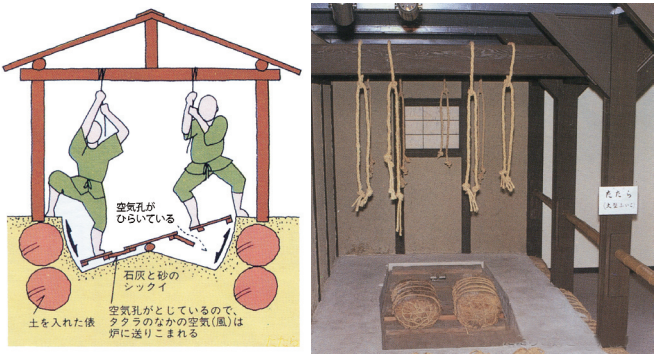
４、農地区画の歴史

片山重正

茨木市の南東部平田 1、2 丁目や玉島 1、2 丁目には条理区画に沿った畔道や側溝が残っています。畔道で区切られた水田は古代に区画された条里制を今に伝えるものです。茨木の水田が条理（奈良時代の土地区画）で区切られるようになるまでには、長い年月がかかっています。それは茨木が肥沃な土地であったこと、古墳の集積地であったことから読み取れます。つまり、茨木が肥沃な土地であったが故に、全国に先駆けた水田遺跡が発掘されました。

その水田跡は縄文後期遺跡の牟礼井堰（ムレイセキ）と名づけられました。農耕の初期、茨木の住民は安威川沿いの軟弱湿地を木製農具で耕し水田にしていました。軟弱湿地なので木製でも十分水田を開拓できました。その頃の遺跡として東奈良遺跡があります。東奈良遺跡は弥生前期（紀元前 400 ～ 500 年ごろ）のものと推定され、その埋土からは土偶や小銅鐸（鋳型が発掘されている）も出土しています。銅鐸は村の祭祀を執り行うものです。これらの遺跡や遺物は大規模な村が形成されていたことを語りかけています。

2 世紀後半になり、タタラ製鉄（砂鉄を炊いて鉄塊を精製する日本古来の特殊な製鉄技法）が始まると、農具の刃先には鉄を用いるようになりました。鉄製農具の使用により、今まで川沿いの軟弱湿地に限られていた田の開拓がより硬い地勢に拡大されていきました。また、鉄製用具は用水路の掘削を可能とし、水田は大幅に拡大されました。



たたらと鋳込み場の復元　東近江市歴史民俗資料館

農業生産力の向上は富の蓄積と労働人口の増加につながります。鉄製タガネ（金属等を切断するときに用いる工具）は石切を可能とし、各地の豪族は古墳を作り覇権を競い合いました。太田茶臼山古墳（チャウスヤマコフン）に見られるような巨大古墳は、その地方の生産力の大きさを示しています。村はやがて小規模な国へと展開していきます。小規模な国がそれぞれの覇を競いあった結果、墳墓は巨大化しました。この時代の古墳の数は力のあった豪族の数を示しています。近畿のなかでも茨木は古墳の集積地（三島古墳群）でした。

この頃の水田の区画はまだ整然と区画されていませんでした。茨木の水田が区画されようになったのは大化の改新の班田収授法以降です。班田収授法は、律令制度の整備とともに進められました。班田収授法は奈良時代初期から施行され、その基礎となる水田を区画し、位置をきめるために条里が決められました。その条里によって公田（クデン）が区画整理され、公民などに与えられました。これが公地公民の制度です。この条理による区画は大きく変更されることなく現代まで 1000 年以上も受け継がれてきました。

それまでは土地、農民は豪族に帰属していました。土地・農民は国へと移行し、土地は公有制になりました。しかし、その後この公有制は徐々に崩れてきました。より多くの収穫物（富の源）を得るために新田が開発されました。国は新田を開発・促進するために、私有制を認め（三世一身法から墾田永年私財法へ）ました。また、それは公地公民制と矛盾するものにならざるをえませんでした。

貴族・寺社は多くの新田を開発し、荘園へと発展していきました。また、農民が個人所有する土地は貴族・寺社へ寄進され、そこへ帰属するものとなっていきます。これら荘園は中世武家の興隆とともに、武力を持った武家へと移行し、権力も移っていきました。しかし、鎌倉・室町時代荘園領主の変遷はあるものの、大規模な新田の開発はなされませんでした。

戦国時代も豊臣秀吉の世となり、覇権が統一されるようになってきます。豊臣秀吉は太閤検地を行い、新しい小字名・等級・石高（標準生産高）・名請け人（検地帳の登録人、耕作権者、年貢負担義務者）等の農地区分を決めました。これによって新たな土地区画の基準が出来、石高制となりました。この石高制は江戸幕藩体制に引き継がれました。江戸時代になると農業技術、生産力とも飛躍し、各地に田畑の開墾が奨励されました。

茨木でも中穂積、泉原、佐保、清坂などで新田が開発されました。18 世中ごろ、泉原で村民とともに新田を開発した村田季武（ムラタスエタケ）が知られています。

農聖といわれた小西篤好（コニシアツヨシ）が「農業余話」を発行したのも同じ

地域のほぼ同時代でした。この頃、茨木は商品経済も発展し、天王寺や平野に次ぐ規模の賑わいがあり、山間部で寒天製造も始められました。寒天は昭和の後半まで地区特産品として大々的に作られていました。

以上が茨木の農地区画の変遷です。条里制によって決められた農地区画は戦後の茨木地方の航空写真にくっきりと残されていました。

戦後農地改革で小作人は自作農となりました。また、土地改良事業や土地基盤整備事業が進められるとともに、機械の導入もあいまって飛躍的に生産性はあがりました。しかし、戦後日本経済の高度成長は、茨木に大阪経済圏の衛星都市としての発展をもたらしています。この間、茨木では都市化・市街地化がすすみ、農地の休耕、耕作放棄地の増加が問題となっています。

参考文献

「新修 茨木市史 第八巻 資料編」茨木市史編纂委員会

「わがまち茨木 年代史編」茨木市・茨木市教育委員会　昭和 53 年３月発行

「淀川水農業水利史」淀川水農業水利史編纂委員会　昭和 58 年４月発行

５、班田収授と条理制

片山重正

藤原鎌足（フジワラカマタリ）は、茨木三島の地で新しい政治の秘策を練り、中大兄皇子（ナカノオオエノオウジ）とともに大化の改新を実行しました。この秘策というのは律令制度です。中国の律令制度を見習ったもので、その骨子の１つに班田収受制があります。

国家の土地班田を公民に与え、租として課税するようにしました。良民男子に二段、良民女子に１段 120 歩（男子の 2/3)、官戸・公奴婢・家人・私奴婢等へ口分田として、貴族へは正一位から従五位などの格位に対しては位田、太政大臣等の職能に対しては職田、また功田、賜田も業績などにより与えられました。

租としては、一段で２束（収穫の３％）であり、比較的軽いものでした。租は地方政庁である国衙（コクガ）に納入されました。

これ以外に中央政庁に納められたのが調・庸であり、むしろこちらのほうが公民にとって大きな負担となっていました。調は絹・布や土地の特産物を納めさせるものでした。庸は 10 日の歳役（サイエキ）でしたが、地方からの移動が大変なので庸布で代納しました。その代納分（有償ではあるが）として、畿内の班田農民は 50 日の強制的労働に徴用されました。

また、地方の国衙は租稲米だけでは財政をまかなえないので、公民から年 60 日以下の労働力で土木開発事業を行わせました。これ以外に税と同様に考えられたものに兵士役がありました。

これら律令の税制は労働で支払うものが非常に多く、公民にとって重い負担となりました。生産力が低い農業であれば、それだけ労働力を投入しなければならないのに、労働力が徴発さ

れ、班田農民は苦しい生活となっていました。

この律令制度は大宝律令（701年制定）で完成するわけですが、飢饉などにより公田を離れ、他郷に流れ課役を逃れる公民が増えてくるようになります。農民は逃げるのみでなく、貴族・寺社のもとに入り、そこで農に従事するようになります。

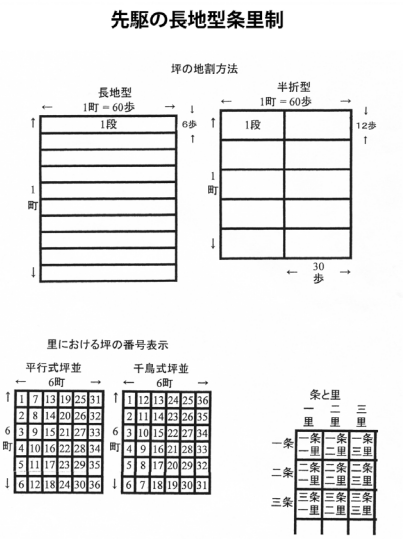
米軍撮影の空中写真（昭和 23 年）

律令政府は、班田（公地）の拡張を図るため弱い制限つきの土地私有を認めました。723 年の三世一身法、743 年の墾田永年私財法がそれで、これによって経営拡大を強めた貴族や地方豪族らは土地の私有を拡大していきました。

政府は貴族・社寺らの大土地所有を制限する一方、政府自らが大規模な開発（879 年）と大土地所有に乗り出しました。このことは律令国家の支配原理（公地公民制）の変更であり、律令制から次の時代の（私有）荘園制へと移行することになりました。

班田収授法は律令制の根幹ですが、この運用には土地の区画と、そこで耕作する者を確定しなければなりません。この土地区画制度が条里制です。１町 =60 歩（109 m）四方が坪と呼ばれて基本の単位でした。この１町で農地を区分しました。１町は 10 等分され、そのひとつを１段といいました。さらに、６町四方の正方形

を「里」と呼び、里の横列（東西）を条、縦列を里（南北）と呼びました。これを地割といい、管理区画とし、条理呼称として使いました。条と里で位置が特定できるからです。例えば、総持寺村は十二条八五里、十二条八里、二条五里、三条八里、三条六里、西河原村は四条五里といったように決めました。坪は旧小字名に残っており、現在の玉島町「大字十一」は二条八里十一坪に当たります。



地割には正方形と長方形があります。大宝令の田令によれば、正方形の小区画を分けると半切型地割になります。ところが、茨木は北が山地で南が平野ですが、山地は棚田になっていて変形が多いので正方形の地割が難しく、長方形の地割（長地型地割）でないと不都合でした。この茨木では長方形の地割が最も早く奈良時代の中期に開発されました。

班田収受法は奈良時代初期ですが、当初は条里制がありませんでした。池や灌漑溝の築営、改修を行うには個人とか小集団では難しく、大きな権力を持つ政府が土地を整然と区画するしか出来ませんでした。奈良時代中期になって初めて、この条里制が利用されました。そして、これは農地区画の歴史にあるがごとくです。江戸時代には田畑の小規模区画に繋がる田畑永代売買禁止令に引き継がれます。田分者という言葉もここから生

まれています。そしてこの条理区画は戦後の茨木市内航空写真にも見ることが出来ます。

　茨木は食と農地を非常に大切にする風土を早くからもっていた土地なのです。

参考文献

「茨木市史」 茨木市史編纂委員会

「わがまち茨木」 茨木市・茨木市教育委員会

「淀川水農業水利史」 淀川水農業水利史編集委員会

６、新田開発と農民教育・村田季武（ムラタスエタケ）

片山重正

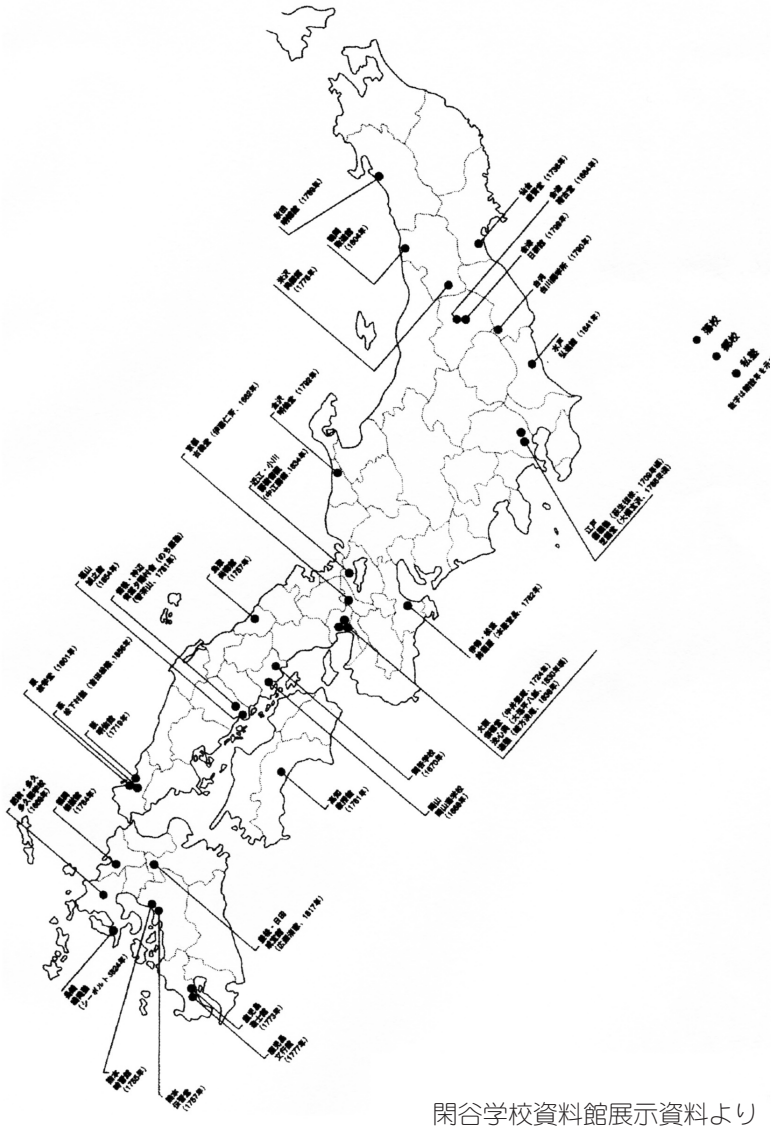
村田季武は江戸中期に泉原の「盈科書院（エイカショイン）」を開設した人として知られています。村田季武はその運営のために同時に新田をも開発しました。その活動は庄屋として村民のためのもので、経世済民を意図したものでした。

江戸時代、諸藩は競って藩政改革等のため藩校を作り、新田開発、殖産に取り組みました。水戸藩の弘道館、長州藩の明倫館など諸藩の数に匹敵するほどの藩校が作られました。また、官立でない私塾も江戸、京大阪をはじめ全国に作られました。日本史に多くの人材を輩出した咸宜園（カイギエン）（大分・廣瀬淡窓＝ひろせたんそう）、鳴滝塾（長崎・シーボルト）、松下村塾（山口・吉田松陰）、適塾（大阪・緒方洪庵）などはよく知られています。当時、茨木は徳川幕府直轄の地であり、他藩でみられたような藩政改革はありませんでした。その茨木で村田季武は農民のための教育と新田開発に取り組みました。

1768（明和５）年、村田季武はこの泉原村大原山に、泉原村民とともに村民のための私塾「盈科書院」を作りました。「学問も水の流れと同様に順を追って進むべきである」という孟子のたとえから「盈科書院」と命名されました。

「盈科書院」には、多くの漢詩文、歴史書、医学書などがそろえられ、村人たちに開放され、本などは自由に読むことが出来たといわれています。また、季武はこの書院に子弟を集めて無料で学問を教授していました。村民には門人らとともに無料の医療も施しました。彼の学問は地域の人々の生命を守り、生活

全国の主な藩校・郷校・私塾



閑谷学校資料館展示資料より

を高める実際的なものでした。季武は庄屋として村民のための経世済民を考え実行していたのです。

村田季武は塾を運営するために、１町３反余の新田（泉原新田）を開拓しました。村田季武は高槻藩主より新田開拓の許可をとり、３年の歳月を経て完成させました。水田の土質を改善するために、高槻城の泥を持ち帰って水田に入れたとも伝えられています。人々の協力を得た新田には、水利目的で３段余の池も増設されました。「だんだん池」の名で構築され、地区一帯で利用されました。村田季武はこのほかの地域でも、尼崎に 700 石の新田を、佐保村馬場に林檎畑を造成したりしました。

このように彼は、塾、教育、医療や農地の開拓とあらゆる方面で、村のため、農民のためにと自分の力を注いだ偉大な先覚者でありました。後述の小西篤好の農業余話が発行されたのもこのような背景を持った同時代同地域からでした。

江戸中期幕藩体制において、このような民のために貢献するという陽明学に基づいた考えがありました。村田季武は、その考えを農民の立場から切り開いたものといえるのではないでしょうか。

明治期には、この地区出身の大植啓治が住民の自治を勧め、「勧農道場」で農業の指導を行ったことが知られています。

泉原新田

「盈科書院」は、寛政２（1790）年に村田季武が他界して間もなく廃絶しましたが、その水田と考え方はいまも茨木の市民によって守リ・育てられ、「泉原の郷」として受け継がれ豊かな実りを約束しています。この事例は自給自足を基本に置くキューバの都市農業（ソ連邦の崩壊とアメリカからの経済封鎖による食料自給破綻からの自給自足のための農業政策）やドイツのクラインガルテン（19 世紀以来の市民農園）を連想させます。食料自給率が問題視されている現在、われわれは茨木の食と農の未来につながる田畑を泉原新田に見ることが出来ます。

参考文献

「淀川水農業水利史」淀川水農業水利史編集委員会編　昭和 53 年 4 月発行
「清渓村史」創立 115 周年記念事業総務委員会編纂　昭和 62 年 12 月発行
「わがまち茨木　人物編」茨木市教育委員会
「近世藩制・藩校大事典」大石学 編
「200 万都市が有機野菜で自給できるわけ」吉田太郎著
「ドイツ　家庭菜園」日本クラインガルテン研究会
「生産緑地制度と地域グリーンシステム」『日本の農　195 号』（1995）
農政調査委員会

7、農業技術の開発・小西篤好の「農業余話」

赤松民男

農業が本格的な学問研究の対象として、取り上げられるようになったのは、1696（元禄９）年、宮崎安貞（ミヤザキヤスサダ）（安芸の人）が、農業に必要なあらゆる実際的知識をまとめた「農業全書」を出したことからはじまります。1767（明和４）年生まれの小西篤好も、この書を読んで触発されたに違いありません。

篤好翁から数えて七代目小西篤氏ご本人から、小西家の菩提寺・教圓寺のご住職で篤好研究の第一人者である、加藤速了氏をご紹介いただきました。訪ないますと誠に快くお迎え下さり、２時間半にわたって、熱く篤好を語って下さいました（氏は，40 年前 36 歳のとき、「市制 20 周年・茨木市史編纂委員」をされておりました）。

以下に加藤速了氏の卓話を要約いたします。

１）篤好研究をライフワークとしているが，いまだ成就していません。

篤好は不思議な人、残された資料が殆どないのです（全国の足跡を訪ねて資料を探しましたが）。大正３（1914）年、この村（当時は清渓村字馬場）が大火により、古文書を含むことごとくが焼失したからでもあります。

２）篤好は 1767（明和４）年、佐保村字馬場の庄屋の家に生まれました。通称を藤右衛門といい、幼少から学問を

好んで、わずか 15 歳のとき、京都に出て前後 10 年間勉学に励んだ後帰村しています。その後は自分で農作物の試験場を開いて、実際的な農業の研究育成に没頭します。また、時々各地に出かけてはその村の篤農家を訪ねて研修を重ね、その記録などを詳しく書きとめていきました。

京都に遊学のころ、二条蔵奉行・小嶋祐介と親交を結んでいます。

のちになって、30 余年の農業研究の成果をまとめて出版すべく、平田篤胤・鉄胤（養子・のちの鉄真）父子の平田塾に入門するについては、小嶋祐介の紹介があったと思われます。

3）文政９（1826）年６月２１日、国学者、平田篤胤・鉄胤（養子・のちの鉄真）父子の門・気吹舎（イブキノヤ）を訪ねて農業の実験談を大いに語り、その縁で父子の校訂を受けて、文政 11（1828）年１月、「農業余話」上下２巻を初出版したのです。当時、国学者・平田塾の門弟は 800 人以上おり、全国に学んだ門人は延べ 4,000 人を超える大集団でした。

4）「農聖・小西篤好」の謂れは、平田篤胤が詠んだ歌にあります。

“くさぐさの聖（ヒジリ）なにせん斎庭穂（ユニワホ）（稲穂のこと）を八束（ヤツカ）に作る田人（タビト）しあれば”と「農業余話」の加筆を終えた草稿をみて、平田篤胤は、篤好を農聖と称えて詠みました。

5）加藤速了氏は篤好の現代的意義を次のように述べられました。

①アグリというのは耕すの意。農業は正にアグリカルチャーです。
②篤好の「貴穀賤金（キコクセンキン）」の思想こそ現代が心すべきこと。
③国は、もともと農業立国であるべきなのです。
五穀（昔は、稲、麦、栗、きび、ひえ、をさす）が実って蔵に満ち、漁（すなどり）が豊かで、平和と安全が確保されて、美しい自然が循環していく、心豊かに、万物が喜びにあふれるような、国にする為には農業が基本です。
＊自給率 39％の日本、アメリカのグローバル社会と称して、マネーゲームの行き着くところ、未曾有の世界恐慌を生じさせて、破綻した今の社会は、猛省、直ぐにも、構造変革を求められています。
④私利私欲ではなく、人々の為、子孫の為に働く生き方に学ばなければならない！と。

さて、小西篤氏から“篤好（通称　藤右衛門）の父は、周造といい、母「かん」は、村田源兵衛の娘”で、目垣村から嫁して来ていると系譜を教えていただきました。

加藤速了氏の著には、「目垣村、村田源兵衛の孫に当たる」と記されています。

そうか、目垣村の豪農の出の村田季武と、佐保村の庄屋の小西篤好は姻戚関係にある、農における２人の偉人であることが分かりました（村田季武は、1721 年・享保６年生まれで、46 歳の差がありますので伯父・甥の間柄ではないでしょうか？）。

当時、［農業余話」の出版はたちまち世間から好評をもって迎えられ、江戸の戯作者・山東京山によって、草双紙（絵入りの読

もの）「豊年百姓鏡万作おどり」が著されて、一世を風靡しました。

篤好の名声が高くなるにつれて、各地から教えを乞う人々が多くなり、筑後柳川藩、肥後平戸藩、丹後宮津藩まで出向いて、講習を行っています。「農業余話」の内容については、上巻では、先ず農業には学問的研究が必要であることを説き、特に，米について力説記述しています。苗代・農具・品種・肥料・稲病（イモチビョウ）などについて、独自の意見をも交えて述べています。

下巻では綿の記述について詳しく、その播種期・量・選種・施肥等を説明しています。そのほか、野菜では、大根・大豆・小豆・茄子・瓜とか、果樹では接木・挿木の術や、梅・柿・蜜柑などについて、樹木では杉・竹などについて記しているほか、牛馬などの家畜管理にまで言及しています。

篤好は、実生活の上でも佐保村の庄屋として村人をよく指導し、土地の開発を積極的に進めたり、天保４（1833）年の大飢饉に際しては私財を投げ出して村民の救済に尽力しました。

天保８（1837）年２月、天保大飢饉の終りの年 71 歳にて病没しました（法名　釈誓淳）。

明治 38 年、三島郡農会は、佐保川の馬場大橋のほとりに立派な記念碑を建てて、篤好の功績を顕彰しています。

「農業余話」の序（文政 10 年４月　鴻谷茂潤　誌）

「そもそも穀というものは、万民が天を仰いで頼りとするところ。これを得れば、 生き、これを失えば死ぬ、ということで、天下にこれ程大事なものはない。それなのに今の世の人のこれに対する評価は、金玉に及ばない。こんな間違った考え方があろうか。どうしてこれ（穀）をのばし育

てて、生きとげさせる方法を考えないのか」
「小西篤好君は、摂津の国佐保村の庄屋である。ずいぶん変ったお人で金玉などどこがよくて有難いかわからぬと言い、世の中で貴いのはただ五穀のみと言う。かつ　この人は、幼少より田圃の間に成人し、農事に心を寄せること久しい。先年、近頃の農家の多くが農の業にくわしくなく、百穀を成熟に至らしめ得ないことを憂えて　“農業余話”一篇を著したが、百穀樹芸の法を説くことまことに至れりつくせりである。骨身を惜しまず、工夫をこらさないで出来ることではない。ああ、百穀を完全に成熟させ、中途で枯死しないようにするものは正にこの書である」

また、小西篤好は、宇宙森羅万象のあり方を説く中国古代哲学「陰陽五行説」にも精通していて、これを用いて農業を科学研究している点も特筆すべきことです。

小西篤好の石碑

陰陽の二気と五行（木、火、土、金、水）の、この２つの組み合わせにより万物は、生成化育し、輪廻転生（循環）する。実例をもって、害虫の発生の仕組みと駆除方法、播種の時期と苗床の作り方、肥料のやりすぎは害など適切に説かれています。

（草木の雌雄の見分け方などについて、演繹的誤謬も指摘されますが、この時代の学問的限界ではなかったかと、好意的に今の人々にも理解されているようです）

８、台地に水を引いた畑中権内
赤松民男

畑中権内は、1688 年～ 1709 年までの 21 年間（徳川綱吉の時代）、車作（クルマツクリムラ）村の庄屋を務めていました。

車作一帯は、茨木地方を北から南へ流れる安威川を下に見る台地にあり、水利に恵まれなかったため、畑地が殆どでした。

畑中権内は、これの水田化を図り、車作一帯の農民を貧しさから救おうと考え、安威川支流の下音羽川の水を引く２.５キロの水路を掘ることにしました。高槻藩に水路を掘るための願いを出しましたが、高槻藩は下音羽川の水を上流で横に取り入れることに、安威川下流域の農民が反対することを恐れて許可しませんでした。

村人には迷惑は掛けられん！　無許可で一人で掘ることを決意します。ただし、測量には大人数の村人の協力を得る必要がありました。村人の提灯測量の協力を得て、闇夜に下音羽川の方から順番に、提灯に灯をつけて山の中に並び、向かいの山から高い低いを合図する提灯測量を行いました。

測量設計が終わると、権内は一人で掘り始めました。固い岩にであうとなかなか進みません。やっと掘ったところには二つ割にした竹を並べ、水の流れ具合を確かめます。出来上がったところを、しっくいで固め、見つからないように枯草で隠していきます。

このように、ひそかに工事をすすめ、1704 年、完成させたといわれます。

一帯の米作りが一気に進み人々の喜びは大変なものでした。畑中権内は「水路開拓の恩人」として村人の敬愛をあつめました。

写真、上から「権内水路」、「権内水路取水口」

完成のあと、咎めを受けて、お縄を頂戴しますが、村人達の嘆願により、町奉行も藩も幕府も直ぐにご赦免となりました。

平成 19（2007）年に大改修が行われ、現在の「深山水路（ミヤマスイロ）」又の名「権内水路」は様変わりしています。水路はコンクリートで固められ、取水口までの 1.6 キロの道は舗装され、谷側に柵も設けられています。

それはさておき、権内水路には美しい水が流れ、今も昔に倍して人々はその恩恵に浴しています。

９、自給の治村興農の先駆者・大植啓治
赤松民男

大植啓治は、茨木市上音羽 105 番地で、1882（明治 15）年、父清登の長男として生まれています。親子２代にわたって、郷土旧見山村を中心に、治村興農の先覚者として、活躍された方です。当時の安井大阪府知事（のちに文部大臣、内務大臣）と親しく、陰に国政にも参画され、助言される傑物であったということです。しかし、啓治翁は生前見山村村会議員の肩書きのみで、他のいかなる地位も欲も望まず「縁の下の力持ち」的生き方を貫いた人でした。

戦時中、向こう三軒両隣の、五人組自治組織を提唱し、その実践においては、やさしく、きびしく、上下のへだてなく、「お互いの義務、助け合い、徳義と礼儀、村の規約を守ること、自立厚生」の５つの精神を唱えて根付かせました。

「とんとん　とんからりと　隣組、
格子をあければ　顔なじみ
まわして　ちょうだい回覧板、
教えられたり　教えたり」

このような戦中の歌が、懐かしくまたは思い出として蘇ってくる人は、多いのではないでしょうか！

自治・共同・奉仕の精神が涵養され、納税実績は上がり、公共事業は画期的に挙がったといわれます。また、健康厚生行政

に関わる功績としては、当時、回虫便虫は殆どの人が保有しており、生野菜の虫を撲滅させる為、３槽式コンクリート造便槽を考案、設置補助金制度も設けて一挙に普及させました。見山の清浄野菜は、飛ぶように売れたといいます。

村民全部が無病息災の理想郷建設のため見山村国民健康保険組合を創設し、組織化しました。また昭和 13 年、知事の許可を得て診療所もつくりました。

見山村は茨木市街地から 10 ｋｍの山村であり、米の裏作の麦、冬場の薪炭焼き、寒天製造の奨励など貧困脱出の施策とその研修を村を挙げて推し進めています。翁の力により建てられた「見山勧農道場」は今も活躍しています。

アイディアに満ちた政治手腕とその実行力には目を見張るものがあります。

昭和 17 年２月６日病魔に冒され、万人に惜しまれて 60 歳の生涯を閉じました。

下音羽の代々庄屋を営んでいた井上一（イノウエハジメ）氏も薫陶を受けたと、翁を偲んで、話して下さいました。昭和 60 年まで寒天作りを親から受け継いで、茨木においても、工業化・機械化・宅地化・都市化という日本経済の高度成長の波が押し寄せる中、最後まで寒天作りを残そうと頑張った方です。今もご健在です。

ここまで、偉人伝を取材させていただきましたが、私の胸に残ったのは、かかる風土の元で、篤農の方がわんさ育ち居られて、「農業が、村定と伝統文化と北摂の山々が」美しく守られているんだという事実です。

参考文献

「わたしたちの茨木・人物編」
「茨木の歴史」 茨木市教育委員会
「劇：畑中権内」 忍頂寺小学校教職員（忍頂寺小学校児童）、作曲・平島勉

10、灌漑用水を訪ねる旅

佐藤眞生

茨木は北が山地で南が平地、土地は肥沃だけれども灌漑用水には苦労の多い土地柄です。高地の丘陵へ水を引く水路、河川から田畑へ水を引く堰、雨水を蓄える灌漑池などさまざまな努力が積み重ねられてきました。小さい池は無数といわれていますが、300 坪以上の池だけでも 130 以上あったようです。その一端を訪ねる旅です。

阪急茨木市駅集合→バスで車作へ→徒歩で権内水路へ→バスで長ヶ橋へ戻り→一ノ井堰→五社井堰→安威大池→耳原大池→郡の池（新池・下ノ池・中ノ池・錨ヶ池（イカリガイケ））→松沢池→バスで阪急茨木市駅へ。

権内水路

車作は安威川から 50 ～ 70 メートル上の丘陵地にある。畑作はできるが、稲作はできない。庄屋の畑中権内は稲作を実現するために車作より標高で 30 メートル上を流れる下音羽川から村へ水路を引く計画を立てた。下流の村の反対や高槻代官所への投獄などの苦労の末、20 年の年月を費やし、私財を投げ打って、約 2.5 キロにわたる灌漑水路を完成させた。

一ノ井堰

長ヶ橋の 100 メートル下流の堰。安威川右岸の桑原・安威・十日市・耳原・西河原・田中・倍賀・上中条・下中条・五日市・畑田の 11 ヶ村、189 町歩（187ha）を潤す。石高 2847 石に貢献。

一ノ井堰

五社井堰

五社井堰

長ヶ橋の 200 メートル下流の堰。安威川左岸の太田・総持寺・中城・宮田・赤大路・富田・西五百住の 7 ヶ村、211 町歩を潤す。石高 3130 石に貢献。

一ノ井堰と五社井堰との間には上流と下流の利害が対立し、1625 年・1709 年・1727 年・1809 年～ 1824 年と度々の水争いが起こった。一ノ井堰が石組みに土塗りをして水漏れを止めると下流の村々へ水がいかなくなり、争いが起こった。五社井堰側は毎年盆と正月に一ノ井堰側へ挨拶まわりをしていた。大雨や渇水期には両者立会いで一ノ井堰の樋門を全閉（ゼンピ）したり、半閉（ハンピ）したりして、上流と下流の調整がはかられた。

耳原大池

弊池（テクライケ）、大池、ドーナツ池などの別名がある。周囲 1 キロ、17,227 ㎡ (5,211 坪) ある。一ノ井堰や耳原堰から引水していた。

郡の池

郡山は丘陵、水がなかった。そのため、米作の灌漑用水を確保するために、多くの溜池が造られた。その数 100 を越えてい

たといわれる。

松沢池

1828 年、上穂積・中穂積・下穂積・倍賀の４ヶ村が、２年がかりで造った。米作の灌漑だけでなく、昭和 12 年には簡易水道の水源になっている。

新池（写真・左上）、下池（写真・右上）
中池（写真・右下）、松沢池（写真・左下）

第６章
町民主導の先駆・茨木

大橋豪之／大野幾子
佐藤眞生

１、茨木というまちの性格

大橋豪之

茨木は城下町だった後、在郷町（ザイゴウマチ）になったといわれています。

城下町は、城が中心になり、その石垣と濠の外側に発達するまちです。守るべきは城であり、城主です。確かに茨木には大小 20 の城や砦がありましたが、本来の意味で城下町といえるかどうか疑問です。

在郷町は、農村部に成立した商工業集落のことをいいます。茨木は城がなくなった後、城跡を田畑に開墾し、人々の生活は農耕と一体であり、商人といっても地主や小作をしながら小商いをする者が殆どでした。茨木が在郷町だったとする見方にも少し無理があるようです。

北が山地で南が低湿地という標高差のある、南北に長い茨木のまち全体を、そんなに単純に規定するのは無理だと思います。

まちを、どのように性格づけすればいいのか、説得力のある見方があります。表「集住形式と集落立地」をごらんください。地形的にどこにまちができるか、そしてそこでどんな住み方をするか、これがまちの性格を決めているように思います。

この表をもとにして、明治 22 年の茨木の 13 地域を分析してみました。そうすると、茨木全体を一律に論じることが大変難しいことがわかります。13 の地域は、それぞれに性格を異にします。縄文時代から室町時代くらいまでは、全体としての特徴の指摘はできそうですが、江戸時代以降は地域によって、集落立地と集住形式で独特なものがあります。

集住形式と集落立地「集落」･日本建築学会編･都市文化社

	山頂山腹	谷あい	台地平原	ふもと	低　地	海　辺
散　居	散居集落	散在集落	開拓集落	扇状集落	散居集落	
列　居	棚状集落	谷筋集落	街道村	山裾集落	輪中集落	砂丘集落
集　居		谷奥集落		典型集落	環濠集落	漁業集落

（注）マス目の表示は代表的なものを取り上げた。

茨木の城　「わがまち茨木　城郭編」

名　　称	所　在　地	築城時期	主な城主	形　状
茨木城	片桐町～上泉町	15世紀以前	中川、片桐	平城
太田城	太田1丁目	12世紀末	太田太郎頼基	平城
耳原城	耳原2～3丁目	1575年頃	明智光秀	墨
福井城	東福井	1334年	楠木正成	山城
郡山城	郡山	1501年	郡兵太夫正信	平城
穂積城	中穂積～見付山			墨
目垣城	目垣		溝咋氏？	平城
沢良宜城	美沢町	1349年	藤井三位	平城
水尾城	水尾	15～16世紀	平尾孫左衛門	平城
三宅城	丑寅～蔵垣内	1504年	三宅出羽守国政	平城
安威城	安威2丁目	1504年	安威孫四郎	居館
安威砦	安威3丁目	1521年～	安威氏	砦
佐保城	佐保庄ノ本		佐保氏	砦
佐保栗栖山城	佐保	戦国時代？		山城
泉原城	泉原	1336年	泉原氏	砦
宿久城	宿久庄	戦国時代？	宿久氏	郭
清水城	清水	中世		居館
西河原砦	西河原	1532年	香西与四郎	砦
総持寺砦	総持寺	1578年	織田信長	砦
池上砦	中総持寺町			館

茨木は、歴史的にみると、旧石器時代から縄文時代は、自給自足の生活適地だったといえます。

弥生時代から古墳時代までは、神器の先進地として工房地域でした。

奈良時代から室町時代くらいまでは水路も陸路も交通の要衝として機能する街道村であり、同時に聖・浄土真宗・キリシタンなどが集結する庶民の聖地でした。

楠木正成が福井城築城を手がけた 1334 年から、一国一城令によって茨木城が取り壊されるまでの 280 年は城や砦が 20 もあり（表「茨木の城」参照)、城下町ともいえますが、戦いの戦略拠点でした。

明治以降は在郷町的な要素を持ちながら、大阪の衛星都市として、西近畿の流通集積地としての性格を持っています。

さて、表「明治 22 年町村制施行による茨木の村」をごらんください。

城下町から在郷町へという指摘は、茨木についてだけはいえ

明治22（1889）年町村制施行による茨木の村

地域	集落立地	集住形式	神社仏閣	まちの性格
茨木	平野部	集居	茨木神社、梅林寺ほか7寺	城下町(1334)→在郷町(1618)
三島	平野部	列状の街村	総持寺、磯良神社	門前町、交通の要衝
安威	小台地	列状の街村	安威神社、大念寺	街道村
福井	台地	列状の街村	新屋神社、真龍寺、古墳	街道村、街道と河川の合流点
溝咋	低湿地	散居集落	溝咋神社、仏照寺	門前町
宮島	低湿地	輪中集落	光善寺	街道村（枝切･妙見）
豊川	小台地	列状の街村	神社群	宿場町（椿本陣）
春日	丘陵、池	列状の街村	神社群（春日神社）	街道村
三宅	丘陵､低湿地	集居	井於神社	街道村
玉櫛	低湿地	堤防集落	佐奈部･佐和良義神社	堤防集落､門前町
石河	丘陵	列状の街村	大門寺･地福寺	参詣宿場町
見山	山間地	散居集落	忍頂寺、宝池寺	山村
清渓	山間地	散居集落	神社仏閣群	山村

そうです。しかし､他の 12 の村々はいくつかに分かれます。三島･溝咋・玉櫛は門前町の性格が強く、豊川・石河は宿場町の様相を呈しています。そして、安威・福井・宮島・春日・三宅の村々は、18 の街道と 15 の河川が交錯する街道村としての性格を持っています。見山と清渓は山村です。こうしてみると、茨木はさまざまな要素を持った複合的なまちだといえます。

明治・大正・昭和、そして平成に至る現代は、就業人口からみると第三次産業地域（平成 17 年 74%）であり、産業構造からみると卸売産業地域（平成 19 年 8387 億円・51%）になっています。さらに、住宅の所有構造からみると、持ち家比率が 51%、借家比率が 46%で、茨木が終の棲家という人々と仮住まいの人々は半々というところです。大阪の衛星都市といってもいいでしょう。

2、共同体としてのまとまり
佐藤眞生

日本で地域共同体が機能していたのは、昭和 40（1965）年までです。それ以降、村は崩壊して殆どの人々が村を出てサラリーマンになってしまいました。ですから、日本の地域共同体のことはそれ以前の時代、とりわけ中世に学ぶしかありません。中世という時代は、朝廷や幕府、領主や豪族の支配下にあっても、したたかな町民主導の生活がありました。そのありようをみていきましょう。

① 組織

村は、集住形式によって、ちらばって住んでいたり（散居）、列に並んで住んでいたり（列居）、密集して住んでいたりします（集居）。それで、村の中はいくつかの部落や集落に分かれます。部落や集落はもっと細かく垣内（カイト・カイチ）という 10 軒から 20 軒くらいの隣組に分かれます。垣内が寺の檀家や神社の氏子の構成単位になっています。そして、寄り合いや講や同行（ドウギョウ）や共同作業の単位にもなっています。この垣内はさらに組や班に細分されます。呼び方はほかにもあるようですが、大体こんな組織になっています。

組織には役職がありますが、総代や部落長がおり、当屋（トヤ・トウヤ）という触れ役・世話役・共有物管理者がいました。当屋は 6 ヶ月から 1 年交代の当番です。村によっては専門の者を雇っていたところもありました。彼らはアルキサンとか、ムラドコと呼ばれていました。

このような地縁による組織のほかに、株というような同族的集団があり、先祖を同じくする家をイットウと呼んでいました。同族ではありませんが、特につきあいが深い家をイッケといったりしています。

性別や年齢別の組織もありました。男性の組織には、子供中・30 歳までの長男対象の若中・30 歳以上の中老がありました。女性については、15 歳以上を対象にした処女会がありました。これらの組織では、社会教育から性教育までが行われていました。

そのほかに特別な組織としては、村の共有財産を管理する「共有財産管理会」や、農林業に関連した「実行組合」がありました。これらの組織は現在も機能しています。

② 村掟

村定（ムラサダメ）、町掟、惣掟などともいわれますが、これは地縁共同体の内部規律です。いうならば、生活規範です。鎌倉中期に萌芽がみられ、16 世紀以降に畿内を中心に一般化しました。

村掟の内容は、村人の日常生活に関するもの、神社や寺院に関するもの、それに商人に関するものがありますが、ここでは村人の日常生活に関するものをみてみましょう。これらは、村によってかなり特徴があり、普遍的なものではありません。いくつかの事例を取り上げてみましょう。

- ○ 寄り合いに二度欠席すると 50 文の罰金。
- ○ 寄り合いの塩・味噌の用意は神主が行い、費用は村が支出する。
- ○ 寄り合いの薪炭は村の分を焚く。

○ 共同作業に参加できない場合には、出不足金（不参料）を納める。
○ 村の共有林から無断で採取すると 500 文の罰金。
○ 入会山林の桑の木を採取する者は 100 文を払う。
○ 村有林で青木と葉を切り取った者は、村人なら村からはずす。村人でない者は追放する。
○ 村有地と私有地の境界紛争は、金銭で解決する。
○ 入会山林の初生りの柿は平等に分ける。
○ 村の賄（ヘツイ）のために納められた米は、村で収取・保管するが、その中から５升を神主に渡す。
○ 村から借り受けた家を村人以外に又貸ししてはいけない。
○ 家を二つに分割してはいけない。
○ 家を売却したら売価の 100 分の３を村へ納める。違反すると宮座から排除する。
○ 家を売却したらその売価を公表しなければならない。違反すると譴責を受ける。
○ 家を造築するときの大工への硯酒（ケンスイ）は３文までとする。
○ 村人以外の者を村に居住させるときは、村人が身元保証人にならなければならない。
○ ７歳を越えて村人の養子となった男子は、宮座に加入できない。
○ 犬を飼ってはならない……人間の食糧を確保するため、人間に対する危害を防ぐため。
○ 勧進を名目とする、正体不明の頼母子講の仲介をしてはならない。

（注）村人は、本座衆・老人（オトナ）と呼ばれる人々、新座衆と呼ばれる人々、村人でない者に分けられていた。本座衆と新座衆が村人であり、村掟

や村の取り決めを行う宮座を構成していた。
村から外すとは、村人の権利を剥奪し、村人でない者にすること。
宮座から排除するとは、村人ではあるが、村掟や村の取り決めの寄り合いに出席できず、議決権を失うこと。
参照：「中世・近世の村と地域社会」 西村幸信著　思文閣出版
「中世惣村史の研究」 仲村研著　法政大学出版局

③ 共同作業

垣内の単位でさまざまな共同作業が行われていました。そして、その共同作業が終わると、カシワのすき焼きやニシンを肴に会食が行われていました。

- ○ 共同田の耕作。
- ○ 井戸の補修。
- ○ 井路・水路の掃除。
- ○ 道普請。
- ○ 共有林の下草刈りや植林。
- ○ 水害の後始末。
- ○ 祭りなど神社仏閣の行事。
- ○ 屋根の葺き替え。
- ○ 棟上式。

④ 三つの経済

村という地域共同体には三つの経済があり、それが均衡していました。ここでいう経済は、経世済民ということです。世の中を治め、人々を助けるということです。その意味で、経済というのは政治そのものだったのです。少なくとも昭和 40（1965）年ま

では村々に三つの経済が機能していました。茨木でもそうでした。
三つの経済とは、次のとおりです。

第一は、自給自足の経済です。

村では、どこの家でも衣食住の何かを自給自足していました。中でも食の自給自足は殆どの家が行っていました。衣についても蚕を飼ったりして自給自足する家がありました。住についても屋根の葺き替えなどは垣内で助け合いながら自給自足していました。

自給自足は、一軒の家で生活のすべての面を満たすのは難しいので、それを補うものとして贈答が頻繁に行われました。相手の家で自給自足できていないものを融通して贈ったのです。この風習は１回贈ると相互に７回くらい往来があったといいます。贈答は、自給自足の過不足を補完する仕組だったのです。お中元やお歳暮の風習はこれが起源です。

第二は、助け合いの経済です。

結いともいわれています。茨木では、手間替え・テッタイアイ・仲間手などといっていたようです。農村では農作業の結いは日常的でした。田植や稲刈りなどをお互いに手伝いあって行ったのです。この結いは均等交換が原則でしたから、馬を一日借りれば､馬を一日貸すことになっていました。一日稲刈りをすれば、一日稲刈りをしてもらえました。借りたことを返すのを結い返しといっていました。

結いが組織のかたちを取っていたものがあります。

○ 同行（ドウギョウ）

同行とは、葬祭を手伝う組織です。いわゆる葬式組です。

村で人が亡くなると、同行がすべてを取り仕切って行いました。同行は、垣内と一致する場合とそうでない場合があったようです。

○ 講

講というのは、門徒集団が信仰のために定期的に集うもの、困った村人を助けるための頼母子講のようなもの、神社仏閣への参詣のために行うもの、共同でモノを購入するためのもの、親睦のために行うものなどがありました。特に、頼母子講は、最初は困っている人にお金を無償で提供し、二回目からは利子を取るようなものだったようです。今でも、神社仏閣へ村人を代表して参詣してもらうために、餞別を渡してお札を持ち帰ってもらうような講が残っています。あるいは親睦を目的とする講も残っています。

○ 山上がり

蚕や寒天やケシなどの事業に失敗して、山上がりを宣言する場合も助け合いの経済です。山上がりは、それを宣言した村人には誰の山で何を採取してもいい融通が与えられます。村の人々は味噌を充分に持たせてやります。山上がりする家では、家族が山で糧を得て食いつないでいる間に、主はまちへ出て金を稼ぎます。大体１年で借金を返し、家族も山を下りたようです。勿論、山に命をつなぐ糧があり、それを使う技術や知恵がなければできないことです。今では自然破壊が進んで、山上がりしても生きていくのは難しくなっているかもしれません。

第三は貨幣経済です。

村という共同体が機能していた時代には、村の人々は金が必要になると、モノと金を交換して金を使いました。金はそれなりに必要だったのです。そして、三つの経済がほどよく均衡し、補い合っていました。これが社会を安定させていました。三つの経済が均衡するには、そこに文化や規範が機能していなければなりません。それがあったのです。

ところが、現在の貨幣経済は金が金を増殖する経済です。金を持っていないと金は増えません。金を持っている人や企業しか、金を増殖することができません。バブル経済はその典型でした。今起こっている金融恐慌もそうです。金が金を増殖する貨幣経済には文化や規範がありません。何でもありで、あらゆる手を使います。道理や法など無視されます。貨幣経済一極では、人間社会は崩壊してしまいます。

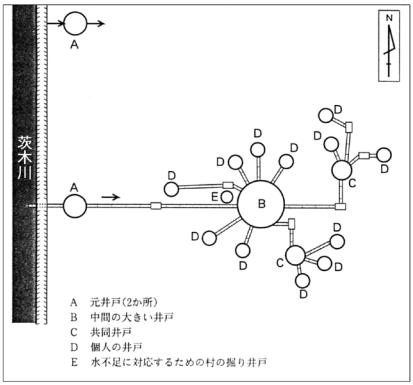
３、竹管水道の井戸仲間が町民自治を育んだ

大野幾子

茨木市内で見られる特色のある飲料水確保の方法の一つとして、竹管による水道があげられます。日本では江戸時代初期から地下に埋設した管によって、飲料水を各家に送る伝統的な上水道のシステムが各地に見られました。最も著名なものは江戸の町に網の目のように敷設された上水道で、多摩川の上流部などから取水して江戸の町まで水路を引き、市中に入ると管を埋設し武家屋敷や城下に水を送っていました。板を組み合わせて作られた管が、近年発掘調査などで多数出土しています。また、高槻でも旧高槻城付近で竹管による上水道が近年発見されています。これらの伝統的な上水道は今日の上水道とは異なり、水処理を行わないで天然の水を供給し、また加圧せずに地形による水圧だけで配水するものでした。これらの伝統的上水道は都市を中心に普及し、明治以降は近代的水道システムの普及にともなって廃止されましたが、茨木の場合、このような伝統的な上水道システムが比較的近年まで伝承されてきたところに特色があります。また、領主によって敷設、管理されたものではなく、庶民が自ら作り出した手作りの水システムであること、茨木地区のような都市部だけではなく、農村部にもみられることにも注目すべきでしょう。

粟生岩阪では、集落の一番高い山裾の部分に水源地があり、そこに設置した桝に山水をためて竹で集落まで水を導いていました。管は青竹の節をくりぬいて作られ、竹のつなぎ目は会所と呼ばれていました。これはマクラと呼ばれる木に穴をあけ、

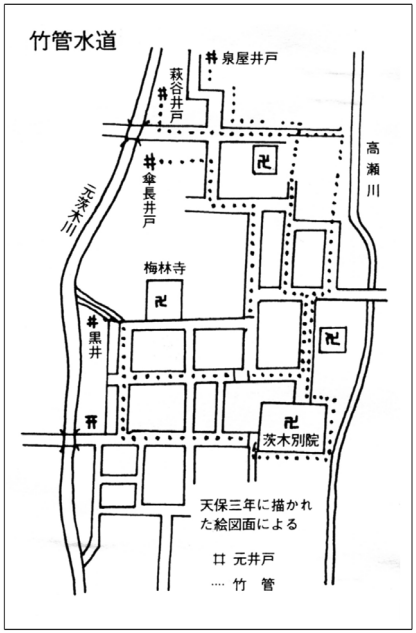
そこに竹を差し込んで接続したものです。集落内には上、中、下の三つの井戸があり、住民は近くの井戸に飲料水を汲みに行き、洗濯や米とぎなどの作業も井戸の近くで行われました。この井戸は仲間井戸と呼ばれていました。井戸や竹管の管理は地区がおこなっていました。



竹管水道の配置図（水尾）「新修茨木市史　第 10 巻」

平野部の水尾の場合は、水源は茨木川の伏流水でした。川の堤防の下に元井戸二ケ所を掘り、そこから竹管で各家庭の井戸まで水が運ばれていました。一つの元井戸を十数軒の家が共同利用していました。

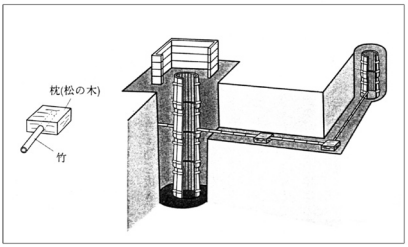
同様の設備は平野部に広く分布していましたが、いずれも昭和 30 年代に上水道の普及によって使われなくなりました。



「わがまち茨木　水利編」

市内でも最も大規模な伝統的な上水道のシステムが見られたのは、やはり都市部の茨木地区です。茨木では町のすぐ右側を茨木川が走っていたためその伏流水が水源となりましたが、ことに上泉町周辺はその名の通り良い水が湧出することで名高

く、上泉町周辺に元井戸が設けられていました。聞き取り調査や近世の絵図によって復元した竹管水道の敷設状況は図に示したとおりです。ここに記したのは萩谷井戸と泉屋井戸の二系統で、このほかに茨木神社境内の黒井を水源にするものと、傘長井戸と呼ばれるものがあり、全部で四系統の竹管水道が存在しました。



竹管水道の模式図「新修茨木市史　第 10 巻」

黒井は、現在は元町となっているかつての城ノ町と呼ばれた地域に水を供給していました。また、傘長井戸の利用範囲はよくわかりませんが、妙徳寺前に元井戸があったようです。

萩谷井戸の場合、元井戸は上泉町の水田の中にあり、そこから竹管が出ていました。つなぎ目はブンスイや会所と呼ばれ、それに使われたマクラと呼ばれる木は松でできていました。水道は道の下 1.5 メートルくらいの場所に埋設されており、加入者の家の前で分岐していました。この分岐には一斗樽が使われ、支管と分水樽との接点に水量調整を目的とした操作弁（三日月）が取り付けられていました。

借家などでは井戸は共有でしたが、一戸建ての場合、分岐から管はトオリニワの下を通り、家の裏側にある炊事場の井戸まで導かれていました。各家庭ではこの井戸にたまった水をひしゃくや桶で汲んで利用していました。水不足のときには各家の井戸の水位も低くなったといいます。

大正５(1916)年から書き始められた「井戸修繕費勘定」（萩谷

家文書）によると、大正５年には 58 戸分が萩谷井戸に加入していましたが、一軒で複数の井戸を利用している者も多く、実際の加入者は 38 軒でした。当時この井戸を使っていたのは北外之町、東外之町、東突抜町、鳥屋町の４つの町でしたが、各町から２～３人の代表が出て合計９人が勘定立会い人として会計などの立ち合いをしていました。

竹管水道には故障が多く、毎年修繕が必要でしたが、その必要経費などは利用している井戸の数に応じて各戸が負担するようになっていました。工事そのものは専門の業者に依頼しましたが、土の掘削などは加入者が自分で行っています。

泉屋井戸の元井戸も上泉町にあり、そこから出た竹管は今日の阪急本通商店街にまで伸びていました。水道の構造はほぼ萩谷井戸と同じです。泉屋井戸は昭和初期からあまり使われなくなり、現在残されている「井戸会計帳」（榎浪家保管文書）によると、昭和 19（1944）年にゴム管などを補修したのが最後の実際的な支出となっています。その当時の加入者は 23 人でした。その他の泉屋井戸仲間の関係書類綴りに、泉屋井戸仲間の組織、配管図、経費、申請書、公文書などの書類が保管されていて、昭和初年（大正 15 ～ 16 年）の竹管水道の状況を知る上での貴重な資料です。

- 泉屋井戸仲間ではおよそ 50 戸くらいだったが、他では 30 ～ 80 戸のところもあった。
- 泉屋井戸仲間の竹管は、総延長約 480 間（870 メートル）とおもわれる。
- 水道料は一本につき年分水管１円を納め、本管（竹管）の

取替え期には、各戸とも４円の準備金を負担していたようである。

○ 年一度の井戸掃除や竹管の点検､修理などすべて共同で行っていた。また、経費も各戸から均等に徴収されていたようである。

○ 水見まわり役が定期的に分水樽の三日月をチェックして、水の需給のバランスを保っていたようである。

○ 本管を埋設している道路の使用については５年ごとに、町道は茨木町役場、府道は大阪府土木事務所へ「道路占用願」を提出して許可を受け、占用料金として１年に６円を納付している。

○茨木市で水道事業が始まったのは、茨木町時代の昭和４年で、その頃までこの竹管水道が使われていたようである。

○私設水道「泉屋井戸」仲間は、正式には昭和 20 年３月末日をもって終わっているようである。

参考文献 「茨木市史・わがまち茨木」

４、ふるさとって何だろう？
佐藤眞生

ふるさとは、しばしば生まれ育ったところといわれます。それは、今の日本人がふるさとから遠くはなれて住んでいるからなのでしょう。そして、殆どの人々が生まれたところと、死に場所が違っていることとも関係があるかもしれません。しかし、昔々の大昔には、生まれ育って死ぬところがふるさとでした。ふるさとは、生まれ育って死ぬ土地のことでした。故郷の「故」という字は、元々という意味と死ぬというふたつの意味を持っています。「郷」は区画された土地という意味です。つまり、故郷は生まれて暮らして死ぬ場所なのです。

身土不二という言葉があります。仏教の本に出てきます。体と土はひとつという意味です。これにはふたつのことが含まれています。ひとつは、生き物は生まれた土地に適応しているということ。もうひとつは、生まれた土地の三里とか四里四方でできるものを食べるのが心身に最もいいということ。生まれた土地の食材を摂るということは不易な食生活の体系につながります。例えば、食べ物の腸内通過時間を比較してみるとわかります。アフリカやインドでは 10 時間、イギリスでは 80 時間、日本では 40 時間というデータがあります。これは生まれた土地に必然な不易の食生活体系が違うことを示しています。

いま、日本人はこの独特の不易な食生活の体系を失っています。生まれた土地に見合った食生活の体系を捨ててしまいました。心身の乱れはここに起因しています。

心身は生まれた土地に適応しており、そこにできるものを食べておれば心身に最もいいということは、実は動かない生き方が最もいいということを意味しています。動物は動く生き方を選択していますが、植物は動かない生き方を選択しています。動かない生き方とは、どんな生き方でしょうか？

まず、第一に、植物は芽生えた場所に適応できるように体を造り替えます。例えば、茎が短くて他の植物に太陽光の獲得競争で負けている植物は、早めに花を咲かせて種を飛ばします。流水をかぶる植物は、葉を細くして水の抵抗を押さえます。そして、根は水のあるところまで伸びていきます。

第二に、植物はエネルギー源を自前で造ります。植物は二酸化炭素と水から光合成によって炭水化物、つまり、糖を造って生きています。動物はこれができないので、他の生き物を食べることでしか生きていけません。

第三に、植物は体の一部を失っても自分で修復します。根や茎は、その一片だけで植物全体を再生してしまいます。挿し木や挿し目を考えれば一目瞭然です。

第四に、植物は必要なものを呼寄せます。子孫を残すために、虫を呼び、鳥を呼びます。そのために、花や実や匂いで、虫や鳥を誘います。

第五に、植物はすべてを受け容れながら自在に生きています。虫が葉を食べても、鳥が巣を組んでも、人間が薪や材木にするために木を切っても、一言も文句をいいません。そういうことを全部受け容れることを生き方にしています。100％自然に遵って生きています。それでいて、たくましく、しっかり生きています。

植物の動かない生き方を要約すると次のようになります。人間も、ふるさとがふるさとであった昭和 40（1965）年までは、動かない生き方、つまり、自然に沿う生き方をしていました。

① 動かない生き方をする植物は、存在するだけで他の生き物の役に立ちます。
② ということは、自然に 100%適応しているということです。人間でいいますと、自給自足と、自然食つまり、身近にある食材を、旬に、組み合わせた、不易の食生活をしているということになります。
③ 自然に適応しているので、社会にも適応できます。人間でいいますと、結いつまり、助け合いと、交換財としての貨幣の利用です。貨幣は増殖だけを目的とするものではなく、社会適応の手段の一つなのです。
この②と③があるのが、ふるさとそのものです。昭和 40（1965）年を境に、日本人はふるさとを失ってしまいました。つまり、生まれたところと、暮らすところと、死ぬところがバラバラになってしまいました。そのために、心身が乱れてしまったのです。
④ 社会適応ができると、そこに高い精神性が生まれます。これは、人間に喩えますと、異質のものを受け容れるこころであり、幸せではなく幸いを優先するこころです。
⑤ このような構造があって初めて優れた文化が生まれます。文化というのは、伝承であり、不易です。伝承も不易も高い精神性がないと行われないからです。

わが茨木にも、垣内という地縁組織があり、イットウという同

族集団があり、イッケと呼ばれる親密なつきあいがありました。
　村掟があり、共同作業があり、自給自足と、同行や講などの助け合いがありました。
　ここまではおおよそどこの地域にもみられる共同体のありようです。しかし、竹管水道の井戸仲間は町民主導の仕組であり、生活共同体の根幹を形成する自治組織でした。茨木の固有性がここにあります。実に誇らしく、伝承すべき宝です。

執筆者紹介

サトウ マオ
佐藤眞生　本書編集長

腹六分・穀菜食中心・毎週２回半日断食・毎日２㍑摂水・丹田呼吸。野菜自給 12 年目。野草てんぷらの普及。家族と地域に根ざし、縄文人の魂に師事。

ミムラ フミ
三村夫美

茨木の伝説「媛踏鞴五十鈴媛」と、南茨木で出土した銅鐸の鋳型を結びつけて物語を創作した。茨木市民文化フォーラム、茨木市民文化の会所属。

カセヤマキイチ
桛山紀一

安威在住の小説家。作品に「弁栄上人伝聞記」「阿武山原子炉設置反対運動」等多数。千島学説の権威としてその方面の著書多数。安威歴史研究会代表。昭和 16 年生。68 歳。

ウメバチ アキヒデ
梅鉢明英

大阪府の高校教諭を昨春 35 年で終了。15 年前に立ち上げた「耶馬台国を三島に探る会」の代表として卑弥呼研究を続け、昨秋「大和の証明」６冊目を刊行。

オオハシ ヒデユキ
大橋豪之

1947 年滋賀県生まれ。野菜・果物自家栽培の実家で 10 歳まで過ごし、58 年京都へ転居。近畿大学卒業後、玩具業界で仕事。退職後、管理人となり８年目。

キョウタニ シンヤ
京谷信弥

「ふるさと茨木連帯」世話役で、毎年「茨木再発見自転車ツアー」を開催。自他共に認めるサイクルツーリスト。茨木市水尾在住。61 歳。

アカマツ キゴセイ
赤松木子生（赤松民男）

京都府宮津市字木子（キゴ）に生を受け、サラリーマンを経て、終の棲家を茨木と定め、茨木霊園に墓も建立済。今や自然農と地域活動を楽しむ生活を送る。

カタヤマ シゲマサ
片山重正

茨木市在住 19 年。退職後地域の健康をテーマに活動中。市民農園で野菜作りをするうちに茨木の農の歴史に関心を持つようになる。

オオノ チカコ
大野幾子

昭和 54（1979）年生まれ。茨木市在住。最初の一歩会として、無農薬野菜収穫ツアーや山歩きの会などを年に数回、茨木市内で開催。

フクマル タカユキ
福丸孝之

兵庫県神戸市生まれ。神戸高専を卒業後、会社員。茨木市下穂積在住。林英臣政経塾・塾長・林英臣氏との出会いにより政治家を志す。現在、保険代理店業を営む。

ヤスオ フミコ
安尾文子　イラストマップ

大学卒業後、食品業に就職し、広報・販売促進を手掛ける。建設業に転職しデザイン部に配属。独学でＰＣ操作を覚える。現在、主婦の傍ら、自宅でイラスト等の仕事を請け負う。

タケウチ　コウ
竹内　洪　表紙デザイン

サンドブラストガラス工芸の創始者で、世界的な第一人者として活躍中。カンヌ国際芸術展賞、ニューヨークＳＯＨＯ大賞、イギリスミドルスブロウ美術館国際グランプリなど多数受賞。

茨木がまちになった６つの物語

2009 年　4 月 10 日　紙版発行
2010 年 12 月 10 日　電子出版発行

著　　者 —— **ふるさと茨木連帯**
発 行 者 —— 桐生敏明
紙版発行 —— 株式会社かんぽう
電子出版 —— 編集工房ＤＥＰ

©Hurusato IBARAKI Rentai　Printed in Japan 2009